

史 跡

# 上之國勝山館跡 XXI

—平成11年度発掘調査環境整備事業概報—



2000・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

# 上之國勝山館跡 XXI

—平成11年度発掘調査環境整備事業概報—

2000・3

上ノ国町教育委員会



# 序

長かった鉛色の空から解き放たれる季節の到来。路面を伝う雪解け水、窓ガラスから差し込む陽光の温もり、誰もが日の長くなったことを素直に喜び合う北辺の春の訪れです。

昨年の5月に始めた遺構確認調査の調査箇所は、勝山館跡の直下、国道228号に面する重要文化財・旧笹浪家住宅の周辺。行き交う車両の轟音に悩まされながらの汗だくの作業でありましたが、見学者が多く、発掘作業に従事している女性たちがガイドに早変わりしなければならない場面もありました。

この間、文化庁記念物課をはじめ関係各機関の諸先生、調査研究専門員としてご指導をお願いしている朝尾直弘、網野善彦、石井進、榎森進、仲野浩の諸先生には遠路お越しいただき、懇切丁寧なご指導ご助言を賜りました。また建築学の立場からご指導を頂戴している文化学院の鈴木亘先生にも貴重なご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。

イクパスイ（棒酒筥）を筆頭に、「三む志ろ」と墨書のある木簡、アイヌ民族最古の小弓、鉾状木製品など出土した多くの遺物は、マスコミで取り上げられ、世間の関心は高まったように思われますが、当地方のアイヌとの関わりはそれら遺物だけでなく、地名にも確実に遺っており、アイヌとの関係を各方面から追究しなければ地域史を描ききれない、そういう局面に立ち至ったと考えております。

また、9月に行われた勝山館跡発掘調査二〇周年記念シンポジウムは盛況裡に終わり、今秋には記録集として出版される運びとなりました。これも偏に多くの先生方のお骨折りの賜物と衷心より感謝する次第であります。

実り多かったシンポジウムの反省に立ち、文化財課5名のスタッフが自ら演壇に立ち、開講した歴史講座には、延べ250人の地域住民が参加、地域に根づいた文化財行政の今後の在り方を大きく示唆させてくれるものであります。地域住民とともに地域史を語り合い、共有したい、失われていくものに光をあてたい、そんなささやかな願いが叶った講座でありました。

今後とも精進に努め、開かれた文化財行政を推進して参りたいと考えておりますので、関係各機関、諸先生方には、より一層ご助言ご叱正を賜りますよう切にお願い申しあげ、刊行の挨拶といたします。

平成12年3月

北海道檜山郡上ノ国町教育委員会  
教育長 上野秀勝

## 本文目次

序

本文目次／挿図目次／表目次

例言／引用参考文献

### 第1部 勝山館跡宮ノ沢川右岸地区の調査

I 調査の概要	1
II 遺構確認調査	4
1. 調査目的	4
2. 検出遺構と出土遺物	4
(1) 位置・概要	4
(2) 層序	4
(3) 遺構	4
(4) 出土遺物の概要	34
III 小括	56
IV 保存処理	59
V まとめ	59
VI 上之国勝山館遺跡出土遺物の金属考古学的調査結果	63
1. はじめに	63
2. 調査資料	63
3. 調査試料片の摘出	63
4. 分析方法	64
5. 分析結果	64
6. 考察	67
VII 低湿地性堆積物から検出された花粉・孢子と寄生虫について	72
1. 試料	72
2. 試料の処理方法	72
3. 分析結果	72
4. 若干の考察	76
第2部 夷王山墳墓群第II地区の調査	
I 遺跡の概要	77
II 遺構の確認調査	77
1. 調査目的	77
2. 位置	77
3. 調査法	77
4. 調査経過	77
5. 基本層序と堆積状況	77
6. 検出遺構	77
III まとめ	84

## 挿図目次

第1部

第1図 遺跡地形図・調査区位置図	2
第2図 調査区範囲図	3
第3図 調査区土層堆積図	5
第4図 宮ノ沢川右岸地区遺構配置図	11
第5図 調査区遺構配置図1	13
第6図 調査区遺構配置図2	15
第7図 調査区遺構配置図3	17
第8図 調査区遺構配置図4	19
第9図 調査区遺構配置図5	21
第10図 鍛冶関連遺物分布図	23
第11図 土壌5平面図他	27
第12図 土壌13平面図他	28
第13図 杭列検出状況図	29
第14図 木製品等出土状況図	31
第15図 配石状遺構平面図他	33
第16図 調査区出土遺物(中国陶磁)	36
第17図 調査区出土遺物(瀬戸・美濃、志野)	37
第18図 調査区出土遺物(唐津)	38
第19図 調査区出土遺物(唐津・備前)	39
第20図 調査区出土遺物(唐津)	40
第21図 調査区出土遺物(唐津)	41
第22図 調査区出土遺物(肥前磁器他)	42
第23図 調査区出土遺物(木製品)	43
第24図 調査区出土遺物(木製品)	44
第25図 調査区出土遺物(木製品)	45
第26図 調査区出土遺物(木製品)	46
第27図 調査区出土遺物(木製品)	47
第28図 調査区出土遺物(木製品)	48
第29図 調査区出土遺物(木製品)	49
第30図 調査区出土遺物(木製品)	50
第31図 調査区出土遺物(木製品)	51
第32図 調査区出土遺物(木製品)	52
第33図 調査区出土遺物(骨角器他)	53
第2部	
第1図 調査区土層堆積図2-79(夷王山墳墓群第II地区)	79
第2図 遺構配置図(夷王山墳墓群第II地区)	81
第3図 土壌2・5平面図他	83

## 表目次

表1	南北セクション東壁土層観察表(A-A')	7
表2	南北セクション西壁土層観察表(B-B')	7
表3	南北セクション東壁土層観察表(C-C')	7
表4	南北セクション東壁土層観察表(D-D')	8
表5	南北セクション西壁土層観察表(E-E')	8
表6	東西セクション南壁土層観察表(F-F')	9
表7	調査区北壁土層観察表(G-G')	9
表8	北東セクション南壁土層観察表(H-H')	9
表9	東西セクション南壁土層観察表(I-I')	9
表10	東西セクション東壁土層観察表(J-J')	10
表11	東西セクション南壁土層観察表(K-K')	10
表12	土壌5土層観察表	27
表13	土壌13土層観察表	28
表14	遺物計測表	55
表15	出土遺物(陶磁器)集計表	61
表1a	調査資料(鉄器)	63
表1b	調査資料(鉄塊・羽口)	63
表1c	調査資料(銅製品・るつぽ)	63
表2	鋼製鉄器の分析結果	65
表3	鑄造鉄器の分析結果	65
表4	鉄塊の分析結果	65
表3	鉄滓の分析結果	66
表6	銅関連資料の化学組成	66
表7	出土鉄器の化学組成と非金属介在物組成	69
第1表	宮ノ沢川右岸トレンチ5・A地点で検出された花粉と寄生虫卵について	73
第2表	宮ノ沢川右岸トレンチ5・B地点で検出された花粉・胞子	74
第3表	宮ノ沢川右岸トレンチ5・A地点で検出された寄生虫卵	75
第4表	宮ノ沢川右岸トレンチ5・B地点で検出された寄生虫卵	76
第2部		
表1	東西セクション南壁土層観察図(A-A')	79
表2	南北セクション東壁土層観察図(B-B')	79
表3	土壌2土層観察表	84
表4	土壌5土層観察表1(A-A')	84
表5	土壌5土層観察表2(B-B')	84

## 写真図版目次

PL. 1	調査区全景
PL. 2	遺構検出状況
PL. 3	出土遺物
PL. 4	出土遺物
PL. 5	調査区全景
PL. 6	遺構検出状況
PL. 7	遺構検出状況
PL. 8	遺構検出状況
PL. 9	調査区遠景他
PL. 10	遺構検出状況
PL. 11	遺物出土状況
PL. 12	出土遺物
PL. 13	組織観察結果
PL. 14	組織観察結果
PL. 15	組織観察結果
PL. 16	組織観察結果
PL. 17	組織観察結果
PL. 18	組織観察結果
PL. 19	出土鉄器・鉄塊の成分比他
PL. 20	主な花粉・胞子と寄生虫卵

## 附図 宮ノ沢川右岸地区遺構配置図

## 例 言

1. 本書は史跡上之國勝山館跡の平成11年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。
2. 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。  
調査主体者 上ノ国町教育委員会  
教育長 上野秀勝  
指導 上ノ国町文化財保護審議会特別委員  
文化学院講師 鈴木亘  
同勝山館跡調査研究専門員  
京都橘女子大学教授 朝尾直弘  
前神奈川大学教授 網野善彦  
鶴見大学客員教授 石井進  
東北学院大学教授 榎森進  
東北芸術工科大学特任教授 仲野浩  
上ノ国町史跡整備検討委員会  
東北芸術工科大学特任教授 仲野浩  
東北芸術工科大学教授 田中哲雄  
東北芸術工科大学教授 宮本長二郎  
東北学院大学教授 榎森進  
工学院大学教授 渡辺定夫  
文化学院講師 鈴木亘  
主管 上ノ国町教育委員会文化財課 課長  
渡部孝之 主任学芸員 松崎水穂 文化財  
係長 斉藤邦典 博物館・整備係 松田輝  
哉 笠谷将人 嘱託調査員 三浦英俊 臨  
時事務補 徳光志保  
発掘担当者 松田輝哉  
調査員 松崎水穂  
調査補助員 山崎洋子 笠谷奈智子 竹内江  
美子  
作業員 浅原すみ 池田陽子 井越祥子 小  
田川喜美子 奥寺京子 川合冴子 川口泰  
子 杉山稲子 鈴木千春 住吉春子 沼沢  
国枝 八田揚子 藤田裕美 松本津枝子  
目黒加奈子  
保存処理作業員 木村洋子 油谷和枝
3. 本書の編集は松崎、松田が協議の上、松田が  
行った。本書の作成はⅠ・Ⅳを松田、Ⅱ・Ⅲ  
を松田・松崎、Ⅳを松崎の分担で執筆し、文  
末に氏名を記した。鉄塊等の分析を岩手県立  
博物館赤沼英男氏、花粉分析を北海道開拓記  
念館山田悟郎氏に依頼し、玉稿を賜りⅤ・Ⅵ  
とした。遺構配置図は笠谷、土層観察表は竹  
内が作成した。
4. 挿図の作成は担当者、調査員の指示により調  
査補助員、作業員が行った。挿図中の方位は  
真北を示す。
5. 土層の土色は「新版標準土色帳」（農林水産  
技術会議事務局）を用い、目測で比定した。
6. 本書の調査時の写真は松田、松崎が撮影した。
7. 調査にあたっては、次の関係機関と各位に多  
大な御指導と御援助を賜った。  
文化庁記念物課 本中眞 伊藤正義 平沢毅  
坂井秀弥 岸本直文 加藤真二、建造物課  
益田兼房 大和智 西和彦 下間久美子、北  
海道教育庁文化課 畑宏明 大沼忠春 千葉  
英一 工藤研二 田才雅彦 貫井隆三 安岡  
政光 多田博昭、福島県教育庁文化課 飯村  
均、東京国立博物館 佐々木利和、東京国立  
文化財研究所 平尾良光、奈良国立文化財研  
究所 山下信一郎、文化財建造物保存技術協  
会 岸茂 近藤光雄 松本優、北海道立アイ  
ヌ民族文化研究センター 古原敏弘、国立歴  
史民俗博物館 小野正敏、国立民族学博物館  
大塚和義、北海道大学 小野哲也、同北方資  
料室 山口國雄、道都大学 鈴木正章、北見  
工業大学 桜井宏、東北大学 入間田宣夫、  
関根達人、宮城教育大学 遠藤巖、山形大学  
松尾剛次、福島大学 工藤雅樹、筑波大学  
松本建速、千葉大学 玉井哲夫、立教大学  
荒野泰典 山浦清、昭和女子大学 児島恭子、  
鶴見大学 大三輪龍彦 河野眞知郎、新潟大  
学 矢内俊文、同志社大学歴史資料館 鋤柄  
俊夫、奈良大学 水野正好、高知大学 市村  
高男、釧路湖陵高等学校 中村和之、北海道  
開拓記念館 山田建 山田悟郎 平川善祥  
氏家等、道立北方民族博物館 齋藤玲子、市  
立函館博物館 長谷部一弘、市立函館博物館  
五稜郭分館 佐藤智雄、余市町水産博物館  
浅野敏昭、八戸市博物館 佐々木浩一、岩手  
県立博物館 赤沼英男、山形県立うきたむ風  
土記の丘考古資料館 川崎利夫、東北歴史館  
小井川和夫、愛知県陶磁資料館 井上喜久男、  
常滑市民俗資料館 中野晴久、日本モンゴル

民族博物館 金津匡伸、ミュージアム知覧  
上田耕、北海道埋蔵文化財センター 木村尚  
俊 種市幸生 花岡正光 田口尚 鈴木信  
富永勝也 福井淳一 立田理、札幌市市民局  
文化財課 柏木大延、石狩市教育委員会 石  
橋孝夫、江別市教育委員会 佐藤一志、江差  
町教育委員会 藤島一巳 宮原浩、南茅部町  
教育委員会 福田裕二、上磯町教育委員会  
森靖宏、松前町教育委員会 久保泰 前田正  
憲、余市町教育委員会 乾芳裕、平取町教育  
委員会 森岡健治、市浦村教育委員会 榊原  
滋高、中里町教育委員会 齊藤淳、浪岡町史  
編纂室 工藤清泰、弘前市教育委員会 成田  
正彦、岡本康嗣、岩井浩介、十和田市教育委  
員会 山崎武、八戸市教育委員会 工藤竹久、  
南部町教育委員会 永井治、平泉町教育委員  
会 本澤慎輔、仙台市教育委員会 田中則和、  
秋田県埋蔵文化財センター高橋 学、秋田市

役所 菅原俊行、秋田市教育委員会 小松正  
夫、納谷伝広、山形県埋蔵文化財センター  
山口博之 高桑登 水戸弘美、三春町教育委  
員会 平田禎之、豊島区遺跡調査会 水本和  
美、八王子市教育委員会 戸井晴夫、小田原  
市教育委員会 諏訪間順 山口剛志、愛知県  
埋蔵文化財センター 鈴木正貴、瀬戸市埋蔵  
文化財センター 檜崎彰一 藤沢良祐 金子  
健一 佐野元、魚津市教育委員会 塩田明弘、  
石川県埋蔵文化財センター 小嶋芳孝、七尾  
市教育委員会・同市史編纂、川俣町教育委員  
会 高橋圭次、豊島区立郷土館 橋口定志、  
ミミズク工房 笹野武則、江差町史編纂室  
宮下正司、中村五郎、東都文化財保存研究所  
朝重嘉朗 浦野潔 大野清奈、吉田生物研究  
所 吉田浩一、木村勝美、森兼夫、竹内茂彦、  
竹内正章、北海道開発局函館開発建設部江差  
道路事務所（順不同 敬称略）

## 引用参考文献

- 『綱要日本紋章學』 1928年 沼田頼輔  
『北海道原始文化聚英』 1933年 犀川会  
『上ノ国村史』 1956年 松崎岩穂  
『続上ノ国村史』 1962年 松崎岩穂  
『北方探検記』 1962年 H. チースリク編  
『アイヌ文様』 1974 杉山寿栄男  
『中世蝦夷史料』 1983年 海保嶺夫編  
『第5回中世遺跡研究会資料集 中世遺跡出土の  
漆器』 1985年 同実行委員会・広島県草戸千  
軒町遺跡調査研究所  
『肥前陶磁』 1988年 大橋康二  
『蝦夷生計圖説』 1990年 河野本道・谷澤尚一  
解説  
『尾張陶磁』 1992年 井上喜久男  
『東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料篇』  
1992年 東京国利博物館  
『特別展 蝦夷の風俗画』 図録 1992年 北海道  
立近代美術館・北海道立旭川美術館  
『瀬戸市史 陶磁史篇四・六』 1993・1998年  
瀬戸市史編纂委員会  
『中世須恵器の研究』 1994年 吉岡康暢  
『アイヌのイクバスイ』 1994年 フォスコ・マ  
ライニ著 ロレーナ・ステンダールディ訳  
『概説 中世の土器・陶磁器』 1995年 中世土  
器研究会編  
『中・近世の北陸』 1997年 北陸中世土器研究  
会編  
『美沢川流域の遺跡群XV・XⅧ・XX』 1992・1996  
・1997年（財）北海道埋蔵文化財センター  
『大阪城跡の発掘調査4』 1994年（財）大阪  
文化財センター  
『漳州窯』 1997年 福建省博物館  
『史跡上之國勝山館跡Ⅰ～XⅩ』 1980～1999年  
上ノ国町教育委員会  
『夷王山墳墓群』 1984年 上ノ国町教育委員会  
『夷王山墳墓群Ⅱ』 1991年 上ノ国町教育委員会  
『上ノ国漁港遺跡』 1987年 上ノ国町教育委員会  
『町内遺跡発掘調査事業概報Ⅱ』 1999年 上ノ  
国町教育委員会  
『国史大辞典』 1984～1996年  
『日本民具辞典』 1997年 日本民具学会  
『15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』  
『貿易陶磁研究2』 1982年 小野正敏  
『バスイ集成・基礎分類篇』 1994年 戸部千春



【紋別市郷土博物館報告 第7号】  
「北海道東北地域の火葬概観」1995年 山口博之  
【シンポジウム資料集 中世の火葬—その展開  
と地域性—】  
「イクバスイ集成 —清野謙次コレクションより

—」 三宅正浩 1996年 【大阪府立近つ飛鳥  
博物館 館報1】  
【月刊文化財 平成4年4月号】 1992年 文化  
庁

# 第1部 勝山館跡宮ノ沢川右岸地区の調査

## I 調査の概要

### 1 調査

史跡上之国勝山館跡は昭和52年国指定、54年より環境整備に伴う発掘調査を実施し、本年度は21年目の調査になる。これまでに館中心部や伝侍屋敷地区を中心に調査を進め、300棟を越える建物遺構や土壌、柵列、壕を検出している。出土遺物は、中国製陶磁器をはじめ七万点以上を数える。又、骨角器やその未製品、シロシのある白磁皿やマキリ鞘等は館内にアイヌの存在を推測させ、上ノ国における和人・アイヌ交流を窺わせる資料として注目されている。

本年度は、館主体部直下の市街地の一画の調査を行った。館下の地区は平成7年度より発掘調査・分布調査が行われ、勝山館期や近世の遺物が出土し、従来から指摘されていた勝山館の城下町や近世の町場に関する資料が蓄積されつつある。今年度調査は、これら一連の勝山館館下の調査に連なるものである。又、本年度4月から行われた東隣接地で住宅建て替えに伴う発掘調査等について「上ノ国市街地遺跡調査報告3」として今年度報告がされているので併せて参照されたい。

### 2 調査法

史跡境界ラインを基準とし、4m×4mのグリッドを設定した。南北ラインををアルファベット、東西ラインを数字で示した。測量方法は平板若しくは遣り方測量にたつた。遺物の取り上げ方法は、I層はグリッドを2m×2mに4分割して一括取り上げをし、II層以下は実測図に記録した後、レベルを付して取り上げた。IIc層には一部一括取り上げのものもある。又、IIc層はその殆どをサンプリングし、屋内で水洗し、微細遺物の検出を行った。遺構図は土壌は1/10、柱穴、溝、石積み等は1/20、遺物分布図は1/20で作成したが、IIc・d層は木製品の出土状況が分かるよう1/10で作成した。

### 3 調査経過

5月11日 調査区南部より調査開始。人力による表土除去作業。トレンチ1で堀跡を検出。旧笹浪

家住宅主屋のはなれ基礎石と推される石列を検出。土壌5を調査。6月初旬 主屋正面石垣を検出。7月上旬 調査区西部IIc層より陶磁器、木製品多数出土。8月6日 IIc層より木簡、イクパスイ出土。9月30日 丸木弓出土。10月26日 埋め戻し作業等終了。器材の撤収を完了し、調査終了とした。

### 4 基本層序

基本的には勝山館跡中心部等の調査を基準に依拠したが、今回の調査では一部細分している。

I層 近代以降の整地層。一部細分される。

a層 黒色土、褐色土（昭和30年代以降）

b層 黒色土、褐色土（昭和30年代以前） 続上ノ国村史口絵写真で見られる旧笹浪家路面等が相当する。

II層 出土遺物、土質から4層に細分される。

a層 黒色土、褐色土。（1640年以降～近代）

b層 白色火山灰。Ko-d（駒ヶ岳1640年降灰）

c層 葦を含む。木製品等を大量に含む。礫粒で構成される間層があり細分される（慶長期）

cA層 黒色土層、礫粒等で構成される層が最下部にあり、B層と分かたつ。

cB層 黒色土層。

d層 砂層。16末～17初頭の染付、越前播鉢が出土する。（慶長期）

III層 勝山館存続期に該当する遺物包含層。今回の調査では確認できなかった。（中世）

IV層 中世以前の堆積層、細分される。

a 礫層（続縄文時代～中世）。

b 黒色土層（続縄文時代、恵山期相当）。

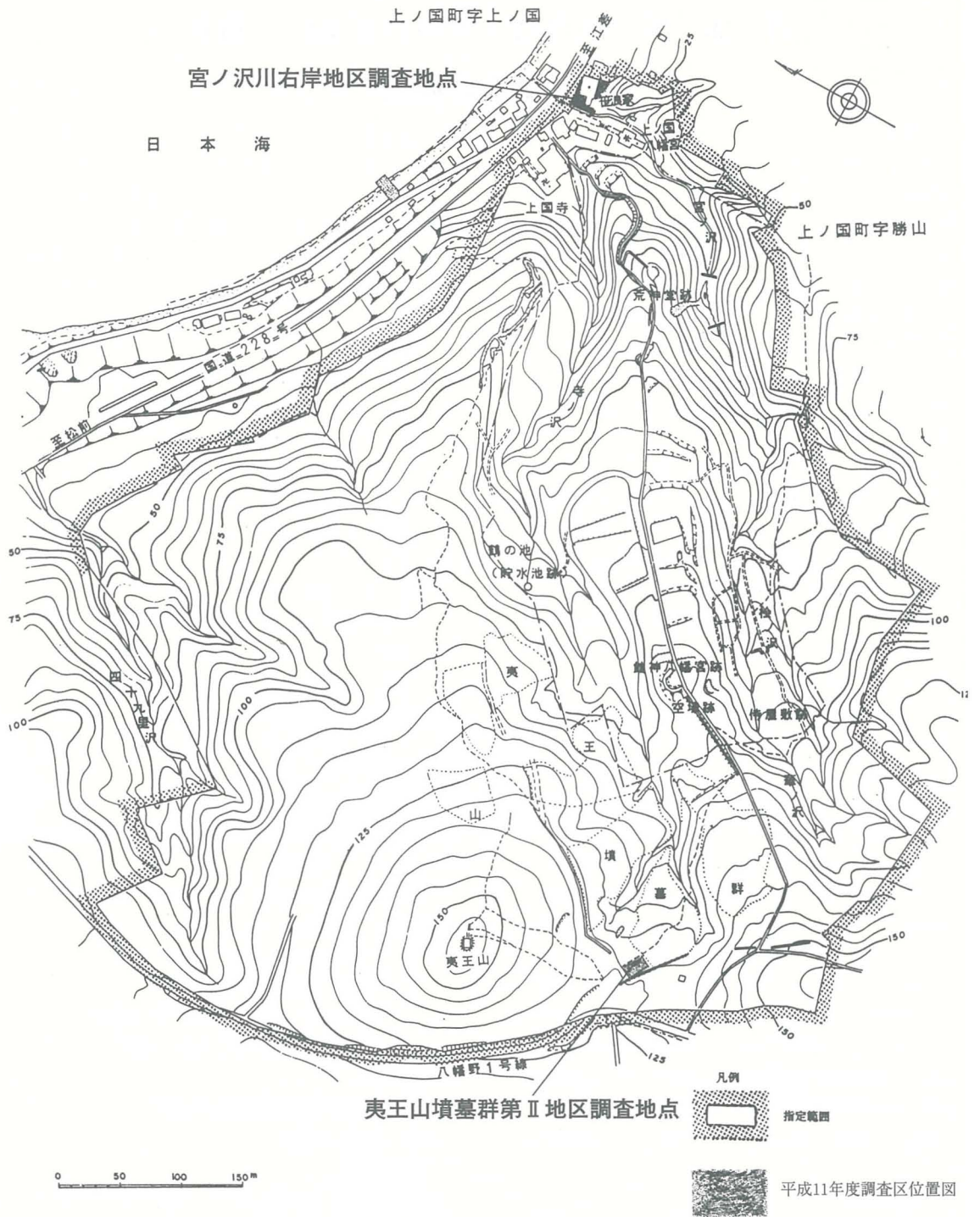
c 黒色土層。（縄文時代後・晩期、入江式、上ノ国式）。

V層 礫層。（縄文時代後期以前）

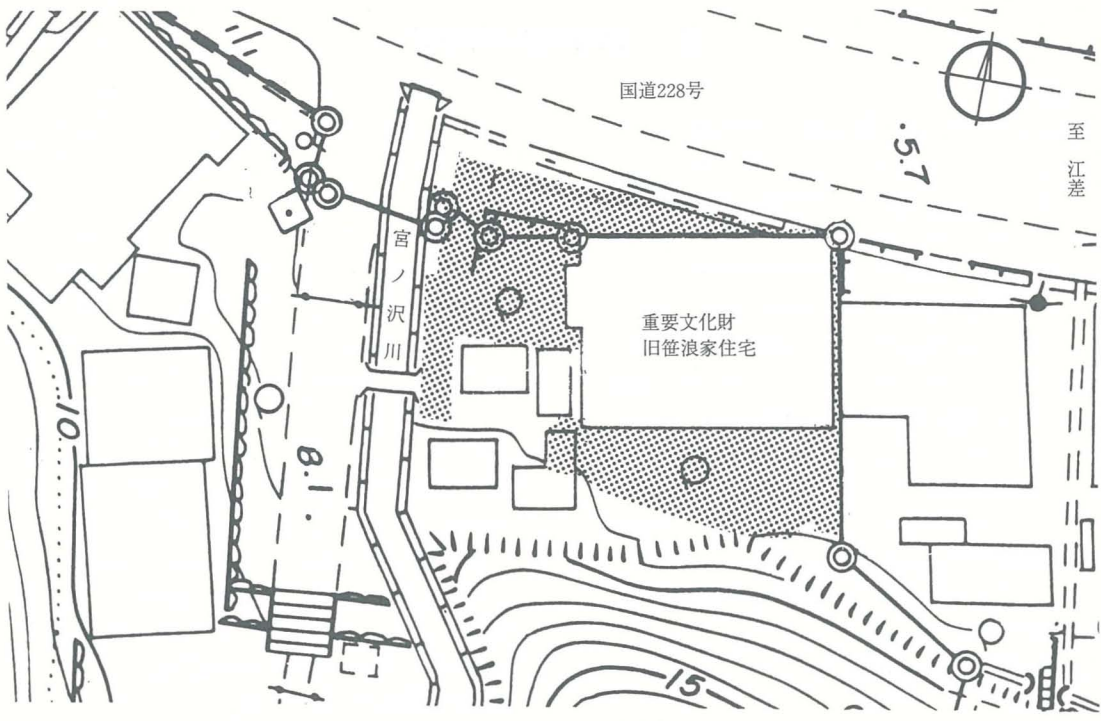
VI層 礫層、砂層。

### 5 保存処理

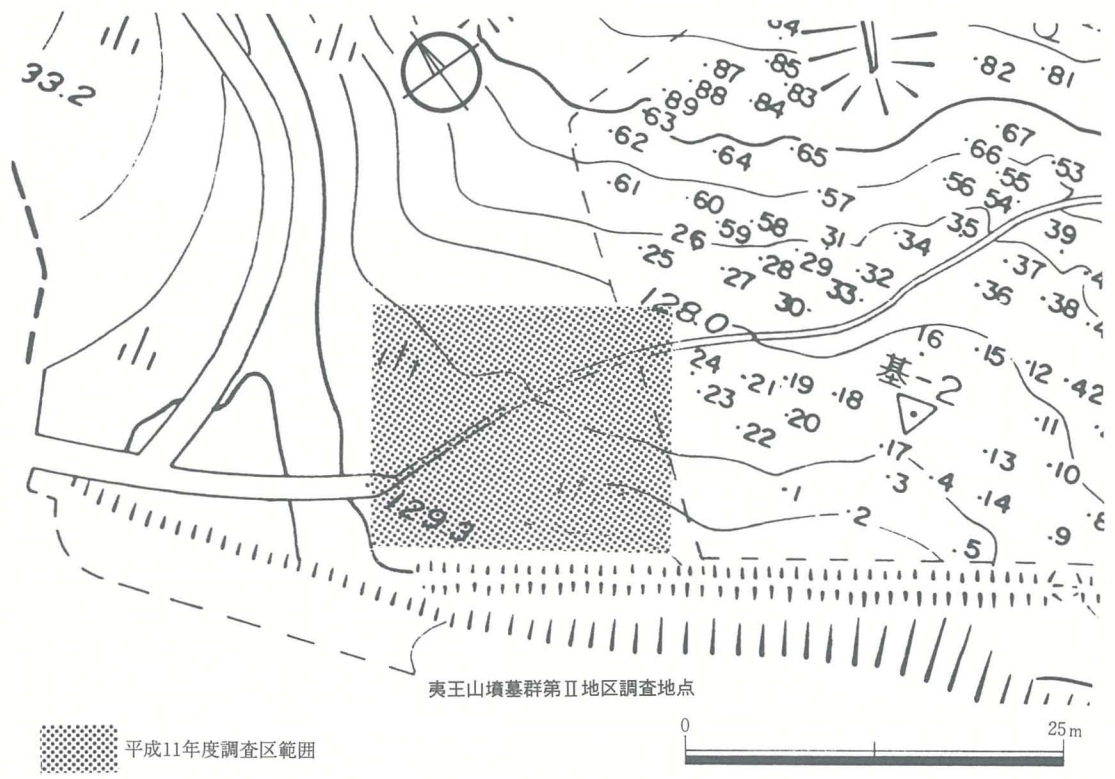
鉄製品390点、銅製品50点、木製品300点の処理を行った。併せて、処理済鉄製品の内、錆が生じたもの400点の再処理を行った。（松田）



第1図 遺跡地形図・調査区位置図



宮ノ沢川右岸地区調査地点



夷王山墳墓群第Ⅱ地区調査地点

第2図 調査区配置図

## Ⅱ 遺構確認調査

### 1 調査目的

今回の調査地点は、勝山館の主体部直下、正面に位置する地点であり、従来から根小屋が想定される場である。平成4年の試掘調査では瀬戸美濃灰釉碗（大窯Ⅰ期）片も出土し、平成9年度実施の分布調査では唐津胎土目積み皿が複数出土している。また周辺地区は、勝山館期の遺物が集中して出土している地区でもあり、勝山館の城下町の存在が推される地である。しかし、部分的な調査であるために勝山館期の遺構は確認されておらず、場の性格の特定には至らず、未知の領域といってもよい状況にあった。今回の調査は、この地区の性格解明が調査目的の一つである。併せて本年度より解体修理を実施する北海道最古の民家重要文化財旧笹浪家住宅主屋関連の遺構確認も目的とし、発掘調査を行った。

### 2 検出遺構と出土遺物

#### (1) 位置

勝山館の中心部直下、宮ノ沢川の右岸に位置する。標高7m前後、現在の海岸線から直線距離で約50m程の所に位置する。宮ノ沢川の左岸には、明治9年に勝山館内からこの地に遷座した上ノ國八幡宮があり、寺ノ沢川を越えると嘉吉三年の縁起が伝わる古刹上國寺がある。

#### (2) 層序

調査区南部旧笹浪家住宅主屋裏庭は、昭和期の庭の造成で攪乱され、Ⅰ層（明治以降）とⅡa層（江戸時代）の細分が困難であった。北部主屋正面は現国道造成の時に礫層まで削り、その上に砂利層が盛られている。調査区南部や西部では白色火山灰Ⅱb層（Ko-d、1640年降灰）が堆積し、その直下には勝山館期の堀跡や出土遺物から慶長年間頃と推される黒色土（Ⅱc層）の堆積が見られる。Ⅱc層は葦が大量に混じり、かつてこの地が葦原であったことを窺わせる。調査区全体に縄文時代後期～続縄文時代の遺物を含む黒色土（Ⅳb層）が堆積し、その下層は灰色の砂層（Ⅴ層）、礫層（Ⅵ層）になる。尚、今回の調査では中世の遺物包含層（Ⅲ層）は確認できなかった。（松田）

#### (3) 遺構

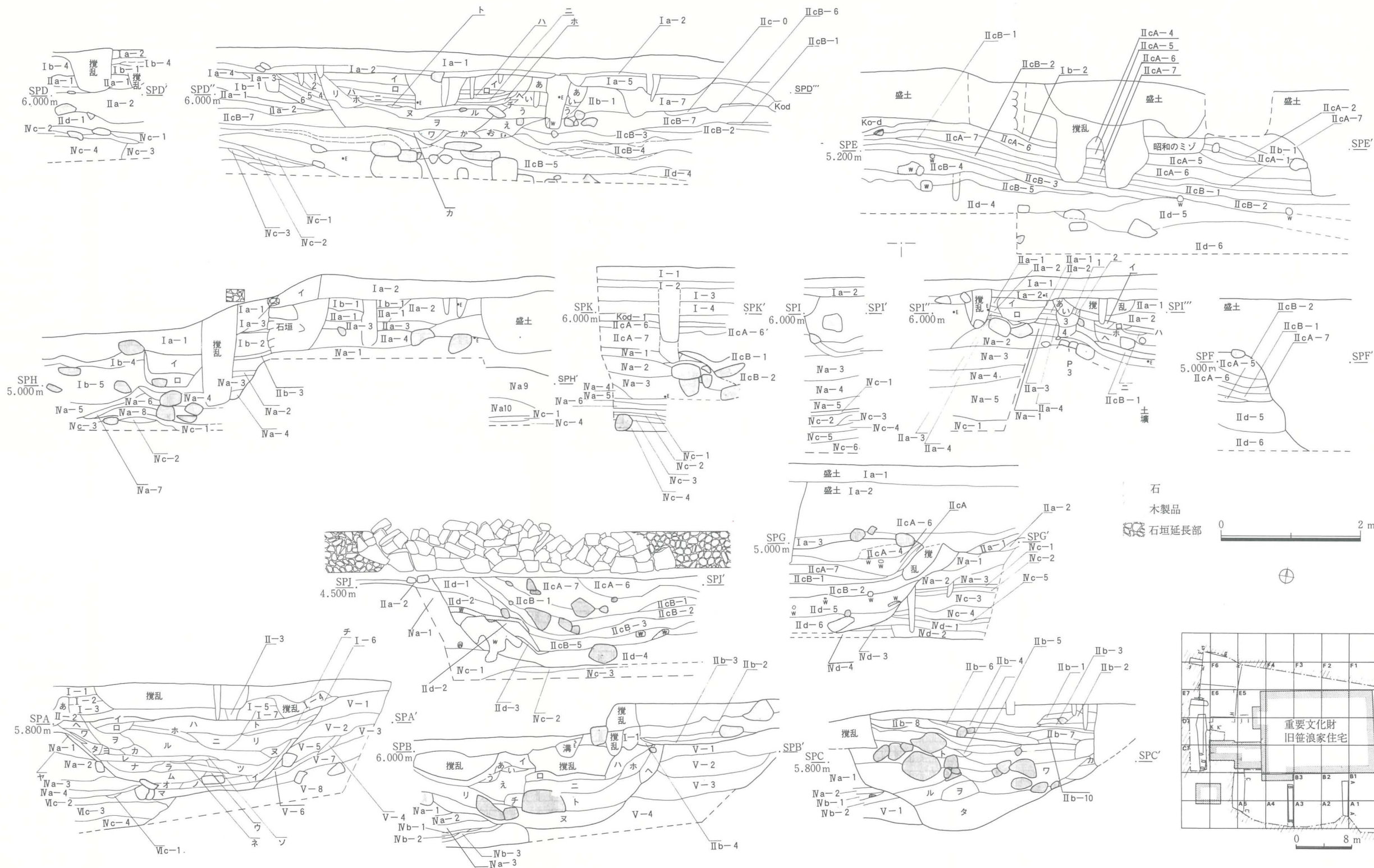
##### 1 勝山館跡期の遺構：（第5・10図）

重要文化財旧笹浪家住宅裏手、調査区南半に設

定した三ヶ所のトレンチで巾4m、深さ1.2m程で断面V字形の落ち込みを検出した。第2号トレンチで1640年降下の駒ヶ岳火山灰下に掘り込みが認められ、トレンチ3の覆土下部で15、16世紀の青磁皿が出土したこと、駒ヶ岳火山灰が堀跡上部に水平に堆積している地区があること、調査区南西隅で検出した慶長期頃の遺構面がこの堀を埋め戻した上に形成されていることなどから16世紀以前、勝山館存続期併行とした。他に覆土からガラス玉が1点出土した。幕末に建設され、明治期に現状が整えられたと推される重文旧笹浪家住宅の背風景観を損なう事を避けるため堀跡の全面発掘は実施していないが、トレンチ相互の位置関係から総延長22mを推測した。西、宮ノ沢側については平成12年度に雑倉を解体後に幕末・明治期の遺構確認と併せ、宮ノ沢川との取り合い等も含め再度確かめる予定である。東側の形成についても旧笹浪家住宅修復工事の進捗に合わせ、検討する予定である。

空堀内鍛冶関連廃棄物：調査区南東部空堀北斜面覆土、中・下位に炭化物、鉄滓、羽口等の廃棄がみられた。石製羽口が堀中央底近くに位置していることから、堀が自然に埋没し始めた頃の廃棄かと推した。前述の羽口に近接して青磁剣先蓮弁文碗が出土していることから、上限は15世紀末頃と推される。石製羽口1、陶製羽口11、鉄滓・溶融物142、内、磁着の強い物13、同弱いもの17、鍛造剝片6、小柄？・刀子各1を数える。鉄滓等のうち鉄錆色を呈するものは14点である。また椀形滓は3点である。廃棄の方向は堀北、現笹浪家住宅側であり同住宅下位に出自が求められる。尚、第10図分布図中の陶磁器二点は17・18世紀の伊万里碗である。出土位置も高い。（松崎）

2 土壌5：（第11図、PL.10-5）A1～B1区に位置する。方2.2mの平面形を呈し、南壁西寄りに張り出しの痕跡が僅かに確認された。勝山館期の堀の覆土を掘りこんで作られる。覆土より志野丸皿（第17図14・15）、染付皿、越中瀬戸鉄釉皿が出土している。覆土上面に礫の集中箇所があり刀子、唐津向付（第20図1）、備前播鉢（第19図11）が出土した。平面形、規模は勝山館跡で検出される竪穴に類似するが、四隅や壁際に柱穴



第3図 調査区土層堆積図(宮ノ沢川右岸地区)

表1 南北セクション東壁土層観察表 (A-A')

I-1	7.5YR	3/2	黒褐	黒褐色土主体	礫粒		
I-2	10YR	4/3	褐	褐色土主体	礫粒	ややソフト	焼土粒炭化物少量 炭化物微量
I-3	7.5YR	4/4	褐	基盤粒主体			
I-4	7.5YR	4/4	褐	粘質土主体		ハード	
I-5	7.5YR	4/3	褐	基盤粒と砂粒主体		ハード	
I-6	7.5YR	4/4	褐	やや広い砂利主体		ソフト	
I-7	7.5YR	4/3 4/4	褐	小礫と広い礫粒主体		ソフト	
II-1	7.5YR	4/4	褐	基盤粒と礫粒主体		ハード粘性強し	
II-2	7.5YR	4/4 4/3	褐	粘質土主体	礫粒	ハード	
II-3	7.5YR	4/3	褐	基盤粒と礫粒主体		ソフトやや粘性	
IIa-1	7.5YR	3/3	暗褐	礫層		ややソフト	
IIa-2	7.5YR	4/4	褐	礫層		ハード	
IIa-3	7.5YR	4/3	褐	礫層		ハード	
IIa-4	7.5YR	4/4	褐	基盤粒主体	やや広い基盤粒	湿性	
IIc-1	7.5YR	3/1	黒褐	黒褐色土主体		湿性粘質	
IIc-2	7.5YR	2/1	黒		植物混入	湿性	
IIc-3	7.5YR	3/3	暗褐	砂粒主体		湿性	
IIc-4	7.5YR	4/3	褐	砂粒主体	褐色砂礫状に堆積	ソフト・湿性	
V-1	7.5YR	3/3	暗褐	やや広い砂粒主体	ソフトローム	ハード	
V-2	10YR	4/3	暗褐	やや広い砂粒主体	ソフトローム	ハード	
V-3	10YR	4/3	暗褐	やや広い砂粒主体	ソフトローム	ハード	
V-4	7.5YR	3/2	黒褐	やや広い砂粒主体	ソフトローム	ハード	
V-5	7.5YR	3/3	暗褐	やや広い砂粒主体		ハード	
V-6	10YR	4/3	褐	砂粒主体	黄褐色の砂混じる	ハード	
V-7	7.5YR	3/3	暗褐	砂粒主体		ハード	
V-8	7.5YR	3/3	暗褐	礫層		ハード	
イ	7.5YR						
ロ	7.5YR	4/4 4/6	褐	礫層		ややハード	
ハ	7.5YR	4/4	褐	基盤粒と粘質土主体		ややハード	
ニ	7.5YR	4/4	褐	礫層		ハード	
ホ	7.5YR	4/4 4/6	褐	砂粒主体			
ヘ	7.5YR	4/4	褐	広い砂利主体		ソフト	
ト	7.5YR	4/4 4/6	褐	褐色粘質土と砂粒主体	(子)より細かい	ソフト	
チ	7.5YR	4/4	褐	広い礫粒主体	礫粒砂粒		
リ	7.5YR	4/4 4/6	褐	砂粒主体		ソフト	
ヌ	7.5YR	4/4	褐	広い礫粒主体		ややソフト	
ル	7.5YR	4/4 4/6	褐		粘質土と砂粒礫状に堆積	ハード	
ワ	7.5YR	4/3 4/4	褐	粘質土主体			
カ	7.5YR	4/4 4/6	褐	粘質土と砂粒主体		ソフト	
キ	7.5YR	4/3 4/4	褐	広い砂粒主体	7.5YR7/2明褐色の火山灰(?)少量	ややソフト	
コ	7.5YR	4/4 4/6	褐	粘質土主体		ハード	
ケ	7.5YR	4/4 4/6	褐	基盤粒主体	下面粘質	ハード	
セ	7.5YR	4/4 4/6	褐	粘質土主体		ソフト	
ソ	7.5YR	4/4 4/6	褐	粘質土と砂粒主体		ソフト	
ネ	7.5YR	4/4 4/6	褐	粘質土主体		ソフト	
ナ	7.5YR	4/4 4/6	褐	礫層		ハード	炭化物少量
ラ	7.5YR	4/3	褐	粘質土主体		ソフト	
ム	7.5YR	4/4 4/6	褐	赤礫粒主体		ハード	下面に炭化物
ウ	7.5YR	3/1 2/1	黒	粘質土主体		ソフト	
エ	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体		ソフト	
オ	7.5YR	3/1 2/1	黒褐	粘質土主体		ソフト	炭化物ブロック状に混じる
カ	7.5YR	4/4	褐	礫層			
キ	7.5YR	2/2	黒褐	粘質土主体			
ク	7.5YR	3/2 3/3	黒褐	炭化物主体		ソフト	
ケ	7.5YR	3/3	暗褐	黒褐色土主体		ソフト・湿性	C多量

表2 南北セクション西壁土層観察表 (B-B')

I-1	10YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	白色火山灰礫層基盤粒		炭化物少量
IIb-1	7.5YR	7/3	明褐色	白色火山灰			
IIb-2	10YR	3/4	暗褐	暗褐色土基盤粒主体	礫粒	ややソフト	炭化物少量
IIb-3	10YR	2/2	黒褐	黒褐色土基盤粒主体	礫粒	ソフト	
IIb-4	7.5YR	4/1	赤褐	オリープ褐色砂主体	赤色礫粒黄褐色礫	ややハード	
IIa-1	7.5YR	3/3	暗褐	基盤粒・粒主体			
IIa-2	7.5YR	4/4	褐	広い基盤粒主体	植物混入		
IIa-3	7.5YR	4/6	褐	広い基盤粒主体			
IIc-1	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体	植物混入		
IIc-2	7.5YR	4/1	褐	灰粘性のシルト主体	植物混入		
IIc-3	7.5YR	2/1	黒	粘性土主体	植物混入		
IIc-4	7.5YR	3/1	黒褐	粘性のシルト主体	植物混入	ハード	
イ	7.5YR	4/4	褐	粘質土と砂粒主体	基盤粒		炭化物少量 炭化物少量
ロ	7.5YR	4/3	褐	基盤粒・粒主体			
ハ	7.5YR	4/4	褐	基盤粒・粒主体			
ニ	7.5YR	4/4	褐	基盤粒・粒主体			
ホ	7.5YR	4/3	褐	広い礫主体	径5mm以下の礫粒		
ヘ	10YR	4/3	褐	礫粒主体	径1mm以下の礫粒		
ト	7.5YR	4/4	褐	礫層	基盤粒・粒		
チ	10YR	4/4	褐	砂粒主体			
リ	7.5YR	3/2	暗褐	粘質土主体		ハード	
ヌ	7.5YR	4/4	褐	礫層			炭化物礫状
あ	7.5YR	4/4	褐	やや広い基盤粒主体	粘質土		
い	7.5YR	4/4	褐	粘質土主体	砂粒		
う	7.5YR	4/4	褐	粘質土主体	砂粒 (い)よりやや広い		
え	7.5YR	4/4	褐	粘質土主体	砂粒	ソフト	

表3 南北セクション東壁土層観察表 (C-C')

I-1	7.5YR	4/3	褐	やや広い礫主体	礫粒		
IIb-1	7.5YR	4/3	褐	やや広い礫主体	白色火山灰少量		
IIb-2	10YR	6/2	灰黄褐		白色火山灰		
IIb-3	7.5YR	3/3	暗褐	基盤粒主体	白色火山灰少量砂粒		
IIb-4	7.5YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体	広い礫粒		炭化物
IIb-5	7.5YR	4/4	褐	基盤粒主体	細かい基盤粒		
IIb-6	7.5YR	2/1	黒	炭化物主体			
IIb-7	10YR	4/4	褐	基盤粒主体	基盤粒		
IIb-8	10YR	4/3	褐	褐色土主体	基盤粒		焼土粒微量炭化物少量

IIb-9	7.5YR	4/4	褐	粘質土主体	砂粒		
IIb-10	7.5YR	4/4	褐	基盤礫主体		ソフト	炭化物少量
IVa-1	10YR	4/4	褐	礫主体			
IVa-2	10YR	4/6	褐	基盤粒主体			
IVc-1	7.5YR	4/1	褐	灰粘性のシルト主体			
IVc-2	7.5YR	2/1	黒	粘質土主体			
V-1	10YR	4/4 4/6	褐		礫層		
イ	7.5YR	4/3	褐	粘質土・砂粒主体	基盤粒	ソフト	
ロ	7.5YR	4/4	褐	粘質土・砂粒主体	(イ)より粘性強い		
ハ	7.5YR	4/3	褐	砂主体			
ニ							
ホ	7.5YR	4/4	褐	粘質土と砂粒主体	(ロ)より荒い砂混じり		
ヘ	7.5YR	4/4	褐	大礫・基盤礫・粒主体	玉砂利多量		
ト	7.5YR	4/3	褐	大礫・粘質土主体	砂粒やや多し小礫		
チ	7.5YR	4/4 4/3	褐	大礫・小礫主体			
リ	7.5YR	4/3	褐	大礫・小礫主体			
ヌ	7.5YR	4/3	褐	大礫・小礫主体			
ル	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体	小礫		
ヲ	10YR	4/3	褐	粘質土・砂粒主体	基盤粒小礫		
ワ	7.5YR	4/3	褐	基盤礫・粒主体	玉砂利少量		炭化物微量
カ	7.5YR	4/3	褐	砂粒主体			
ヨ	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体	基盤粒小礫		
タ	7.5YR	4/3	褐	礫主体			

表4 南北セクション東壁土層観察表 (D'' - D''')

IIa-1				砂・礫主体	盛土		
IIa-2	10YR	4/3	褐	粘質土主体	礫粒	ハード	炭化物少量
IIa-3	7.5YR	4/3	褐	褐色土主体	基盤粒		
IIa-4	7.5YR	4/4	褐		白色火山灰礫粒基盤粒	ハード	炭化物少量
IIa-5	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒		焼土粒炭化物多量
IIa-6	7.5YR	4/3	褐	褐色土主体	白色火山灰やや荒い礫粒		炭化物少量
IIa-7	7.5YR	4/3	褐		白色火山灰礫粒	ソフト	焼土粒炭化物少量
IIa-8	7.5YR	4/2	灰褐	灰褐色土主体	粘質土と砂粒礫状に堆積ソフトローム	ハード	
IIb-1	7.5YR	4/4 4/6	褐	基盤粒主体		湿性	
IIa-1	7.5YR	4/4 4/3	褐	褐色土主体			
IIa-2	7.5YR	4/3	褐	暗褐色土主体			炭化物少量
IIb-1	7.5YR	4/3	褐	暗褐色土主体	礫粒基盤粒	ハード	
IIcB-6	7.5YR	3/3	暗褐	炭化物主体			炭化物少量
IIcB-7	7.5YR	4/4	褐	褐色土・礫主体			
IIcA-1	5YR	1/2	黒	黒色土主体	植物混入	粘質	
IIcA-2	7.5YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体	植物混入	粘質	
IIcA-3	7.5YR	2/2	黒褐	腐蝕葉主体	植物混入		
IIcA-4	7.5YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体	植物混入礫粒主体		
IIcA-5	7.5YR	1/2	黒	黒色土主体		ややソフト	
IIcA-4	10YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体	植物混入	ややソフト	
IVc-1	7.5YR	2/2	黒褐		植物混入	湿性	
IVc-2	7.5YR	3/2	黒	黒褐色粘質土主体		湿性	
IVc-3	7.5YR	4/4 4/6	褐	基盤粒主体		湿性	
IVc-4	7.5YR	4/2	灰褐	粘質土・礫主体		湿性	
IVc-5	7.5YR	2/1	黒	粘質土主体		湿性	
IVc-6	7.5YR	3/2 3/3	礫層				
あ	7.5YR	4/3	褐	黒褐色土主体	白色火山灰ローム粒基盤粒	ハード	炭化物少量
い	7.5YR	4/3	褐	黒褐色土主体	白色火山灰ローム粒基盤粒 (あ)より明るい	ハード	
う	7.5YR	4/3 4/4	褐	黒褐色土主体	白色火山灰ローム粒基盤粒	ハード	
え	7.5YR	4/3 4/4	褐	荒い礫粒主体		ハードやや粘性	炭化物少量
お	7.5YR	3/3	暗褐	粘質土・礫粒主体			炭化物微量
か	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土・基盤粒主体			炭化物少量
イ	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒	ややハード	焼土粒炭化物少量
ロ	7.5YR	4/3 4/4	褐	ハードローム主体	ハードローム	ハード	焼土粒炭化物少量
ハ	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	白色火山灰礫粒	ややソフト	焼土粒
ニ	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	白色火山灰多量礫粒	ややソフト	焼土粒
ホ	7.5YR	4/2 4/3	灰褐	灰褐色土主体	白色火山灰少量礫粒	ややハード	焼土粒
ヘ	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	白色火山灰礫粒	ややハード	焼土粒
ト	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体		焼土粒	炭化物微量
チ	7.5YR	3/2	黒褐	黒褐色土主体	白色火山灰多量	ややソフト	炭化物微量
リ	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	白色火山灰少量礫粒玉砂利	ややソフト	炭化物少量
ヌ	7.5YR	2/1	黒	炭化物主体		ややハード	
ル	7.5YR	4/3	褐	褐色土主体	白色火山灰多量礫粒		
ヲ	7.5YR	3/2	黒褐	黒褐色土主体	白色火山灰少量礫粒基盤粒	ハード	
ワ	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土・礫粒主体	白色火山灰微量		
カ	7.5YR	4/3 4/4	褐	褐色砂粒主体			
1	7.5YR	4/3	褐	褐色土主体	礫粒 ハードローム	ハード	炭化物微量
2	7.5YR	4/3	褐	褐色土主体	礫粒 ハードローム	ハード	焼土粒炭化物微量
3	7.5YR	4/3	褐	褐色土主体	礫粒 ハードローム	ハード粘性	焼土粒炭化物微量
4	7.5YR	3/3	暗褐	炭化物主体	ソフト粘性に富む		焼土粒
5	7.5YR	3/3	暗褐	粘質土主体	粘質土と砂粒礫状に堆積湿性		炭化物微量
6	7.5YR	4/3	褐	粘質土主体	粘質土と砂粒礫状に堆積湿性		
IIa-2				砂・礫主体	盛土	ハード	
IIb-4	7.5YR	4/2 4/3	灰褐	砂・礫主体	玉砂利	ハード	
IIa-1	7.5YR	4/3 4/4	褐	褐色土主体	礫粒基盤礫		
IIa-2	7.5YR	4/4	褐	礫層			
IId-1	7.5YR	4/6	褐	礫層			
IVc-1	7.5YR	3/2	黒褐	砂粒主体		湿性	
IVc-2	7.5YR	4/2	灰褐	砂粒主体		湿性	
IVc-3	7.5YR	4/6	褐	褐色礫粒主体		湿性	
IVc-4	2.5Y	4/1 2/1	黒	黄灰砂粒主体		湿性	

表5 南北セクション西壁土層観察表 (E-E')

II-1				盛土			
IIb-1							
IIb-2							
IIcA-1	7.5YR	2/1	黒	植物混入			
IIcA-2							
IIcA-3							
IIcA-4	7.5YR	2/1	黒	植物混入			
IIcA-5	7.5YR	3/3	暗褐	粘質土主体		湿性	
IIcA-6	7.5YR	1.7/1	黒	植物混入			



IIcA-7	7.5YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体			
IIcB-1	7.5YR	1.7/1	黒	植物混入			
IIcB-2	7.5YR	2/2	黒褐	植物混入			
IIcB-3	7.5YR	1.7/1	黒	植物混入			
IIcB-4	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体			
IIcB-5	10YR	3/2	黒褐	粘質土主体			
II d-4	7.5YR	3/3	暗褐	広い礫粒主体			
II d-5	5 Y	3/1	オリーフ	黒オリーフ色の砂粒主体			
II d-6							

表 6 東西セクション南壁土層観察表 (F-F')

I-1							
IIcA-5	7.5YR	2/1	黒	植物混入	湿性		
IIcA-6	7.5YR	1.7/1	黒	植物混入	湿性		
IIcA-7	7.5YR	2/1 2/2	黒	褐砂粒主体			
IIcB-1	7.5YR	1.7/1	黒	植物混入			
IIcB-2	10YR	2/2	黒褐	植物混入			
II d	7.5YR	3/3	暗褐	広い砂粒主体	植物混入		

表 7 調査区北壁土層観察表 (G-G')

Ia-1				盛土 (玉砂利)			
Ia-2				盛土 (玉砂利)			
Ia-3	5YR	2/1	黒褐	粘質土主体	炭化物少量		
IIa-1	7.5YR	4/3	褐	基盤粒主体	赤色礫粒		
IIa-2	7.5YR	3/2	黒褐				
IIa-3		3/2	黒	粘質土主体	植物混入		
IVa-1	7.5YR	3/2	黒褐	礫主体	赤色礫粒		炭化物少量
IVa-2	7.5YR	4/4	褐	基盤粒主体			炭化物少量
IVa-3	7.5YR	5/6	明褐	礫主体			
IIcA-4	7.5YR	3/1	黒褐	粘質土主体	植物混入		
IIcA-6	7.5YR	1.7/1	黒	粘質土主体	植物混入		
IIcA-7	7.5YR	2/1	黒	粘質土主体	植物混入		
IIcB-1	7.5YR	1.7/1	黒	粘質土主体	植物混入		
IIcB-2	7.5YR	1.7/1	黒	粘質土主体	植物混入		
II d 5	10YR	3/1	黒	褐粘質土・砂粒主体	粘質土と砂粒構成に堆積		
II d 6	5 Y	3/1	オリーフ	砂粒主体	植物混入		
			黒				
IVb-1	7.5YR	1.7/1	黒	黒色土主体	植物混入	粘性	
IVb-2	7.5YR	3/1	黒褐	粘質土主体	青色礫粒		焼土粒微量
IVb-3	5 Y	3/2	オリーフ	広い礫粒主体	植物混入		
			黒				
IVb-4	5 Y	4/1	灰	砂粒主体	上面に粘質土ブロック状に堆積		
IVb-5	7.5YR	3/1	黒褐	粘質土主体			炭化物微量
IVc-1	7.5YR	4/1	黄褐	粘質土主体	青色礫粒土器		炭化物少量
IVc-2	7.5YR	4/1 3/1	褐灰	砂粒主体	青色礫粒赤色礫粒土器		
IVc-3	10YR	1.7/1	黒	黒色土主体			
IVc-4	5 Y	2/1	灰	砂粒主体			

表 8 北東セクション南壁土層観察表 (H-H')

Ia-1							
Ia-2							
Ia-3	7.5YR	4/3	褐	玉砂利・礫主体			
Ib-1	7.5YR	4/3	褐	広い礫粒主体			
Ib-2	7.5YR	4/4	4/3	褐	赤礫粒・玉砂利主体ガラス版		
Ib-3	7.5YR	3/2	黒褐	玉砂利・礫主体			
Ib-4	7.5YR	3/4	暗褐	赤色礫主体			
Ib-5	7.5YR	4/4	褐	広い褐色礫主体			
IIa-1	7.5YR	4/3	褐	礫層			
IIa-2	7.5YR	4/4	褐	礫層			
IIa-3	7.5YR	3/3	暗褐	やや広い礫粒主体			
IIa-4	7.5YR	3/3	暗褐	礫層			
IVa-1	7.5YR	4/4	褐	赤色礫主体	ハード		
IVa-2	7.5YR	4/2 4/3	灰褐	砂粒主体	ソフト		
IVa-3	7.5YR	4/6	褐	礫主体			
IVa-4	10YR	6/6	明	黄褐			
IVa-5	5Y	4/6	褐	赤褐色の礫主体			
IVa-6	7.5YR	4/4	褐	広い礫主体	ソフト		
IVa-7	7.5YR	4/6	褐	褐色砂粒主体	ソフト		
IVa-8	7.5YR	3/2	暗	褐暗褐色砂粒主体			
IVa-9	7.5YR	4/4 4/6	褐	礫主体			
IVa-10				基盤粒主体			
IVc-1	7.5YR	1.7/1	黒	黒色土主体			
IVc-2	5Y	4/6	赤褐	赤褐色礫主体			
IVc-3	7.5YR	4/4	褐	褐色礫主体			
IVc-4				砂粒主体			
溝イ							
石垣イ	5Y	3/4	暗褐	広い暗褐色礫主体			
ロ	7.5YR	3/3	暗褐	礫粒・玉砂利	ハード		
ロ	7.5YR	3/2	黒褐	広い礫主体			炭化物多量

表 9 東西セクション南壁土層観察表 (I' - I'')

I'-1	10YR	4/4	褐	玉砂利 礫	ハードローム	ハード	
I'-2	10YR	4/3	黄褐	玉砂利 礫	ハードローム	ハード	
IIa-1	7.5YR	4/3	褐	褐色土主体	礫粒	ハードローム	
IIa-2	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体			
IIa-3	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体	湿性		炭化物多量
IIa-4	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体	湿性		炭化物多量
IVa-1	7.5YR	4/4	褐	褐色土主体	粘質土と砂粒構成	ハード	
IVa-2	10YR	4/4	褐	礫層	礫		
IVa-3	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色礫層			
IVa-4	7.5YR	4/4	褐		基盤礫		
IVa-5	7.5YR	4/6	褐				
IVc-1	7.5YR	2/1	黒	黒色土主体			

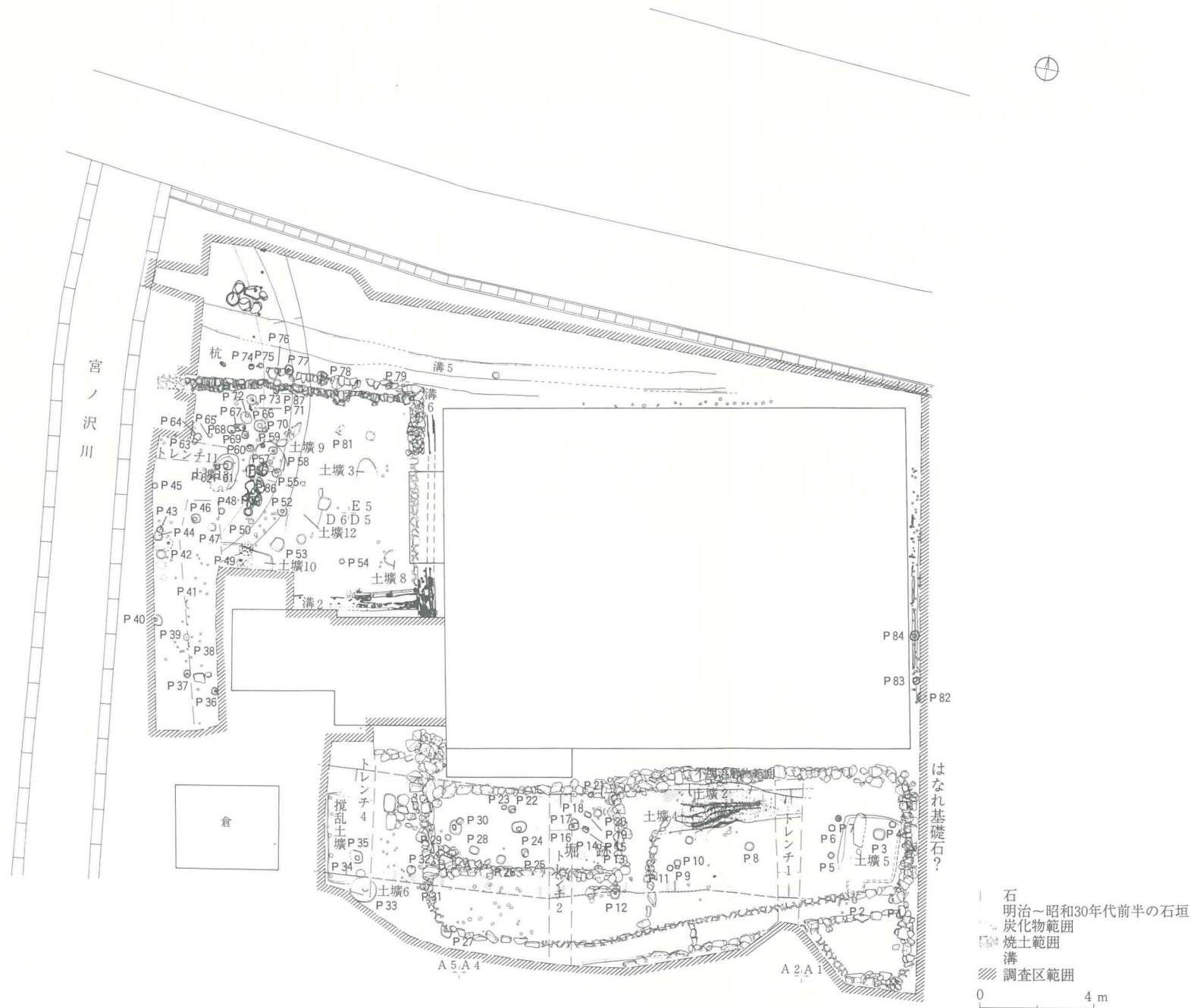
P1-イ	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒ローム粒	ややソフト	焼土粒炭化物やや多
ロ	7.5YR	3/2	黒褐	黒褐色土主体	礫粒ローム粒	ややソフト	焼土粒炭化物少量
P2-あ	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒ローム粒	ややソフト	焼土粒炭化物多量
い	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒ローム粒	ややソフト	焼土粒
P3-1	7.5YR	4/4	褐	褐色土主体	礫粒ローム粒	ハード	焼土粒
P3-2	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒ローム粒	ソフト	焼土粒
P3-3	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒ローム粒火山灰	ソフト	焼土粒
P3-4	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒ローム粒砂粒	ソフト	焼土粒
土壌?イ	7.5YR	2/3	極暗褐	暗褐色土主体	ソフトローム	ソフト	焼土粒炭化物少量
ロ	7.5YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体	ソフトローム	ソフト	焼土粒炭化物少量
ハ	7.5YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体	ソフトローム	ソフト粘質	焼土粒炭化物少量
ニ	7.5YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体	ソフトローム (ハ) よりやや暗い	ソフト粘質	焼土粒炭化物少量
ホ	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	ソフトローム	ソフト粘質	焼土粒炭化物少量
ヘ	7.5YR	3/2	黒褐	黒褐色土主体		ソフトやや粘質	焼土粒炭化物少量
IIcB-1	7.5YR	2/1	黒	黒色土主体	粘質土ソフトローム		炭化物少量
IIcB-2	7.5YR	3/2	黒褐	粘質土主体	粘質土ソフトローム湿性		
Ia-1	10YR	4/4	褐		玉砂利礫	ハード	
Ia-2	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体	礫粒	ハード	焼土粒炭化物少量
IVa-1	7.5YR	4/3	褐	礫層			
IVa-2	7.5YR	4/3	黄褐	砂粒主体			
IVa-3	5Y	3/6	暗赤褐	赤褐色の礫主体			
IVa-4	7.5YR	4/3	褐	広い礫主体			
IVa-5	7.5YR	4/6	褐	褐色の砂粒主体			
IVe-1	7.5YR	2/1	黒	黒褐色土主体			
IVe-2	7.5YR	2/2	黒褐	黒褐色土主体			
IVe-3	7.5YR	3/2	黒褐	砂粒主体	やや粘質		
IVe-5	5Y	3/1	オリープ	砂粒主体			
IVc-6	7.5YR	4/4	褐	広い砂粒主体		ソフト	

表10 東西セクション南壁 (J-J')

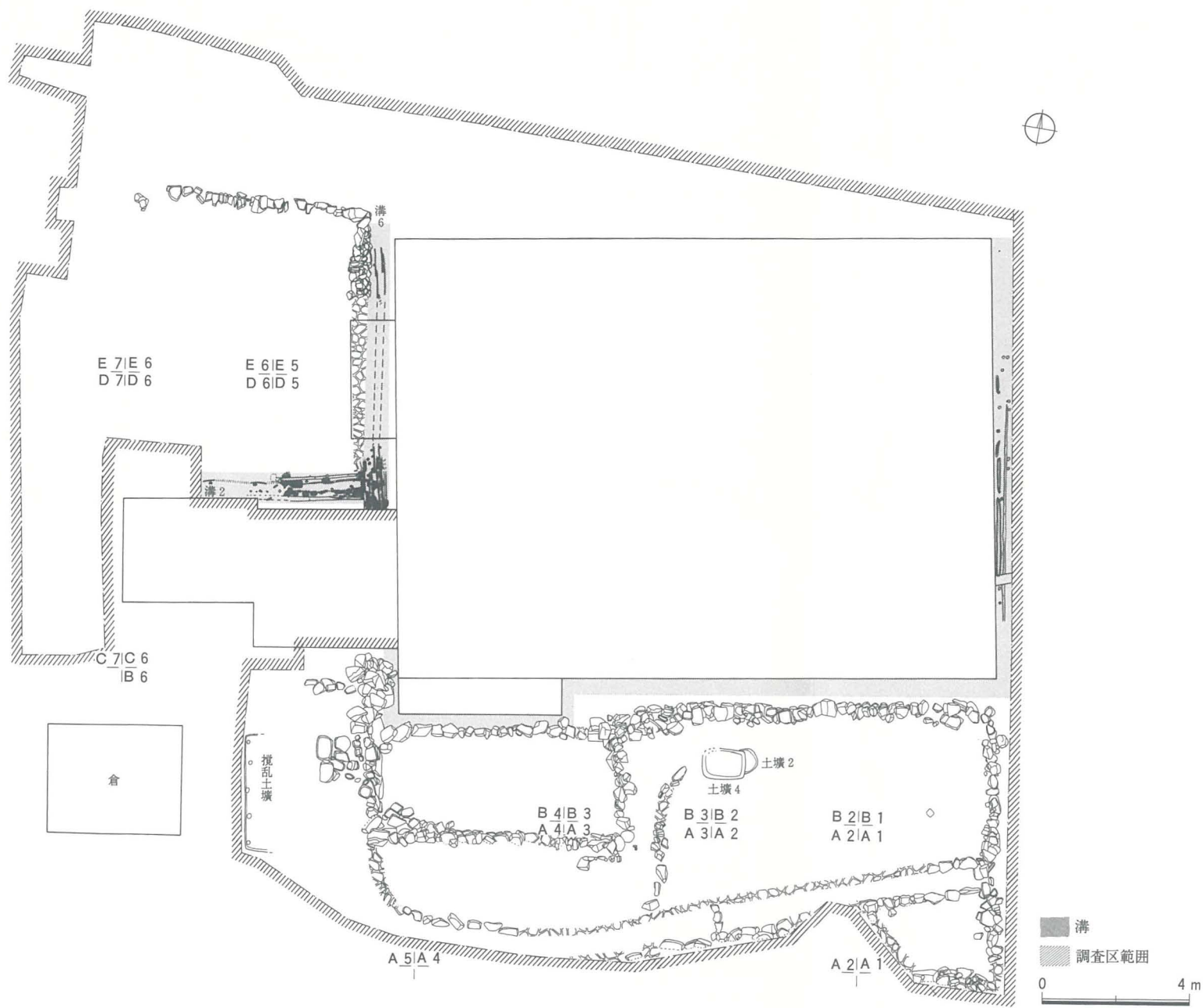
Ib-1	7.5YR	3/2	黒褐	黒褐色土主体			
IIcA-6	7.5YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体			炭化物少量
IIcA-7	7.5YR	3/1	3/2	黒褐	暗褐色土主体		
IIcB-1	7.5YR	1.7/1	黒	黒褐色土主体			
IIcB-2	7.5YR	2/1	黒	黒褐色土主体			
IIcB-3	7.5YR	1.7/1	黒	黒褐色土主体			
IIcB-5	7.5YR	2/2	暗褐	黒褐色土主体	植物混入		
II d-1	7.5YR	4/4	暗褐	褐色火山灰主体			
II d-2	7.5YR	1.7/1	褐	黒褐色土主体	土器		
II d-3	7.5YR	4/4	褐	暗褐色土主体	火山灰		
IVa-1	7.5YR	4/3	黒	黒褐色土主体			
IVe-1	5Y	4/1	褐		土器		
IVe-2	7.5YR	3/1	黒褐				
IVe-3	7.5YR	4/1	褐灰	黒色土・炭化物主体			

表11 東西セクション南壁土層観察表 (K-K')

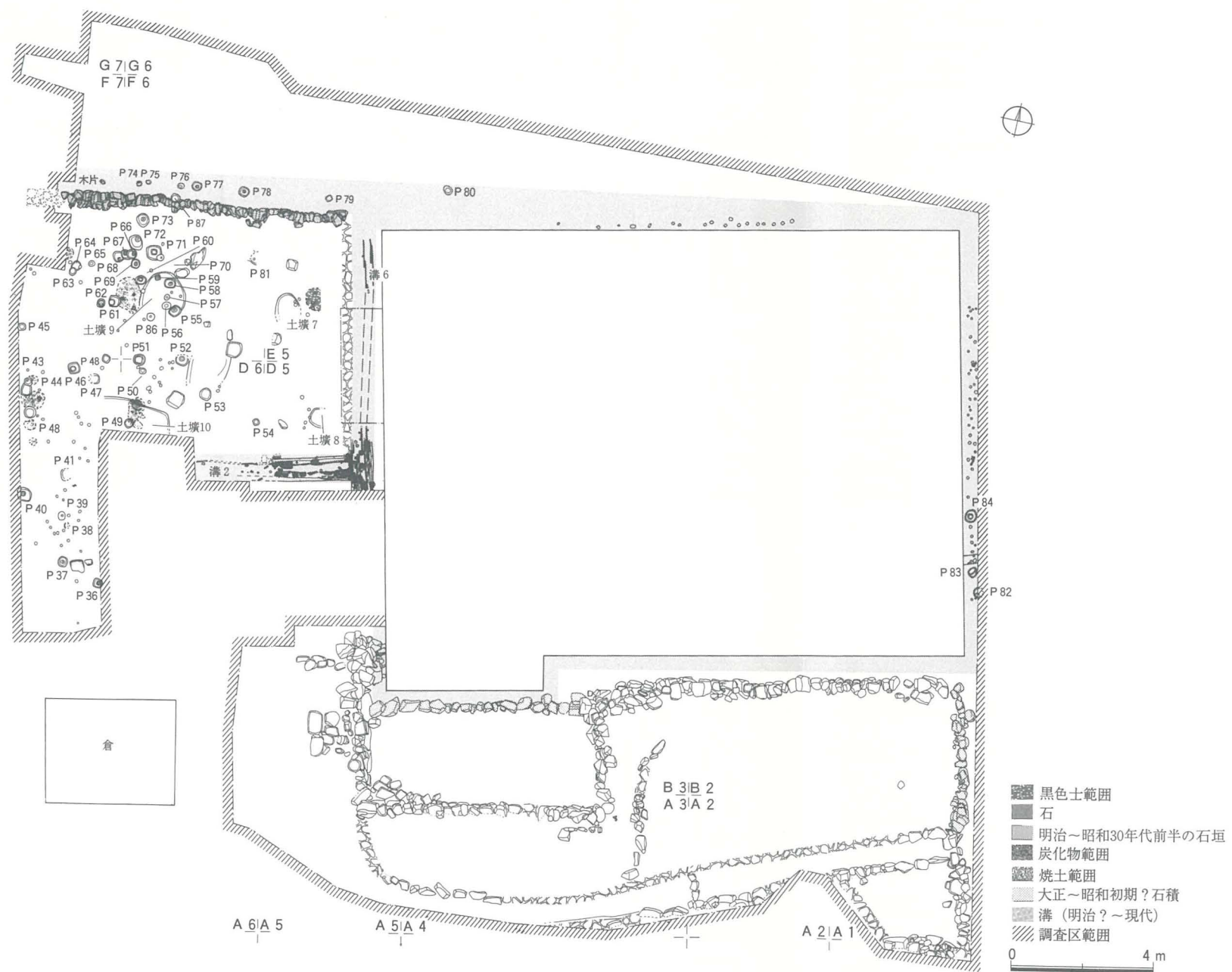
I-1				盛土	盛土		
I-2	10YR	3/2	黒褐	黒褐色土主体			
I-3	10YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体			炭化物少量
I-4	10YR	3/3	暗褐	暗褐色土主体			
Ko-d							
IIcA-6	7.5YR	1.7/1	黒	粘質黒色土主体			
IIcA-7	7.5YR	4/2	灰黄褐	砂粒主体	基盤粒礫粒7.5YR6/2火山灰		炭化物少量
IIcB-1	10YR	2/1	黒	黒色土主体	粘性	ややソフト	炭化物少量
IIcB-2	10YR	2/3	黒褐	黒褐色土主体	基盤粒礫粘性	ソフト	炭化物少量
IIcB-3	10YR	2/1	黒	黒色土主体	植物混入粘性	ややソフト	炭化物少量
IVa-1	7.5YR	4/2	灰褐	粘質土主体			炭化物少量
IVa-2	7.5YR	4/2	灰褐	広い礫粒主体	基盤粒礫粒		炭化物少量
IVa-3	7.5YR	4/6	褐礫層		基盤粒		
IVa-4	7.5YR	4/3	褐	広い礫粒主体			
IVa-5	7.5YR	4/6	褐	礫粒主体			
IVa-6	2.5Y	4/3	オリープ	礫粒主体			
IVe-1	2.5Y	3/1	黒褐	粘質土主体			
IVe-2	7.5YR	2/1	黒	粘質土主体			
IVe-3	7.5YR	3/1	黒	粘粘質土主体			
IVe-4	7.5YR	1.7/1	黒	粘質土主体			



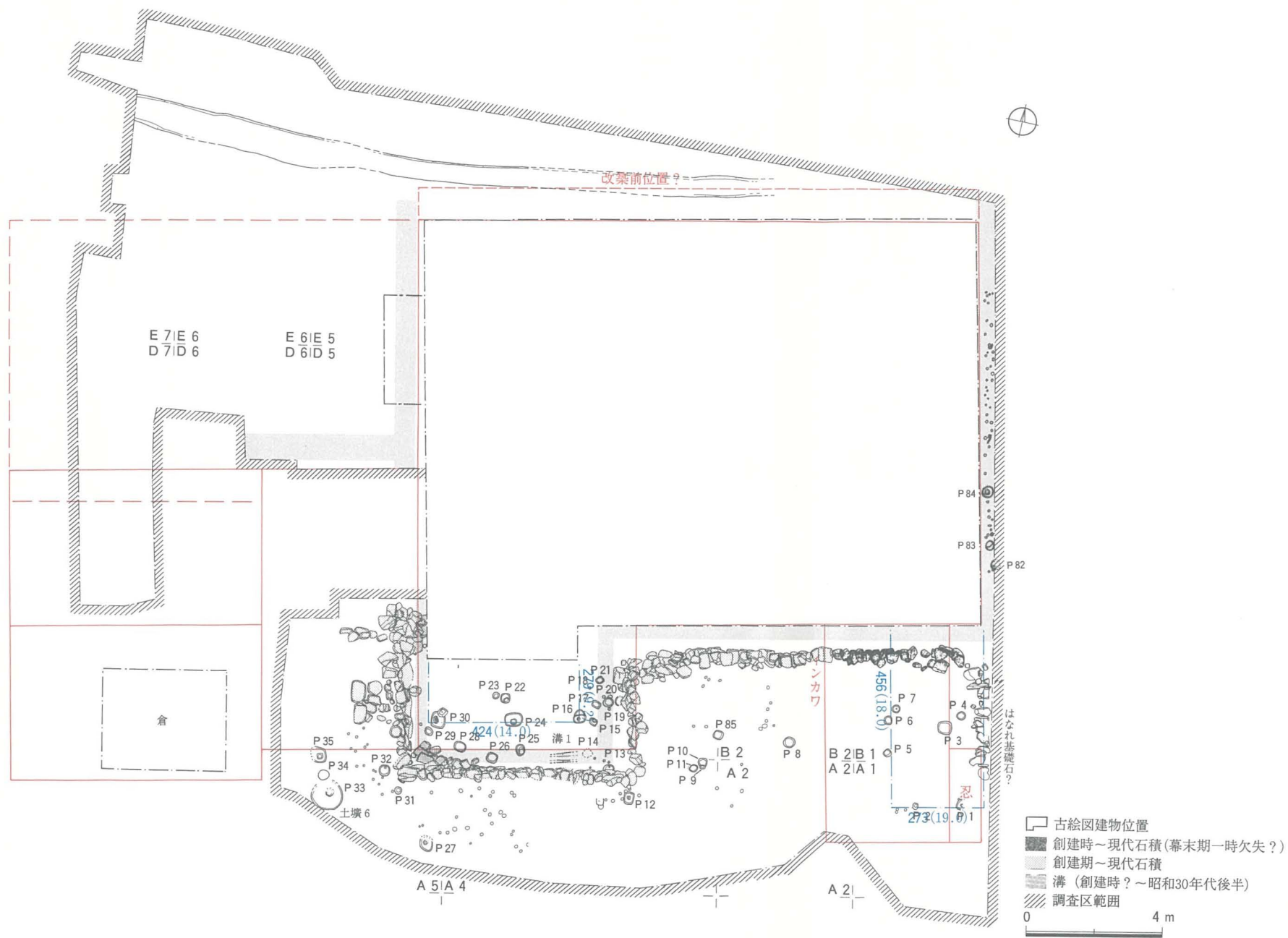
第4図 宮ノ沢川右岸地区遺構配置図



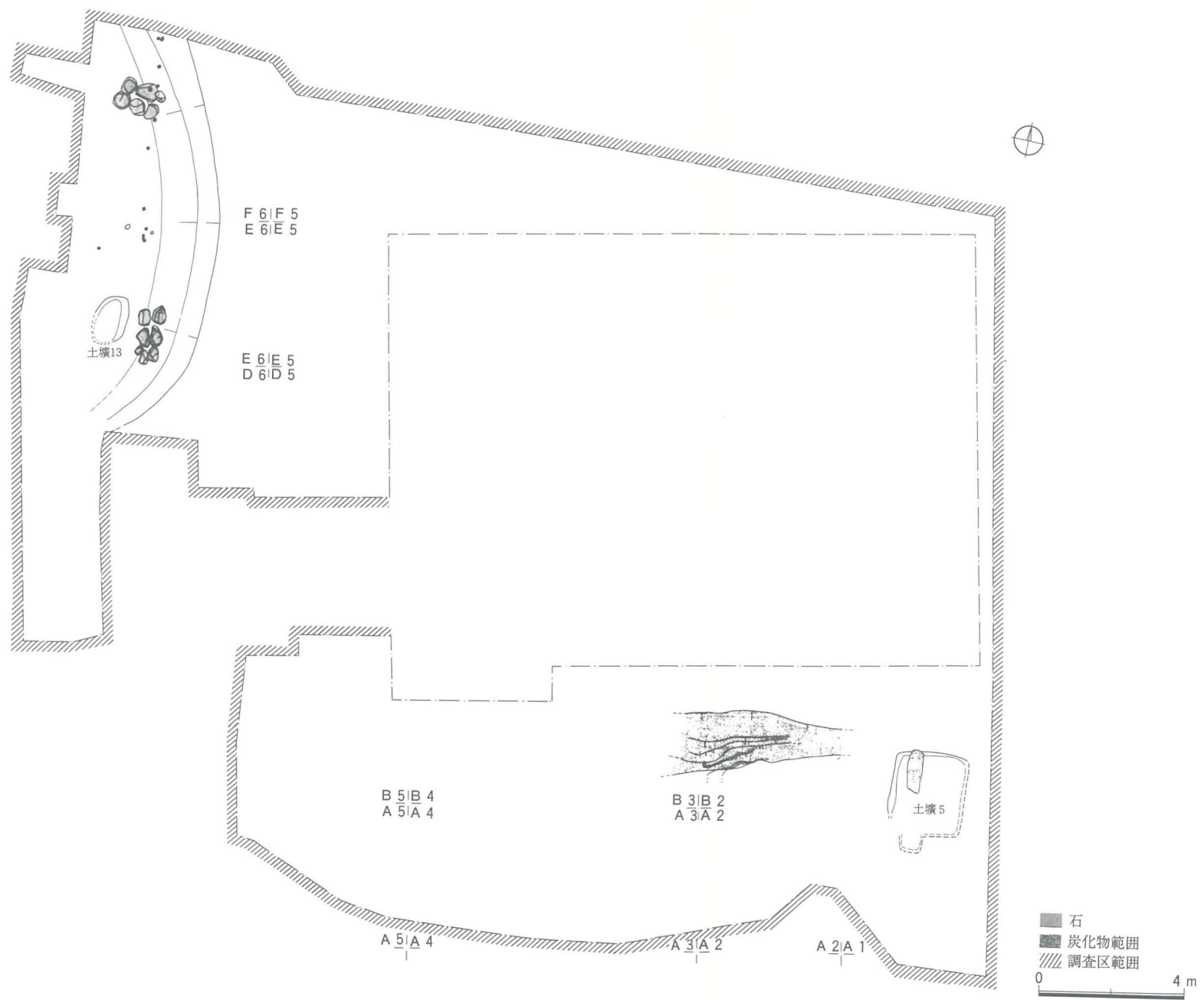
第5図 調査区遺構配置図1 (昭和30年代末~現代)



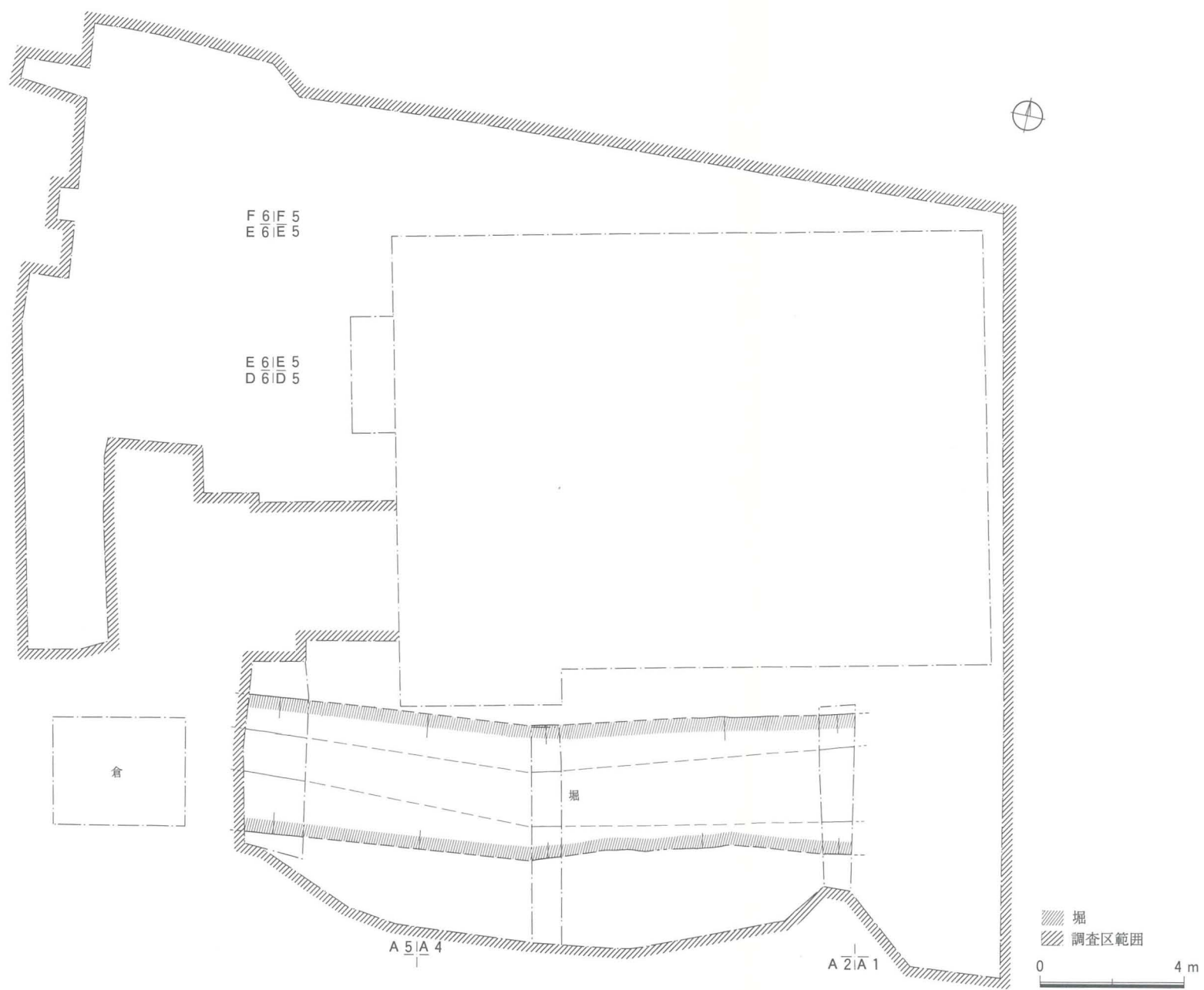
第6図 調査区遺構配置図2（明治20年代～昭和30年代前半）



第7図 調査区遺構配置図3 (創建期～現代)

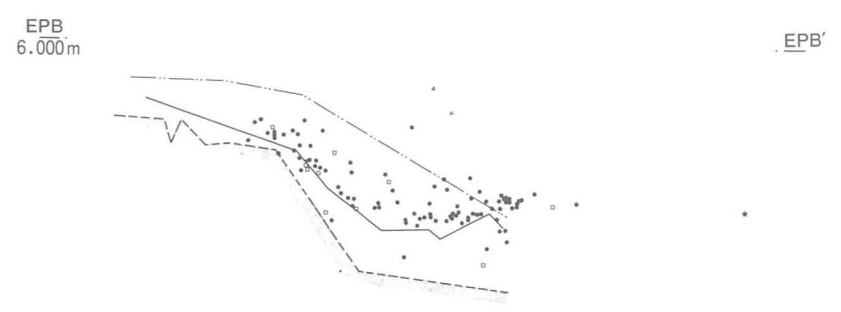
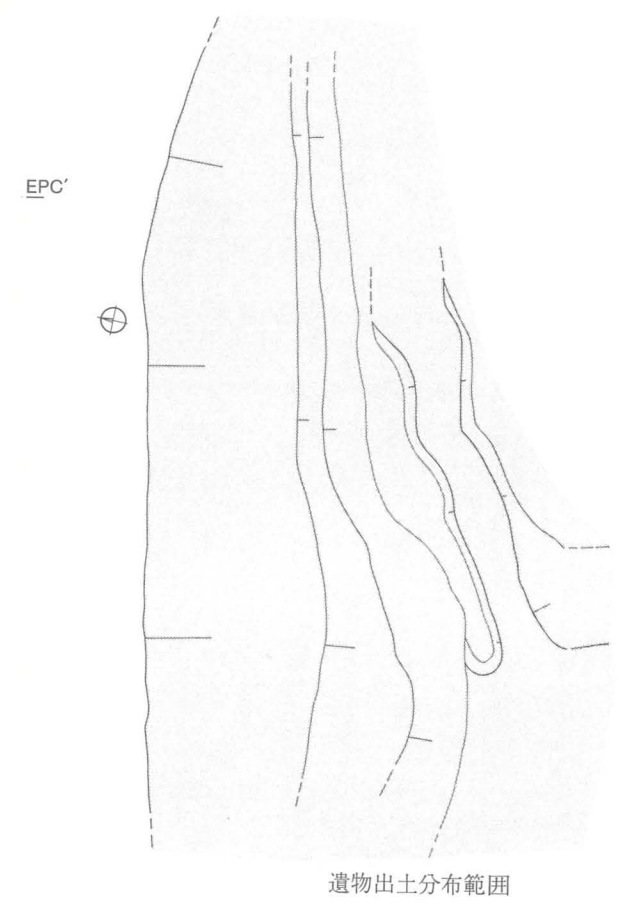
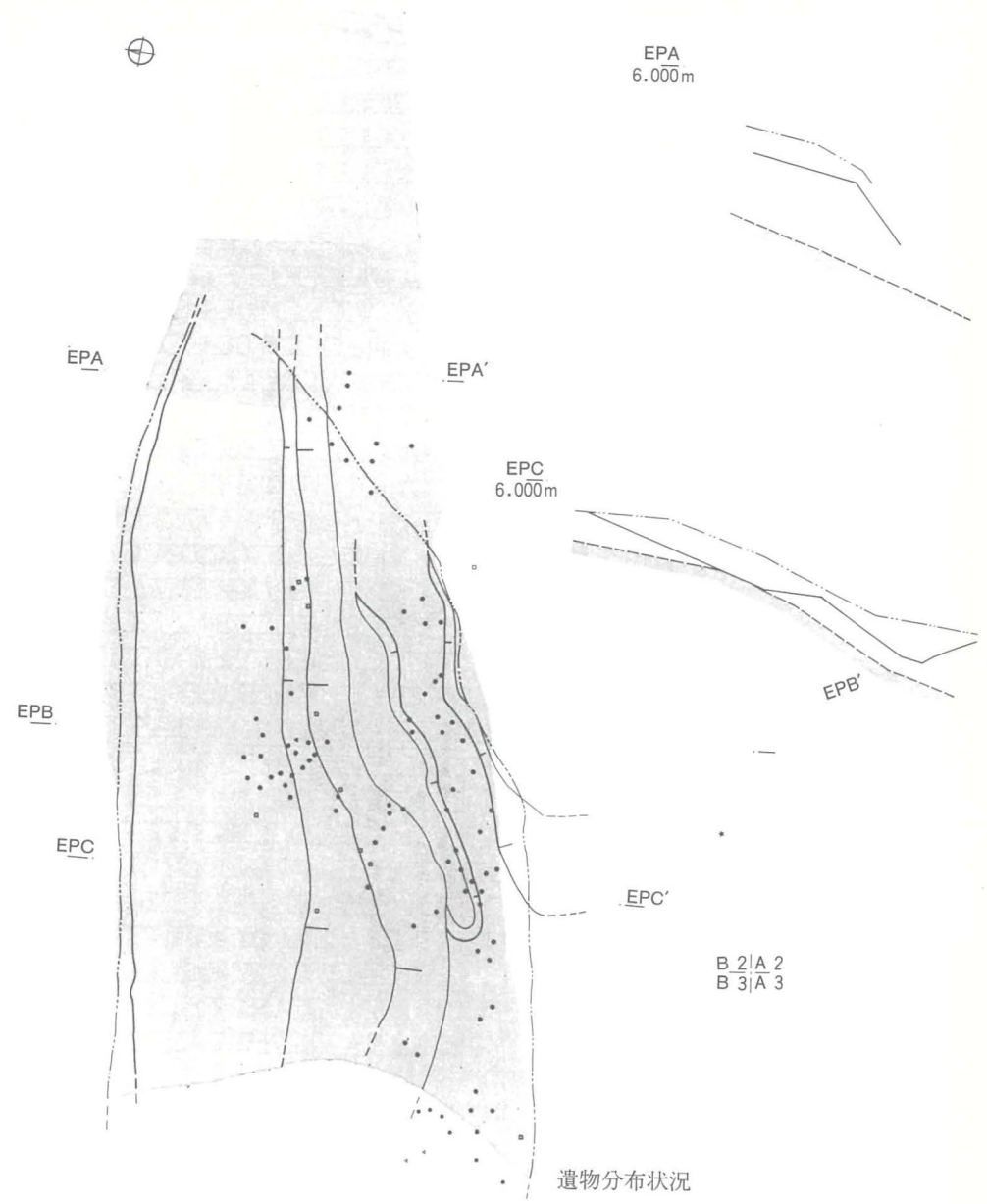


第8図 調査区遺構配置図4 (勝山館廃絶直後遺構)



第9図 調査区遺構配置図5 (勝山館跡併行期堀跡)





- 陶磁器
- 骨角器
- 不明溶解物
- ◻ 鉄製品
- 羽口
- 炭化物範囲



第10図 鍛冶関連遺物分布図

を検出できず、検討を要する。遺構の存続時期は掘廃絶直後から宮ノ沢川右岸Ⅱc層堆積頃と推される。(松田)

### 3 旧笹浪家住宅関連遺構：(第5～7図)

旧笹浪家住宅は、笹浪家5代目当主久右衛門(1838年没)の建築と伝えられる民家である。初代は享保年間に能登国笹浪村より松前郡福山に渡り、後に上ノ国に移住したという。代々当主は久右衛門を名乗り、漁業を大規模に営んでいた。又、幕末の8代目は村の名主を勤めるなど、上ノ国でも有数の旧家であった。当家に伝わる「家督普請扣」には安政4(1857)年に土台替え、翌年に屋根の葺き替え工事を行った際の記録が残り、又、主屋の材の古さから19世紀前期の建築であると、調査された元文化庁宮沢智士調査官は結論し、現存する北海道最古の民家建築と位置付けられた。家屋の規模は桁行15.9m、梁間11.9m。切妻屋根、石置板葺(現在は鉄板仮葺)、平入り、壁は下見板張。宮ノ沢川の対岸には、当家に属した嘉永元(1848)年建築の蔵(現在解体し部材を保管中)と明治18(1885)年築の蔵がある。今回の調査は裏庭を中心とした主屋周辺を行い、次年度は床下の一部と主屋西南にある雑蔵前・下を調査予定である。

#### 3-1 創建期～幕末期(第7図、PL.10-1・2)

家に伝わる古絵図や口伝により裏庭に「はなれ」が在ったことが知られる。古絵図では、はなれは主屋南側の東寄りに三間×二間の規模で、西にインカワ(縁側)、東南隅に忍(納戸のことか?)があるとされている。又、主屋正面(北側)は明治初頭頃、道路拡幅で三尺縮めたと伝えられ、現建物よりは若干梁間方向が広がった。

旧笹浪家遺構確認調査は、先ず前述のはなれの遺構検出から着手した。調査区東界(A・B1区)の庭を囲う石列の下層から新たに南北の石列(PL.10-1・2)を検出した。石の配列方向は、現主屋の柱に残るほぞ穴と対応する位置関係にあり、これらがはなれの基礎石と推される。しかし、西側・南側・北側部分は庭の造作や水道工事で動かされてしまったのか、検出出来なかった。B4区主屋台所南は、口伝で流し前と言われる所で、古絵図には今よりも大きな外屋があったことが窺われ、調査では東西に並ぶ柱列(P16・24・30)を検出した。しかし、現家屋に残るほぞ穴の延長と一致せず、この柱列と建物の関係は検討を要す

る。主屋、柱列に並行する軸で溝1を検出した。建物との配置関係からすると、これが伝流し前の雨落ちと推される。又、流し前以外の主屋南面の雨落ち想定部分は、水道管敷設工事で攪乱を受けているため、溝は検出できなかった。調査区北側のF1～4区では創建当初の主屋の規模を確定する正面基礎石、雨落ち等が検出されることが期待されたが、水道工事や道路工事などで(5)層まで削平されており、旧状を復元する遺構を確認することは出来なかった。

#### 3-2 明治改築期(第6図、PL.1-2、10-3)

明治の初め頃、主屋は正面が3尺縮められ、現状に近い状態になる。又、明治20年頃の様子を描いた銅版画によると主屋西側には、主屋後背にある蔵の差し掛け様の建物等が見られる。

主屋正面E1～5区で石垣(PL.1-2)を検出した。石垣は3段積みで、1段目は表面を平滑に仕上げた切石からなり、地覆を受ける。2段目以降は荒削りした礫を積んだものである。玄関部分で屋内に水道を引き込む工事による乱れがある。一方、東西妻側と裏面の基礎は板状の石を無造作に積んだもので、石垣と呼べるほどのものではない。又、前述の銅版画によると玄関から道路へ橋が架けられており、その橋脚と推される角材を検出したが、時代は特定できなかった。C・D1区の東妻側に溝や杭穴を検出した。東側の排水溝と推される。主屋西C7、D・E6区では柱穴を検出したが、纏まった柱列にならず、前述銅版画にある施設等に該当する柱穴とは確定できなかった。又、礎石建ちであることも想定し、石の分布や抜き取り痕跡にも注意を払ったが、確認できなかった。西側全体も庭木の移植、小屋の造作、護岸工事の削平等で大きく攪乱を受けているようである。

3-3 明治～現代(第5図、PL.10-3) 横庭に石垣が積まれる。前述、銅版画に見られないので明治20年以降のもので、続上ノ国村史口絵写真にみられることから、昭和30年代前半頃までは露出していたと推される。西妻側では、北方向へ排水する溝を検出した。壁の崩落防止のため、土留め板を立て杭で支える。裏庭には石積みが作られ、庭木の移植等が行われ、現在に至る。(松田)

4 宮ノ沢右岸遺物集積地点：第14図にあるように宮ノ沢右岸に大量の遺物が見られた。駒ヶ岳d火山灰下に形成されていること、瀬戸・美濃大窯

製品や、青磁・染付けなど勝山館併行期の陶磁器も見られるが、主体が胎土目積唐津焼であり、勝山館跡では出土しない砂目積唐津焼が少数ながら見られ、中国製染付にも勝山館跡のそれとは異なるものが見られること、伊万里焼が出土しないことなどから、勝山館廃絶直後、およそ慶長年間頃と推したところである。第14図からは調査区南部に陶磁器が、北部に木質遺物が多い傾向が見られる。陶磁器は碗皿が主で、播鉢が少ない。又包含層は更に北、現国道228号線の下まで広がっている。第13・15図は遺物包含層を掘り上げた後の状況であるが、東側に緩やかに湾曲する旧状が見られる。宮ノ沢川の河床の移動を示すかと推する。

イ 杭列：現宮ノ沢川に平行して5列の杭列跡を想定した(第13図)。杭列Aは右岸最も東寄りの杭列で、長さ50cm程残存直立していたW97と柱穴内に根元が入ったまま横倒しになっていたW13を結ぶライン上のW83、82、91、88、90の杭先端を結ぶものである。83~90の間に5本の杭が集中するのは、多少疑問とするがほぼ同寸の杭が横倒しの状況にあり、一体と想定した。杭の長さは2~2.4m、皮付きの丸木の下端を杭に加工したものが多く、上端が二又のものもある。杭列BとしたものはP1とW45を結ぶラインで想定したが、P1の確認レベルが5.25mとやや高く、確認面が更に上層との指摘があり、難がある。C列は、W62~W56のラインであるが、W56は北半石列S-βの上に直立していた杭であり、河床の地山に先端が打ち込まれている、92、80、などの他の杭と異なり、これも難がある。D列はW10、60、11、12、の横倒れ状態で検出の杭先を結んだラインである。E列は最も宮ノ沢川寄りのセクション面で確認されたP2と同じく調査区壁際に検出された杭位置を結んで想定したものである。杭は直立されていたものではなく、W14のレベルもやや高い。

想定した第13図の杭列を検証し、以下に再構成しておきたい。

杭列1として第13図A、杭列2は、W10?、62、61、80、92、57、α、55、54のライン、杭列3としてP2に列るラインを想定できそうである。他にW56のように面を違えて、直立して検出された杭や、横倒し状態の杭も何本かあり、さらに複数の杭列の存在が推測される。杭列1が横倒れの状態で検出されたのは杭列2の上端の面より下位で

あること、土層堆積図G-G'面の観察では、東寄りの部分の埋没が黒色土遺物包含層(Ⅱc層)に先行することから、杭列1が先に作られたと推した。横倒れの杭の長さは2m余であり、直立すると上端の標高は6~6.30m程となる。これは発掘終了時の宮ノ沢右岸標高5.7m前後より、50cm余高い位置となる。2m前後の杭をこの高さから打ち込むことは不可能である。川沿いの段差(斜面)下に杭を打ち込み、川の侵食と崩落を防ぐとともに、若干の整地、及び川への転落防止がこの杭列を設置した目的と推される。

ロ 配石状石列(第15図)：調査区には宮ノ沢川が運搬した大小多数の礫が堆積している。その中に人意的とも解される配石状の石列が検出された。北側のそれは、標高4.1m程の、遺物包含層が堆積する以前の(河床)面に径30~60cmの自然石6個がほぼ平らに並ぶ。掘り込みや詰め石は見られない。石、上面と右岸の比高差60cm、この間に階段状の堆積などは検出できなかった。巾1mほどで川に向い1.2m程のびる。杭列2のW57とαがこの石列の両側に穿たれており、この時点ではその存在は知られていたかと推されるが、杭列1W97がこの上に倒れこんでおり、杭列1併行期または以前と推される。

南側の石列は流路に平行して長軸を持つ、7個2列の石列で0.8×1.6mの規模である。東側の一列は40cm高く段差がつく。この列の石の下には30~40cmの厚さで遺物包含層(Ⅱc層)が堆積しており、この遺物包含層が形成する途次にこの石列が配されたと推される。又、東側石上面と右岸上とはほぼ同じ高さであり、土層観察面K-K'の観察からもこの間がほぼ水平に作られた一時期のあることが推される。杭列1が機能していた後半から同2構築前後頃であろうか。

土壌13：南側石列の西、宮ノ沢川寄りに小さな掘り込みがあり土壌とした。周囲が砂利を主体としたⅡd層及びその下位のⅣ層であり、その中に木質遺物等を多量に含むⅡc層が落ち込み、その上部で絵唐津大皿(第21図1)が出土した。覆土は自然堆積を示している。南半の掘込みは確認できなかった。川水をためる掘り込み状の凹みが埋没したものと推した。恐らくは南の石列と同時の使用であろう。(松崎)

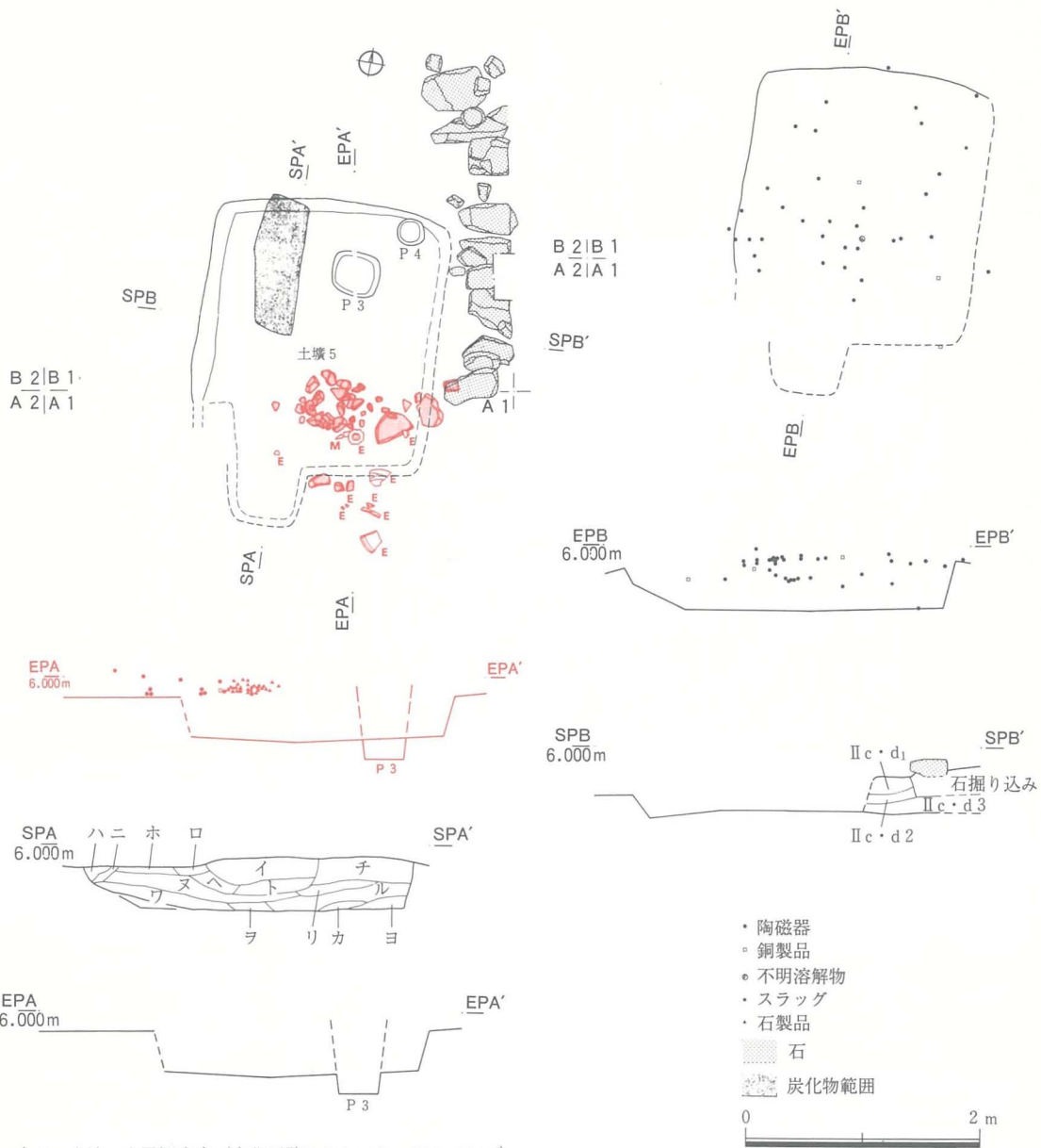


表12 土壌5土層観察表〈南北西壁セクション SPA~SPA'〉

イ	10YR3/3	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粒	ソフト	C少量
ロ	7.5YR3/3	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粒	ハード	C少量
ハ	7.5YR3/3 4/4暗褐	褐色土主体		礫粒	ハード	C少量
ニ	7.5YR4/410YR7/1	褐色土黒色土		礫粒	ややソフト 結質	C少量
ホ	10YR3/4	暗褐色土主体		礫粒	ハード	C少量
ヘ	7.5YR3/2	黒褐色土主体		礫粒		C微量
ト	10YR3/3	暗褐色土主体	ロームブロック少量	礫粒	ソフト	C少量
チ	10YR3/4	暗褐色土主体		礫粒やや多い	ハード	C少量
リ	7.5YR2/2	炭化物主体		礫	ソフト	Cやや多い
ス	10YR3/3	暗褐色土主体		礫	基盤粒	
ワ	7.5YR3/3	暗褐色土主体		基盤粒やや多い	ややソフト	C微量
ヲ	7.5YR3/3	暗褐色土主体		小礫、砂粒	ややソフト	C少量
カ	7.5YR3/3	暗褐色土基盤礫主体		礫	基盤粒やや多い	
	7.5YR3/3	暗褐色土主体		礫粒少量	ややハード	
	7.5YR3/3	暗褐色土主体		礫粒	ソフト	

〈西東北壁セクション SPB~SPB'〉

IIc・d1	7.5YR4/3	暗褐色土主体		基盤粒	ややハード	C少量
IIc・d2	7.5YR3/3	暗褐色土主体		礫粒		Cブロック状
IIc・d3	7.5YR3/3	暗褐色土主体		礫粒		C少し
石掘り込み	7.5YR3/3	暗褐色土主体		礫粒	ソフト	C少し

第11図 土壌5平面図他

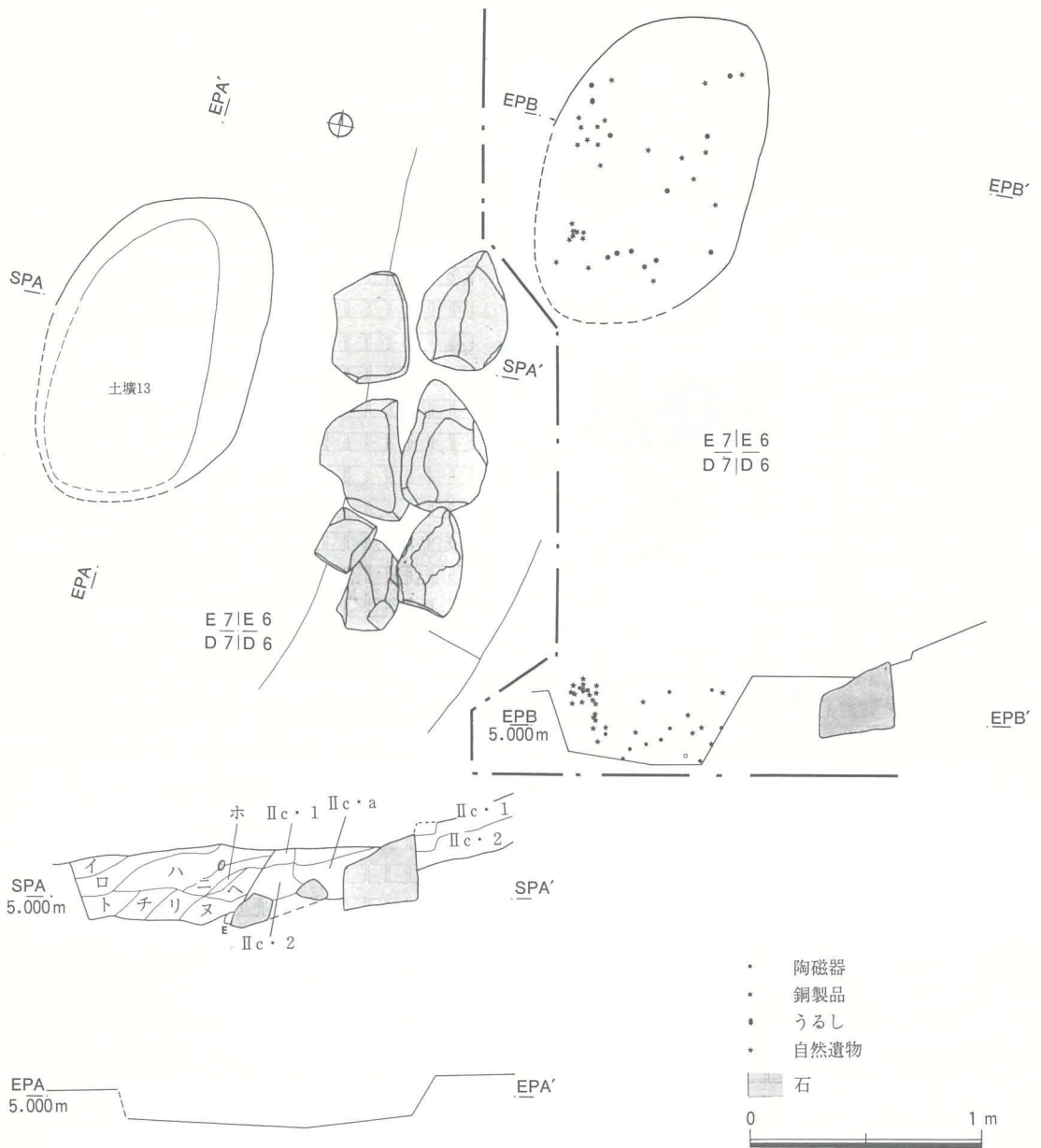
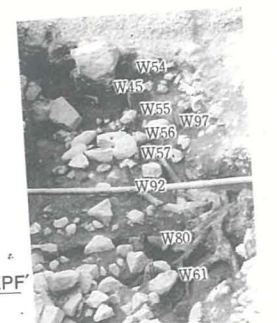
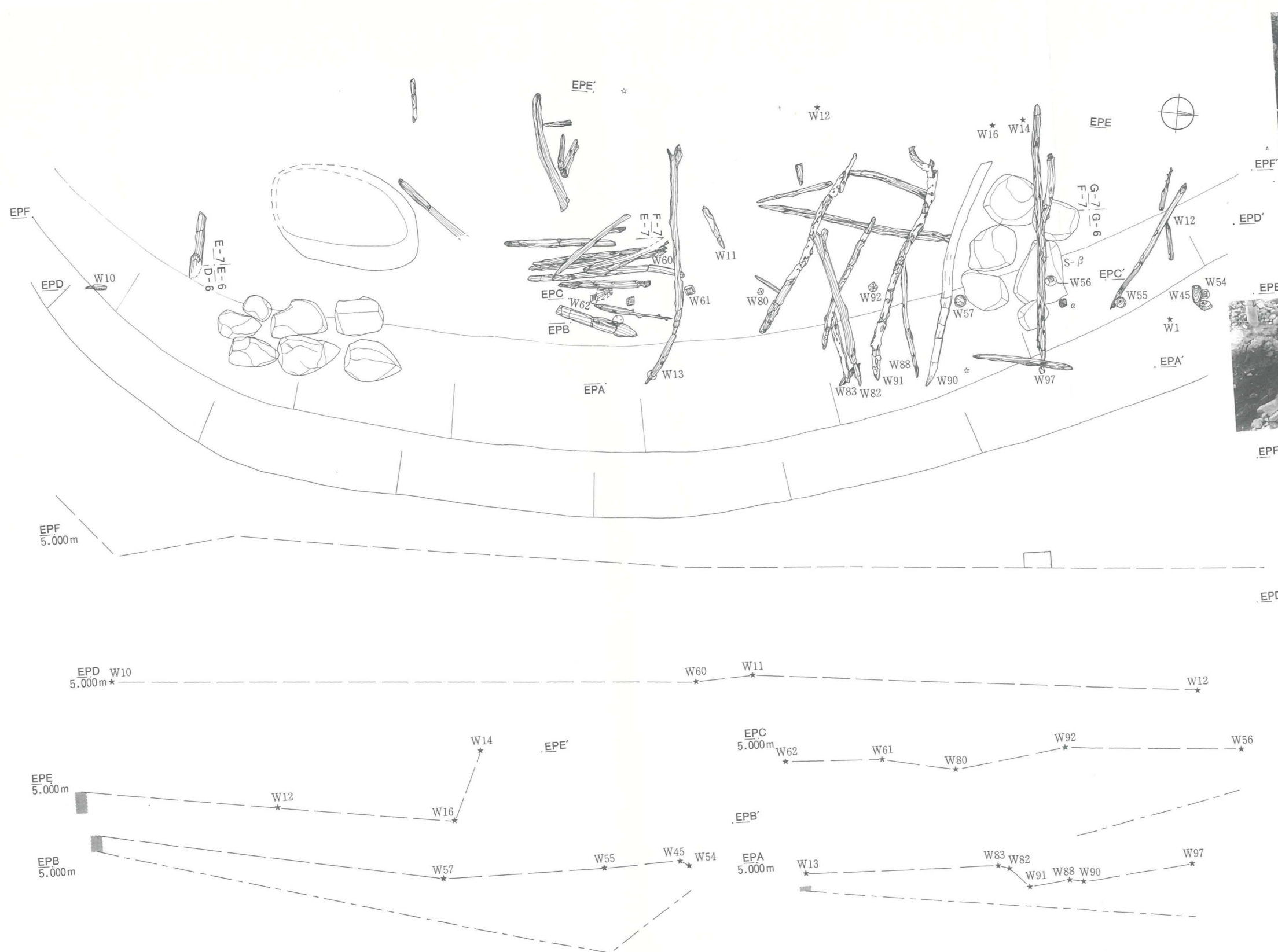


表13 土壌13土層観察表〈西東北壁セクション SPA~SPA'〉

イ	10YR2/2	黒褐色土主体		砂	砂利少量			木多い
ロ	10YR2/2	黒褐色土主体	ロームブロック少量			ソフト		木少量
ハ	10YR2/2	黒褐色土主体		礫粒30%		ややソフト		木少量 火山灰微量
ニ	10YR2/2	黒褐色土主体	ローム粒	礫粒	砂少量	(ハ)より少しハード		木少量
ホ	2.5YR3/1	黒褐色土主体		礫粒40%		ガラガラしている		
ヘ	10YR2/2	黒褐色土主体	ロームブロック	礫粒少量	基盤礫少し		粘土質	
ト	10YR2/1	黒色土主体		礫粒少量			粘土質	木
チ	10YR2/1	黒色土主体		礫粒	砂利	少しガラガラしている		
リ	2.5YR2/1	黒色土主体		礫粒	基盤礫やや多い	ややハード		木
ス	10YR2/2	黒褐色土主体	ロームブロック	礫粒			粘土質	
IIc・1	10YR3/1	黒褐色土主体		砂	砂利	(く)よりハード		木少量 C
IIc・2	10YR3/1	黒褐色土主体		砂	砂利	ややソフト		
IIc・a	10YR3/1	黒褐色土主体		砂	砂利	ややハード		木少量 C

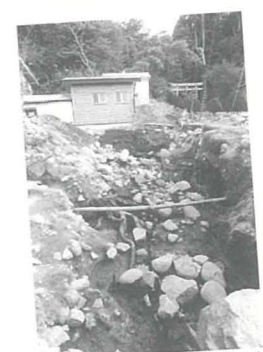
第12図 土壌13平面図他



杭列検出状況(南から)



杭列検出状況(南東から)

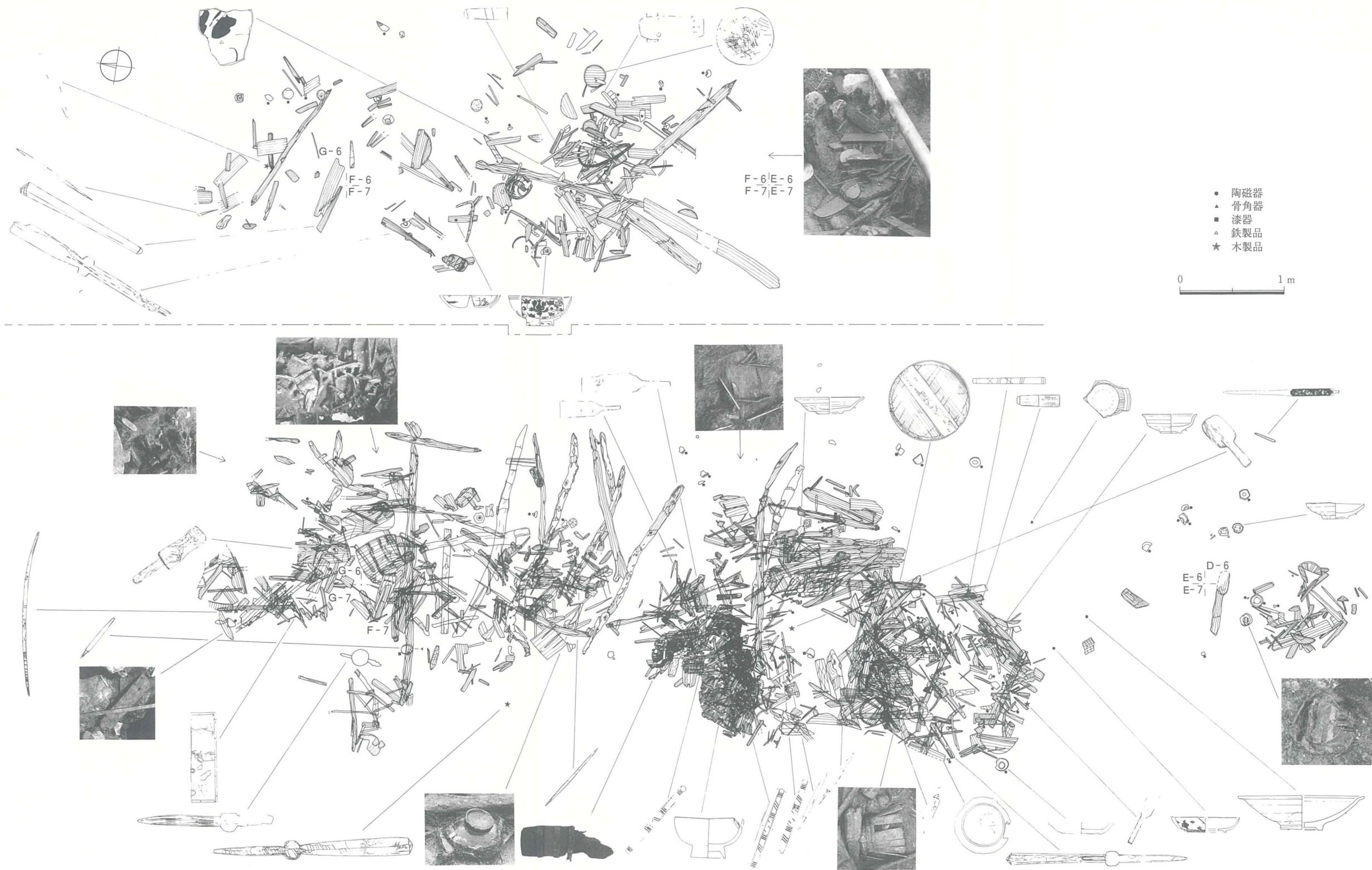


杭列検出状況(北から)

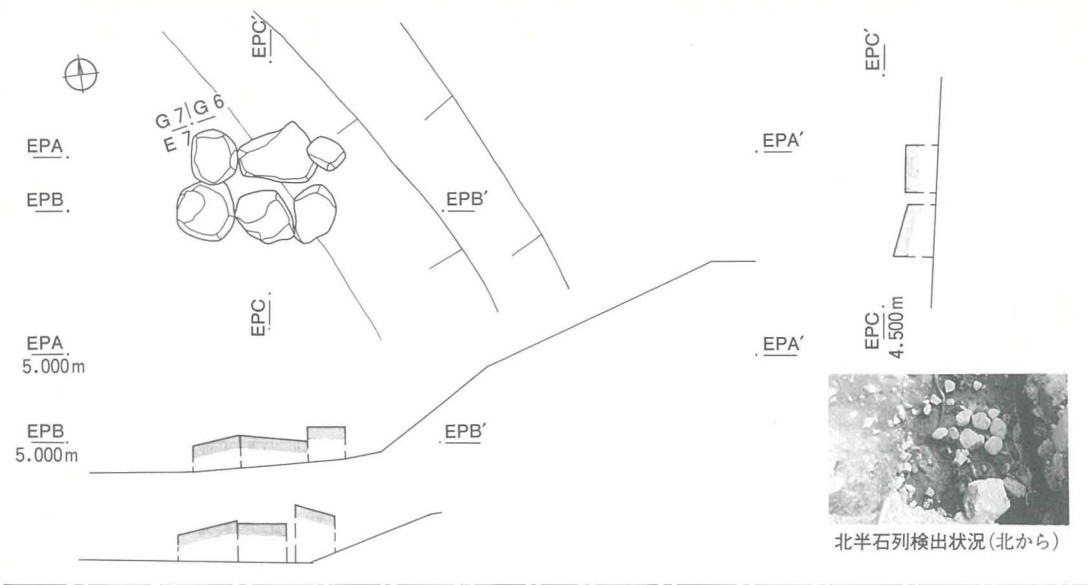
- ☆ 柱穴、同痕跡?
- ★ 杭検出位置
- 柱穴位置
- 杭柱根
- 石



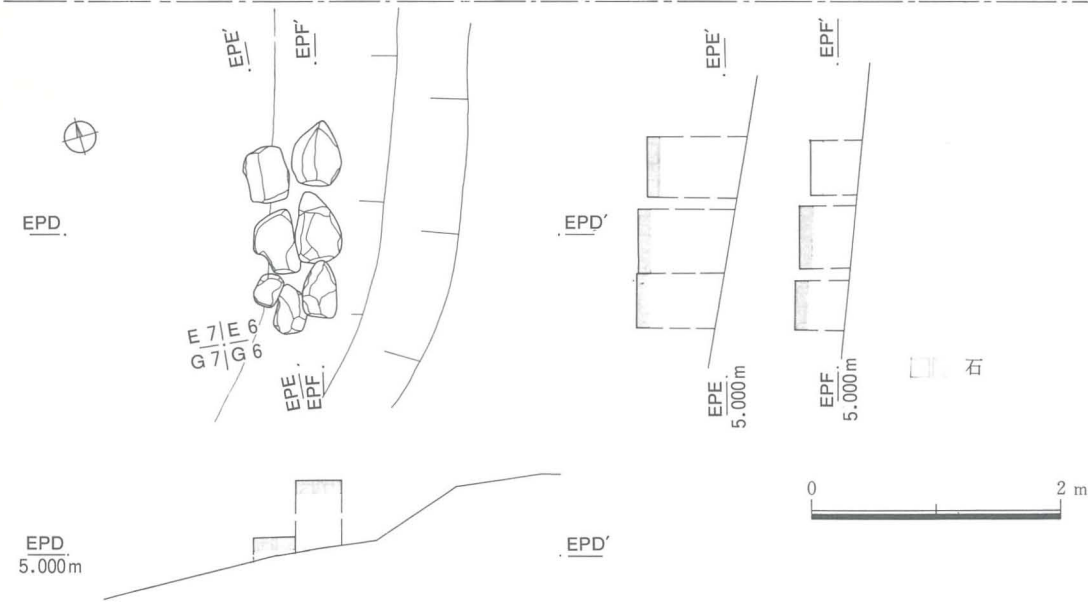
第13図 杭列検出状況図



第14図 木製品等出土状況図 (上II d層、下II c層)



北半石列検出状況(北から)



南半石列検出状況(南から)



(西から)



(南西から)

第15図 配石状遺構平面図他



#### (4) 出土遺物の概要

陶磁器、木製品、金属製品、石製品、骨角器、動物遺存体、植物遺存体、縄文・土器等が出土した。前述の通り、Ⅱc層の殆どをサンプリングし、水洗作業行っている為、遺物点数は増加中である。今回はⅡc層出土の遺物を中心に作図したが、図示しきれなかったものもあり、それらは来年度の概要報告書に掲載予定である。

##### a 陶磁器 (第16～22図)

中世～近・現代の陶磁器1500点程出土している。産地、時期同定が未了であるため、図示したものを中心に概要を述べる。特に肥前磁器出現以降の陶磁類の分類が、筆者の力不足で遅れているので、次年度の調査結果と併せ、後日報告したい。

**青磁：**(第16図1)蓮弁文碗、稜花皿、坏、香炉が出土している。1は皿の底部。見込には圏線が巡る。中央にも文様があるようだが、モチーフは不明である。内外面の殆どに釉がかかるが、高台裏のみ蛇の目状に釉が禿げている。

**白磁：**(第16図2)直口縁碗、端反皿、切高台皿が出土している。2は切高台皿。全面施釉、内底面には重ね積み痕跡が残る。

**染付**(第16図3～19、PL.4-3・4)3は直口縁碗糸底、見込みと胴部に同じモチーフの花が描かれる(PL.4-4)。4は蓮子碗で、表面は口唇部に圏線、その下には列点文、内面口唇部に圏線が描かれる。5は直口縁碗。表面に花唐草文が描かれる。内面口唇部に圏線、見込みに二重の圏線が描かれる。胎土陶質。6は直口縁碗。表面に花、内面口唇部に圏線が描かれる。胎土陶質。7・8は内面に花卉、外面口縁部に圏線を描く。9は端反碗。口唇部と見込みに二重の圏線、樹花が描かれる。10は碗の底部で、2方向から削がれるように打ち欠かされている。13は直口縁糸底の皿。14は高台糸底、見込みに麒麟が描かれる。15・16は糸底皿。17～19は碁筒底の皿。17・18は見込みに擬人化した文字が描かれる。19は見込みに花が描かれる。胎土陶質。20は鉢。21は盤で陶質、漳州窯系のものとして推される。

**瀬戸美濃：**(第17図1～6・8～10)灰釉碗・皿、鉄釉碗が出土している。1・2は灰釉端反皿。いずれも底部に輪ドチ痕が残る。3は灰釉皿で見込みに印花があり、底部に輪ドチ痕が残る。畳付の2カ所に焼成後に付けられた切り込みがある。

6は内禿げ折縁皿。内面に削ぎがあり、底部に輪ドチ痕が残る。5は内禿げ皿。底部に輪ドチ痕が残る。4は内禿げの丸皿。8～10は鉄釉碗。8・9は口縁部が括れる大窯Ⅱ期相当の碗。10は口縁部の括れる輪高台の碗。前2者に比べ器高が高く、大窯末期ないしは登窯期の碗と推される。

**越中瀬戸：**(第17図7・第19図)鉄釉皿、播鉢が出土している。10は鉄釉丸皿で、口縁は内傾気味に立ち上がる。付高台内禿げ、高台裏、畳付きは無釉である。10は播鉢口縁である。胎土に長石を含む。

**珠洲：**口唇部に波状文が施され、緩やかに立ち上がる播鉢の口縁部(吉岡編年Ⅵ期相当)と卸目が密に施される播鉢胴部の破片が出土している。

**越前：**播鉢、甕が出土している。口縁部に段と削ぎがあるもの、口唇部が水平になるものがある。

**備前：**(第19図11)片口の播鉢が出土している。卸目は9条1単位、縦位、横位、斜位とランダムに施され、規則性は認められない。

**志野：**(第17図12～18)端反皿、丸皿、菊輪花皿、向付が出土している。図示したものは全て皿である。12は端反皿で表面に緋色があり、釉が厚くかかる。底部にトチン痕がある。11は端反皿で底部にトチン痕がある。口縁部に煤が付着する。13～15は丸皿。13は口縁が僅かに反る。16は内外面にトチン痕が3カ所ずつ残る。17・18は菊皿。19は見込みに二重圏線と花をモチーフにしたものと思われる絵が描かれる。

**唐津：**(第18～21図、PL.6-5)碗、丸皿、輪花皿、大皿、向付、徳利、沓茶碗、水差し(?)、播鉢が出土している。1～4は直口縁碗で輪高台、高台周辺部は施釉しない。5は端反碗、輪高台。畳付きを除き全体に白色の釉が施される。胎土目積みの皿は主に3種ある。丸皿(第18図6～11)、口縁を輪花状にするもの(同12～16)、腰が折れるもの(第19図1～5)。他にも口縁が折れるものや口唇部に溝が巡るものなどがあるが、小片であるため器形全体を窺えるものがなく、目積み法もどちらか分からないので、今回の報告では割愛した。6は端反皿で、輪高台、胴部が垂直に立つ皿。8・9は砂目積み皿である。8は口縁端反、輪高台である。9は腰が折れ、底部は上げ底状。7は藁灰釉でいわゆる朝鮮唐津の徳利口部分である。第20図1～3は向付で、四方を折り曲げ角形

に成形し、四隅を折込む。いずれも草文を見込みに描く。4は腰が折れ、輪高台。内面と畳付きにトチン痕あり。内面に絵が描かれる。5は刷毛目皿である。Ⅱc層からは他にもう一個体出土している。6は直口縁の碗、鉄絵が施される。7は砂目積み大皿である。第21図1・2は胎土目積み大皿。3は砂目積み大皿。いずれも草花をモチーフにした絵が描かれる。

**肥前磁器：**(第22図1～7)17世紀代から近代に至るまでの碗、皿が出土している。1・2は広東碗。3は碗の蓋、7は瓶で頸部分に蛸唐草文が施される。4は口縁が開き気味に立ち上がる皿。5は口縁が垂直に立ち上がる皿。6は端反皿、蛇の目高台で、底部のみ無釉。変わったものでは、長崎出島やオランダ輸出用の醤油や酒の容器として作られ、北海道の遺跡でも出土例が報告されているコンブラ瓶が1点出土している。

**瀬戸磁器：**幕末・明治期に比定される口径8～9cm前後、器高5cm程の端反碗が出土している。

#### b 金属製品 (第22・33図)

**鉄製品：**釘、鋸、鋏が出土している。鋏(第22図10)はⅡc層からの出土。握り鋏で、刃は厚さ1mmと薄い。図の如く、片方の刃がほぼ直角に折れ曲がった状態で出土した。9は鉄滓。

**銅製品：**筭、小柄、香炉、煙管、八双金物、銅銭が出土している。Ⅱc層から出土する銅銭は径が小さく、中央の孔が大きく、薄い無文銭が殆どで、銭名があるものは現段階では1枚しかない。

**筭：**(第33図12)は中央(紋のうえ)に花の花卉や雄薬の表現を金象眼で行っている。耳搔き部分のみ薄く、金と推される金属がかぶせられている。

**c 石製品**(第22図8) 鞆羽口、砥石が出土している。1は鞆羽口で、勝山館期の堀跡から出土。

**d 骨角器**(第33図) いずれも中柄と推される1～8・10は茎部を作り出すもの。2・10は断面が凹状になるので鹿の中足骨製と推される。10は前後が欠損し、被熱している。11は切片で、鋭利な刃物で切られたためか切断面はいずれも、ほぼ平滑である。

**e 木製品**(第23～32図)Ⅱc層から1000点以上が出土している。図示したもの以外に箸、柄杓の底板(?)かんじき、炉鉤、曲物、杭、マキリの柄等が出土している。

**樽：**(第23図、PL.11-4)蓋、側板、栓、底

板が出土している。1は底板で直径30.5cm。3枚の板からなる。木口2カ所に木釘が残る。2は蓋で、木口2カ所に木釘が残る。底板同様数枚の板を繋げて作られると推される。推定直径35cm程、径3cm程の注ぎ口が開く。3～6は栓で全長12～26cmと長さに関きがあるが、その内3点(4～6)が9cm前後である。径はいずれも3cm前後で、全長に関わらずほぼ同じである。

**折敷：**(第24図1)底板と推される。表面は平滑に仕上げられている。側面に径2、3mmの釘穴が残る。角は切り落とされる。

**桶底板？：**(第24図2)直径22cmの一枚板。桶の底板かとも思われるが、板中央に方1.5cm程の穴があき、左右には径3～5mm程の穴が6つあき、左2番目の穴には木釘が残る。表面には無数の刃物の傷が残る。穴に取り付くものが把手であれば鍋の蓋とも推される。

**箱底板：**(第24図3)外縁部に径2、3mm程の穴がある。表面は黒色の光沢があり、内面は何か塗られていたようである。

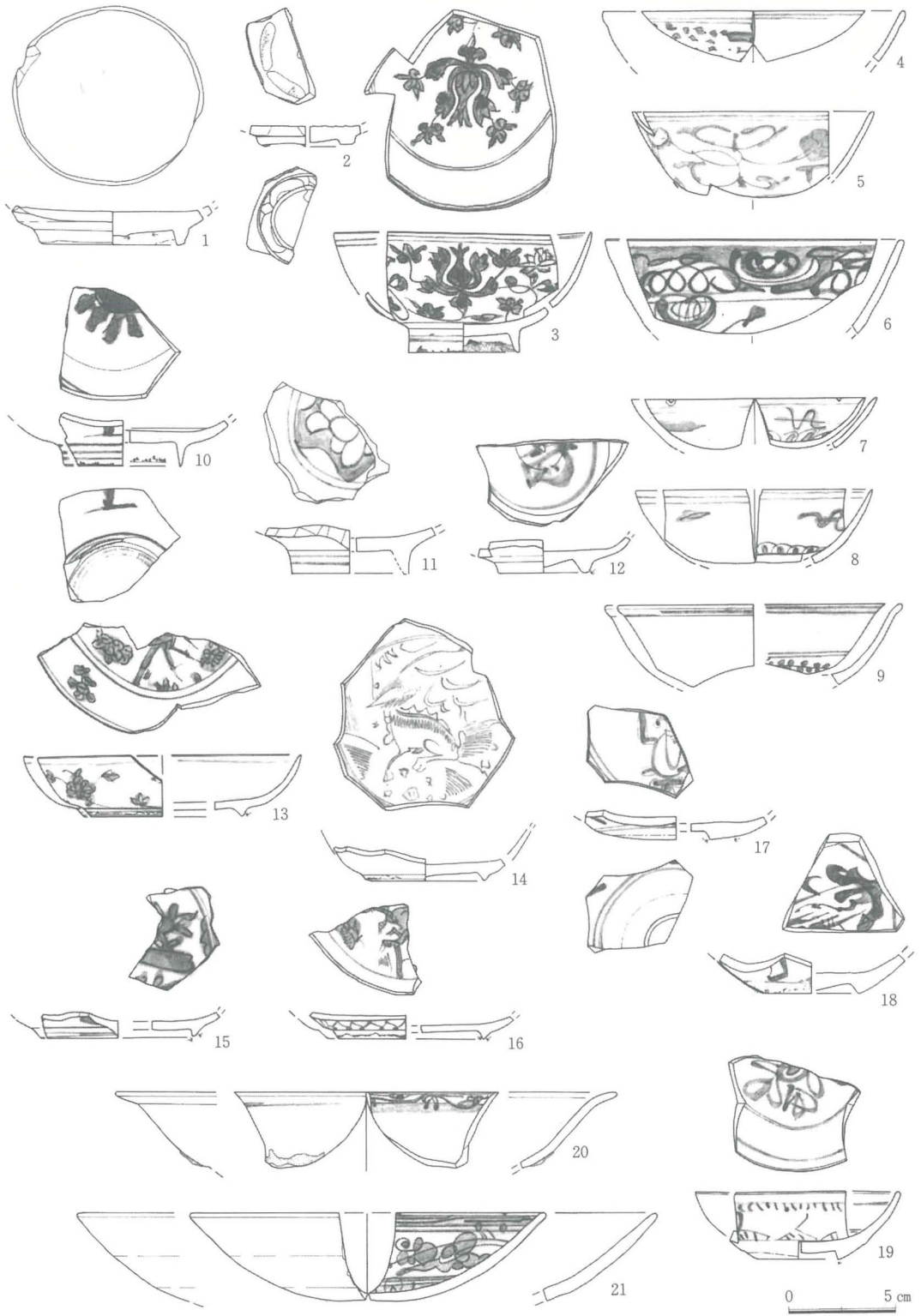
**串：**(第25図1～4)全長36～32.5cm、両端を尖らせる。断面は1.2cm前後×0.7cm前後の横長を呈し、面取りされる。民具の例から魚の焼き串と推される。

**横槌：**(第25図5)全長34cmと全長32.4cmのもの2点が出土している。図示したものは後者である。いずれも一木より作り出され、本体中央部は使用の為損耗が著しい。

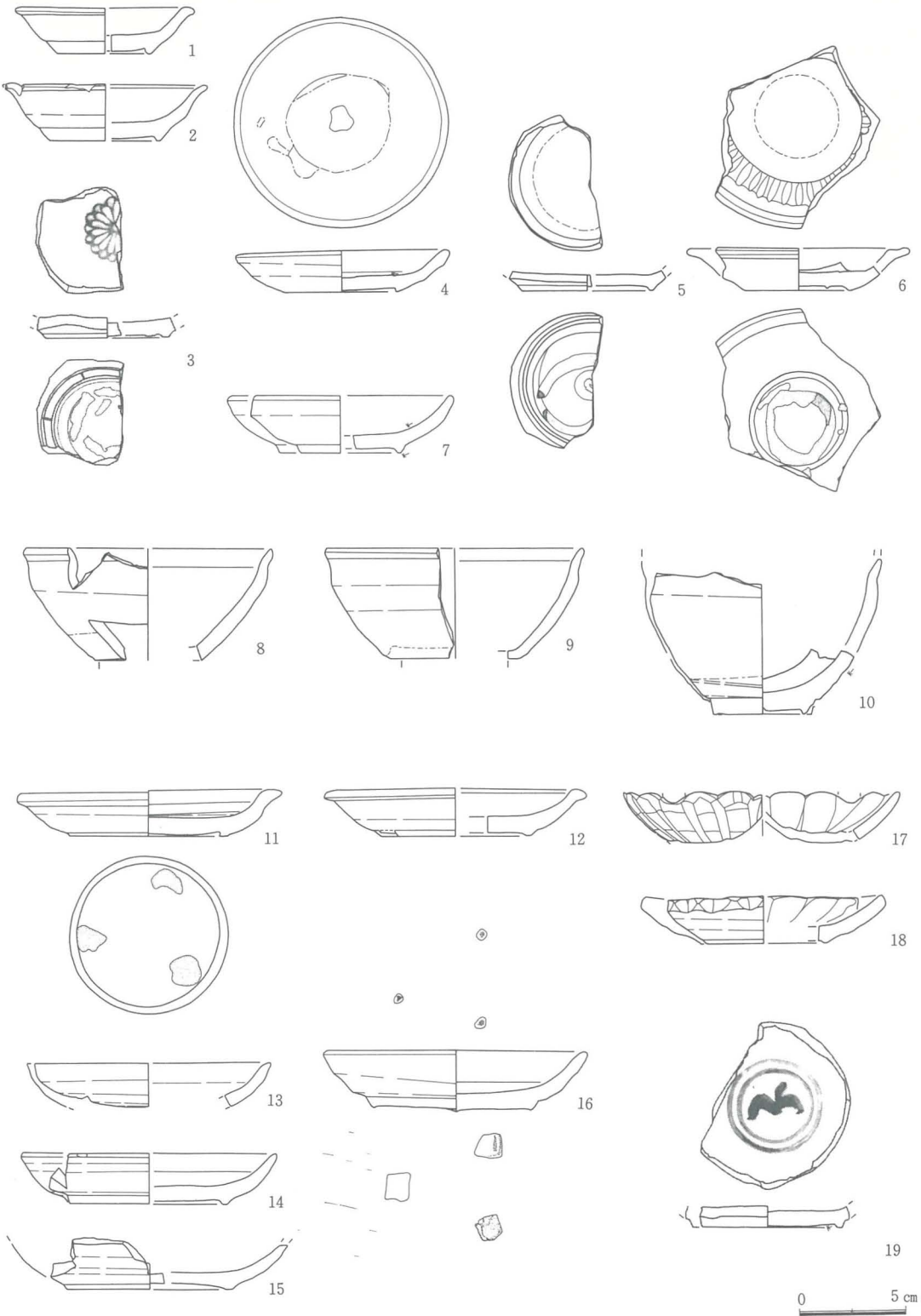
**下駄：**(第26図1・2)1は連歯下駄、全長24.8cm。前歯が欠失している。鼻緒以外に径4mm程の3つの穴がある。前歯の部分に当たる所に開けられていることから、折れた歯を接ぐ為の目釘穴とも推される。しかし、目釘や欠損した前歯が出土していないため、現段階では、この穴の機能については保留したい。2は連歯下駄。全長18.4cm、大きさからすると子供用の下駄と推される。指の圧痕や踵の痕が残る。図示したもの以外にも連歯下駄が2点出土している。

**楔：**(第27図1～4)全長16～20cm前後とほぼ似通った大きさである。断面は長方形を呈する。頭部の損耗は少ない。3cm前後の厚みの1・2、2cm前後の厚みの3・4の二つに分類される。

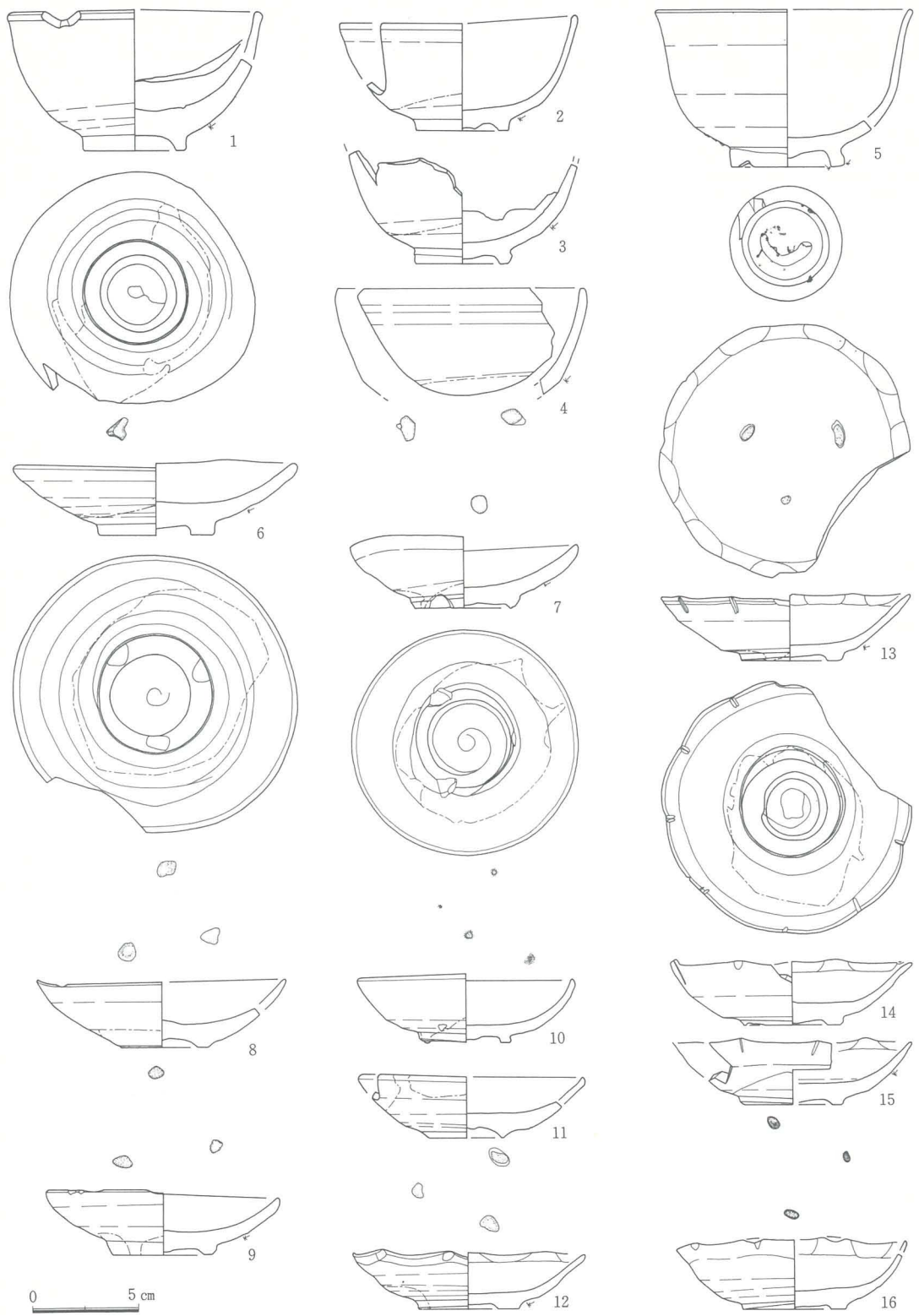
**鋸歯刃ナイフ形木製品：**(第27図5)全長26.5cm、ナイフ形を呈する木製品。刃部は13.5cmで、鋸歯



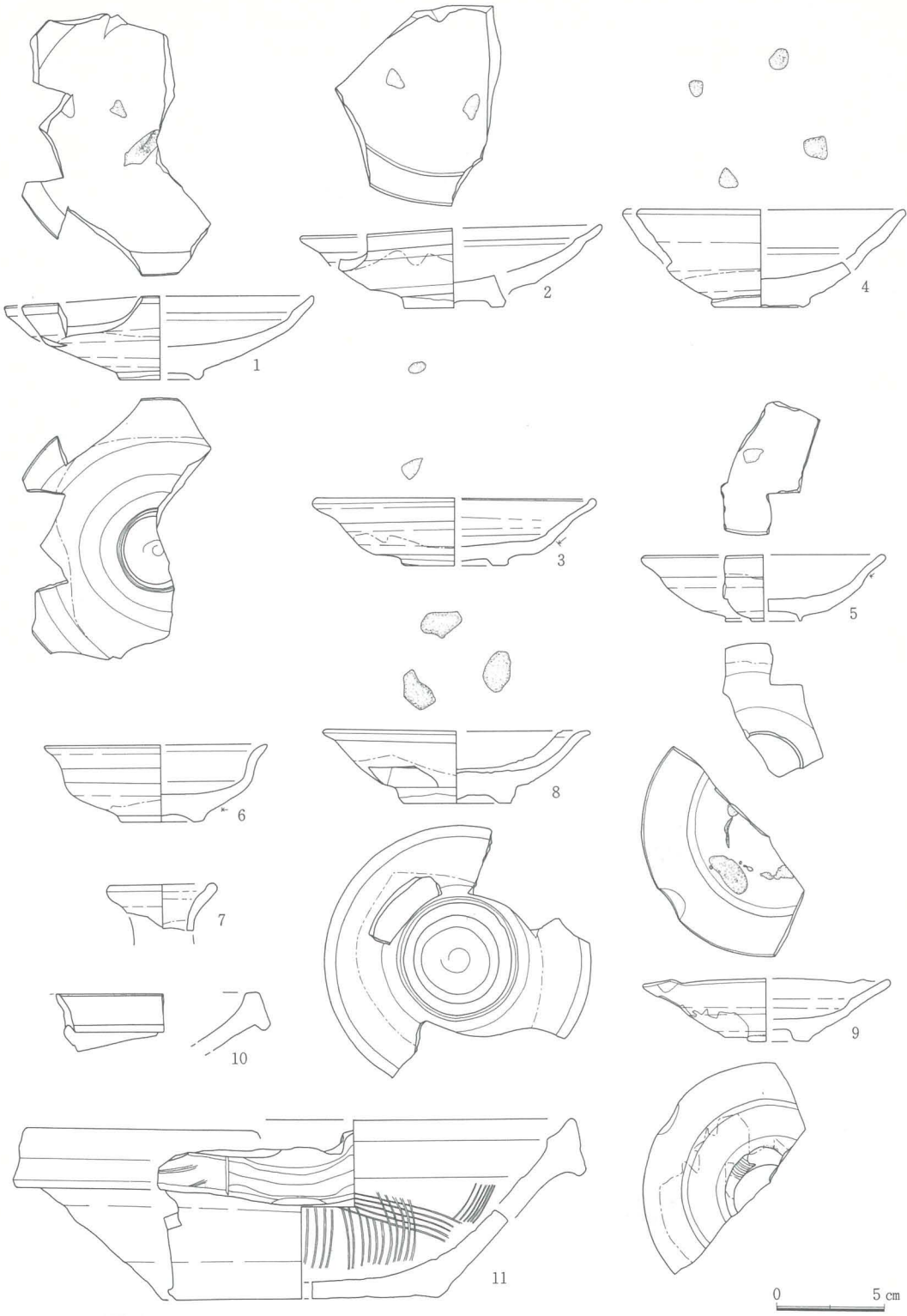
第16図 調査区出土遺物 (中国陶磁)



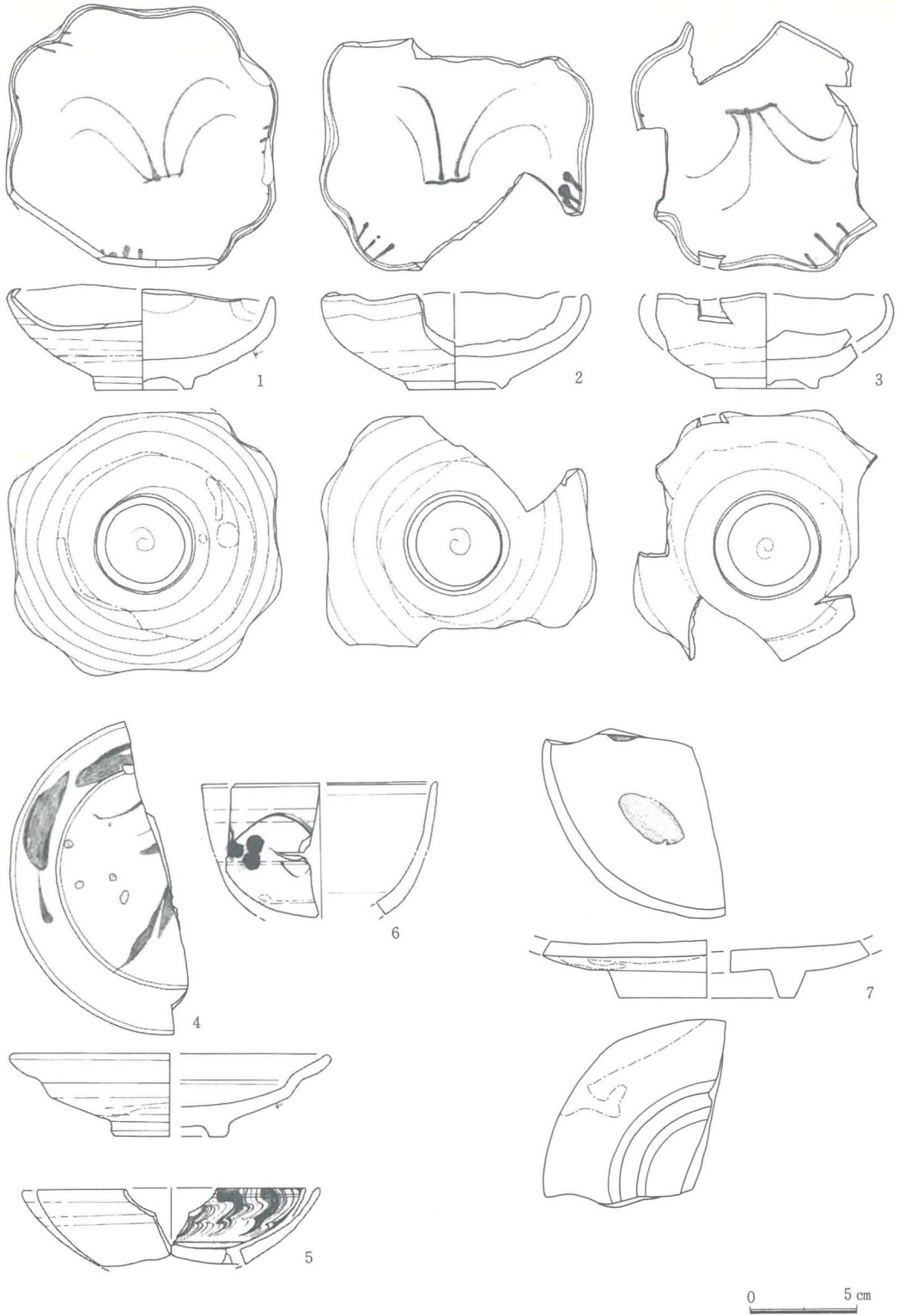
第17図 調査区出土遺物（瀬戸・美濃、志野）



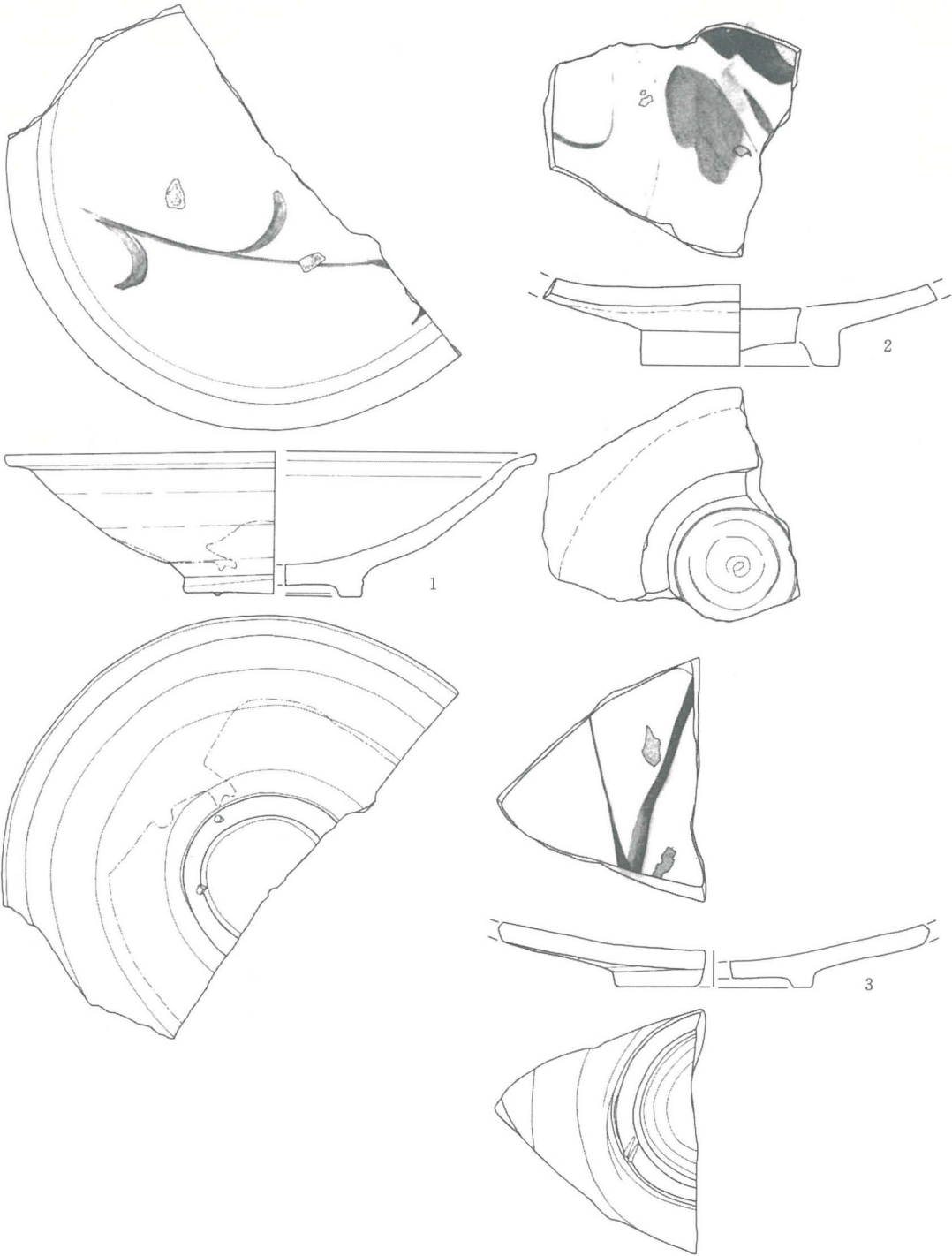
第18図 調査区出土遺物 (唐津)



第19図 調査区出土遺物 (唐津・備前)

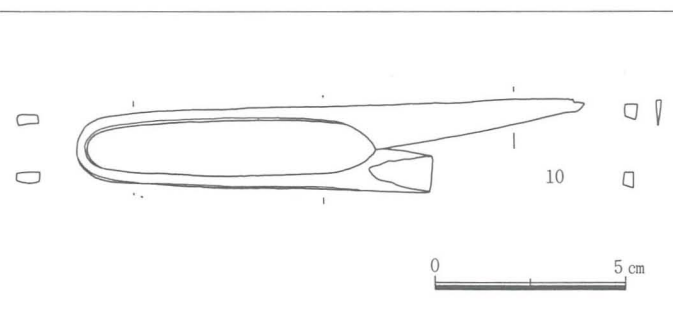
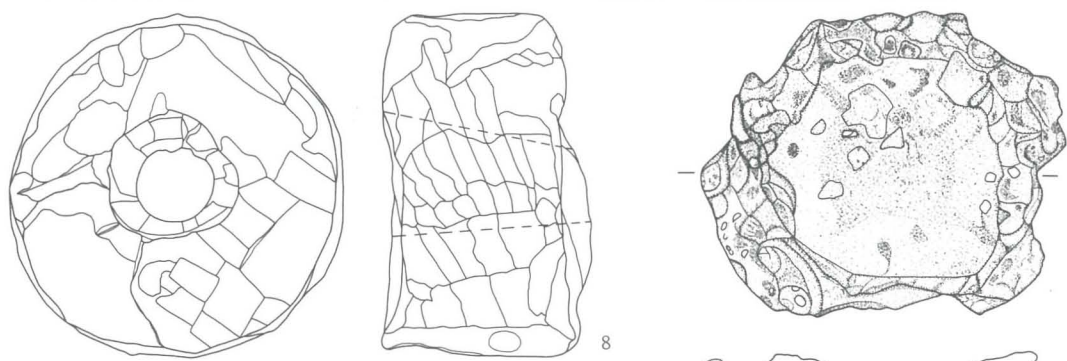
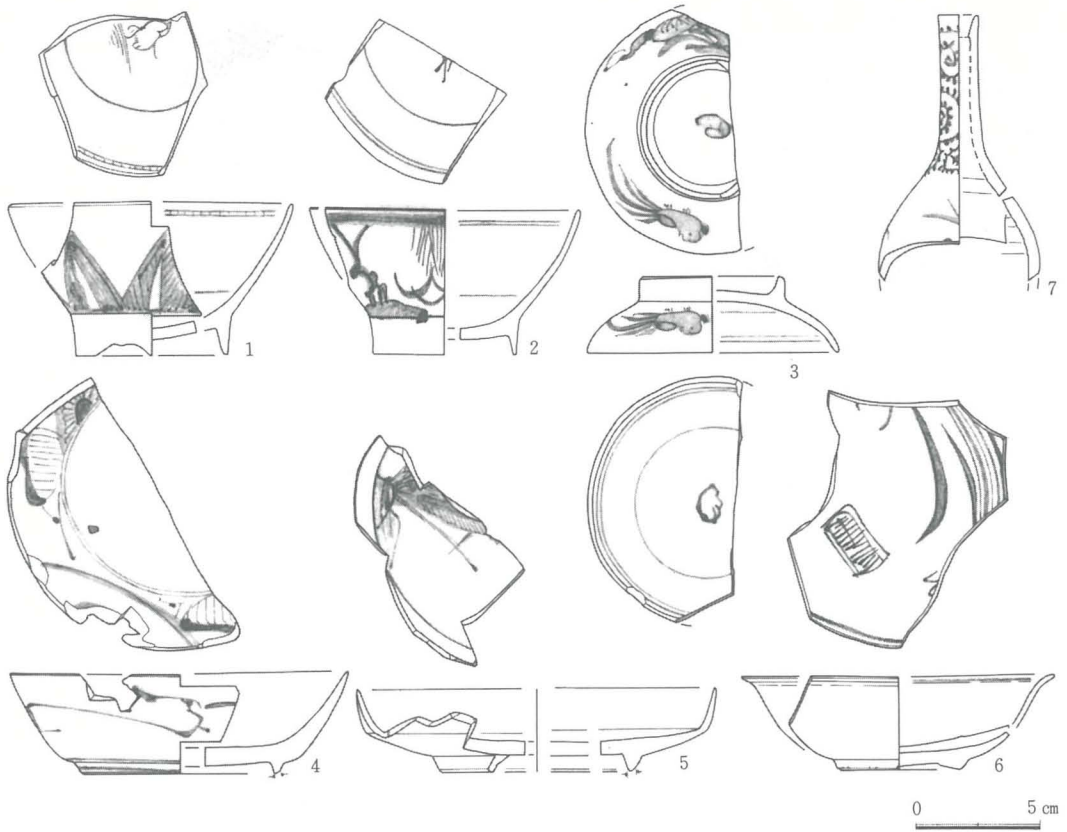


第20図 調査区出土遺物 (唐津)

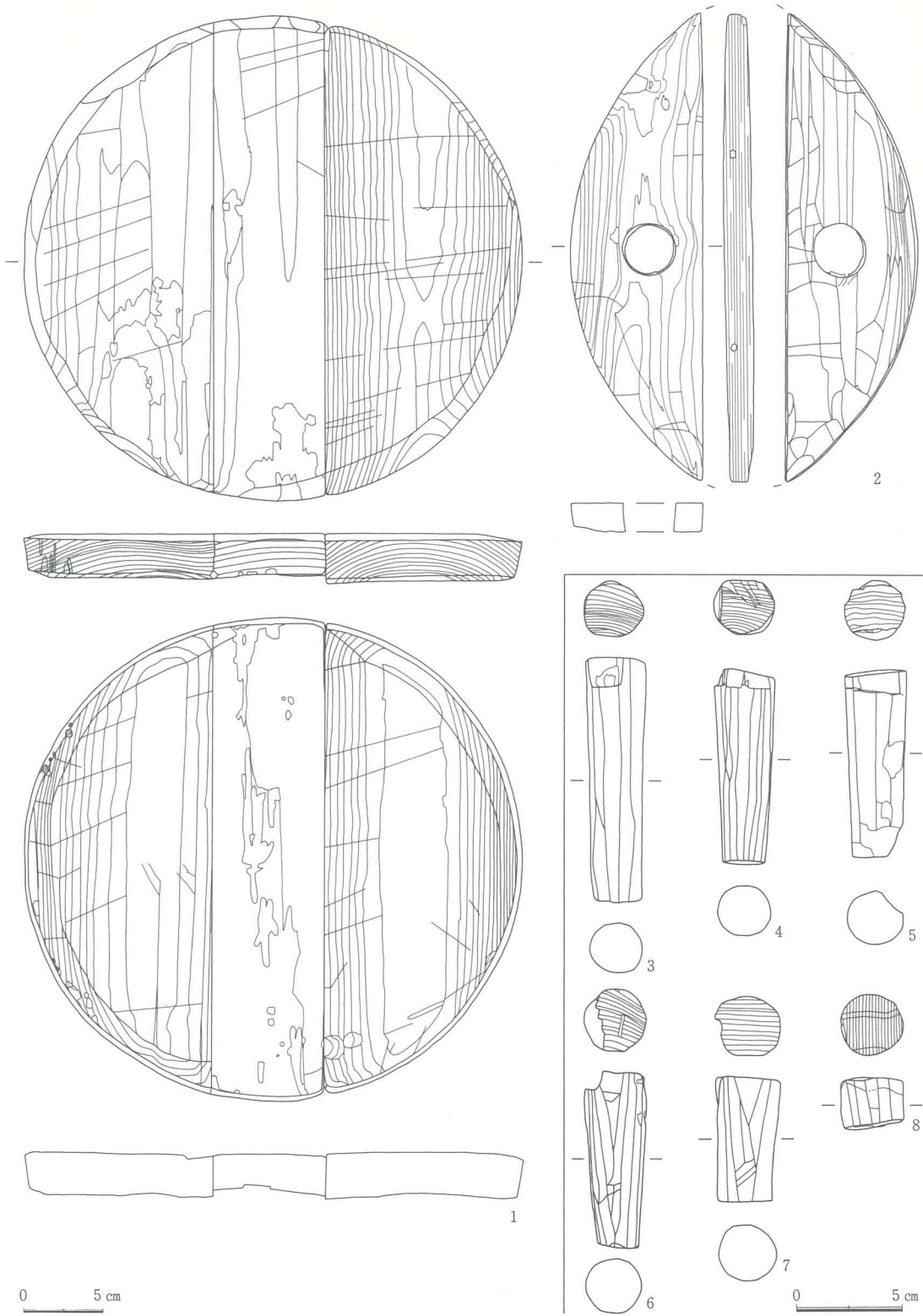


第21図 調査区出土遺物 (唐津)

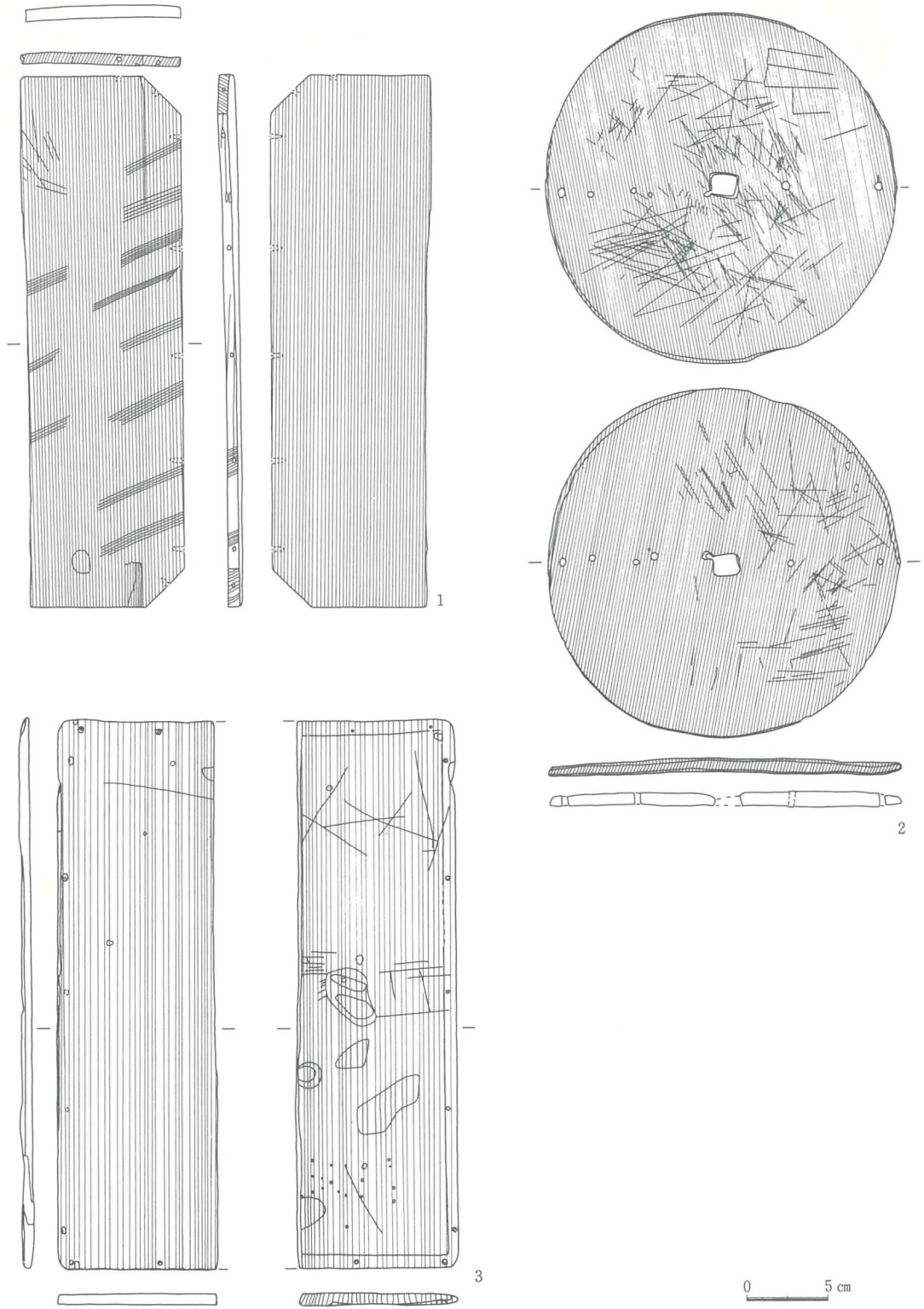




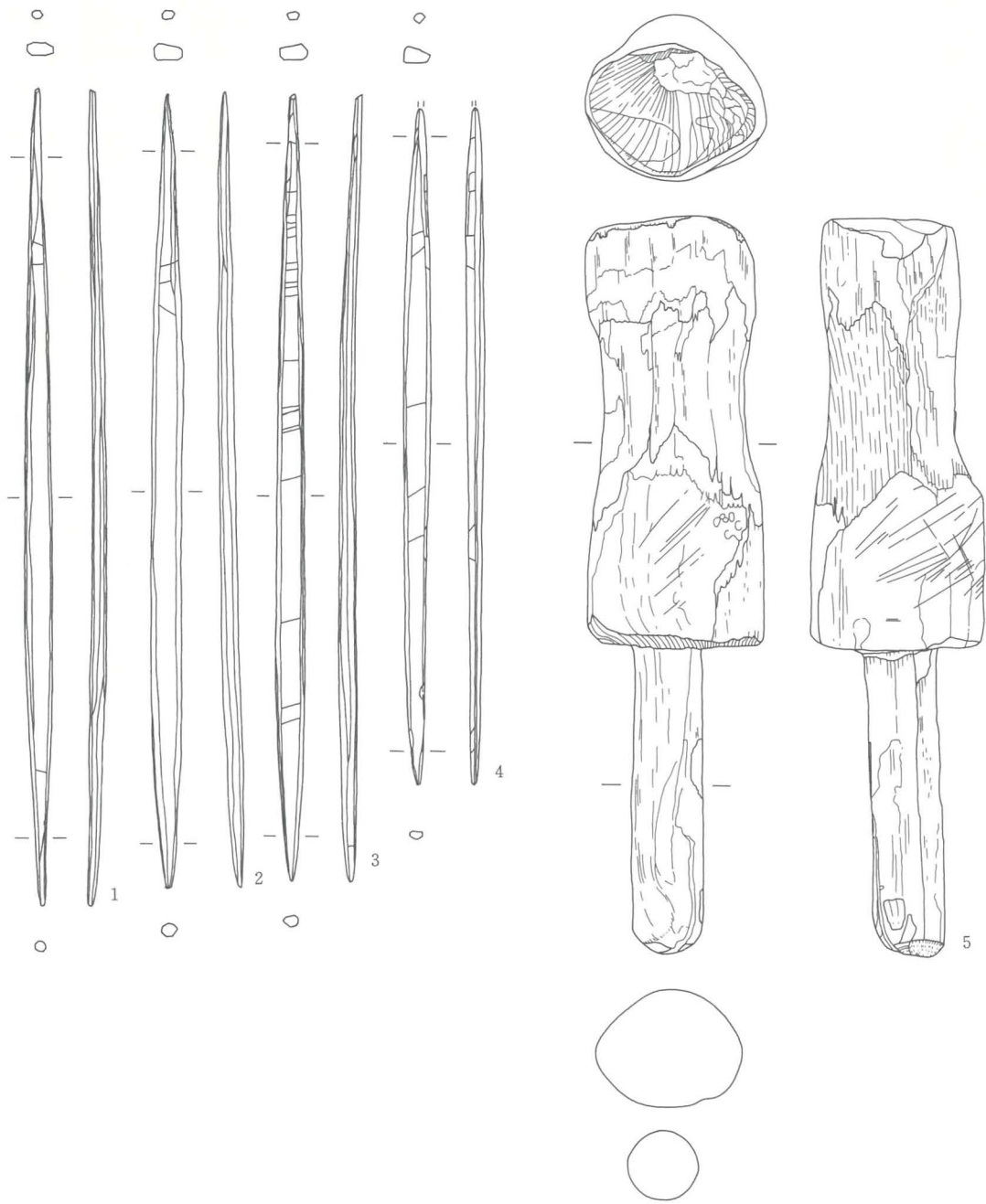
第22図 調査区出土遺物 (肥前磁器他)



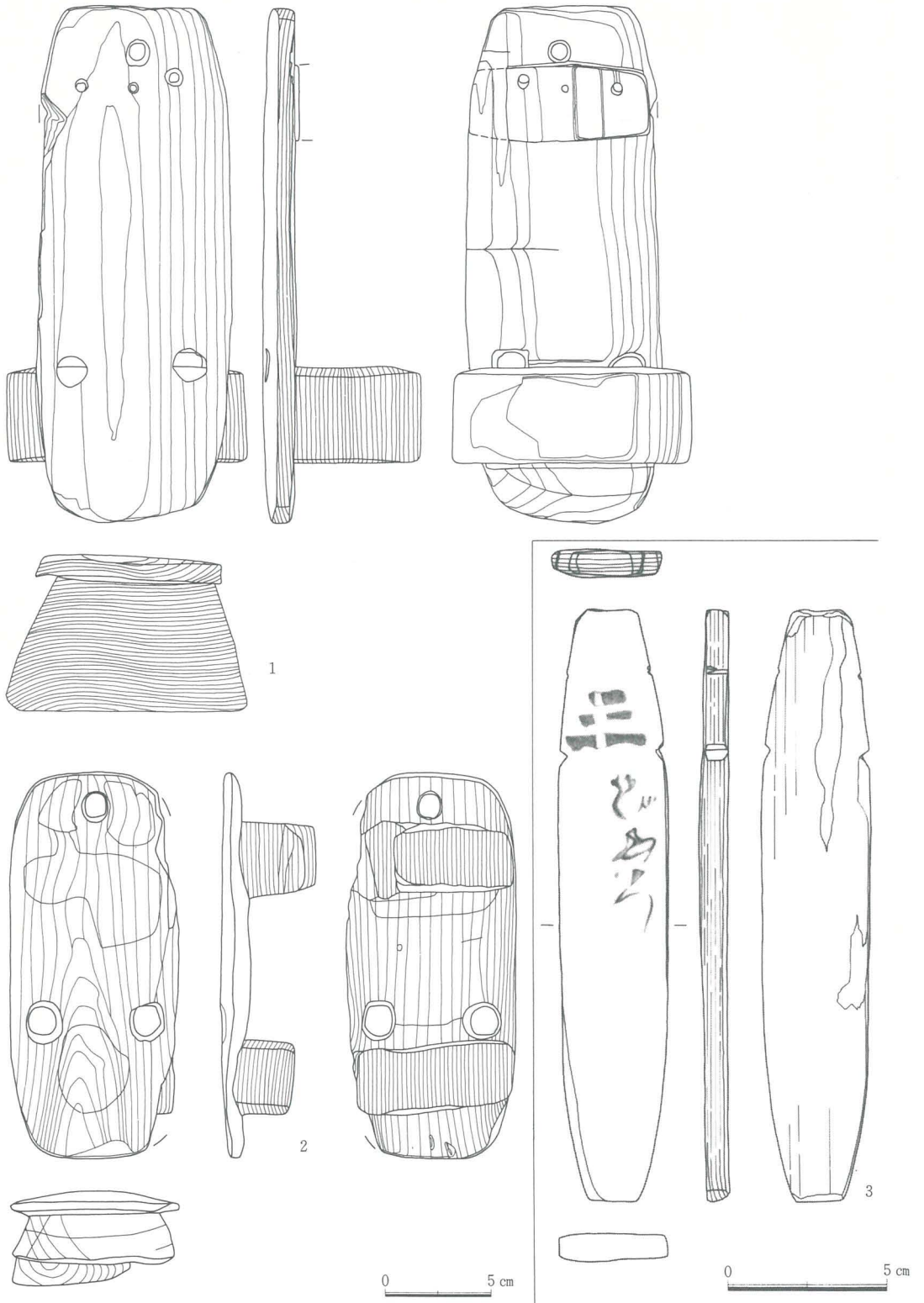
第23図 調査区出土遺物 (木製品)



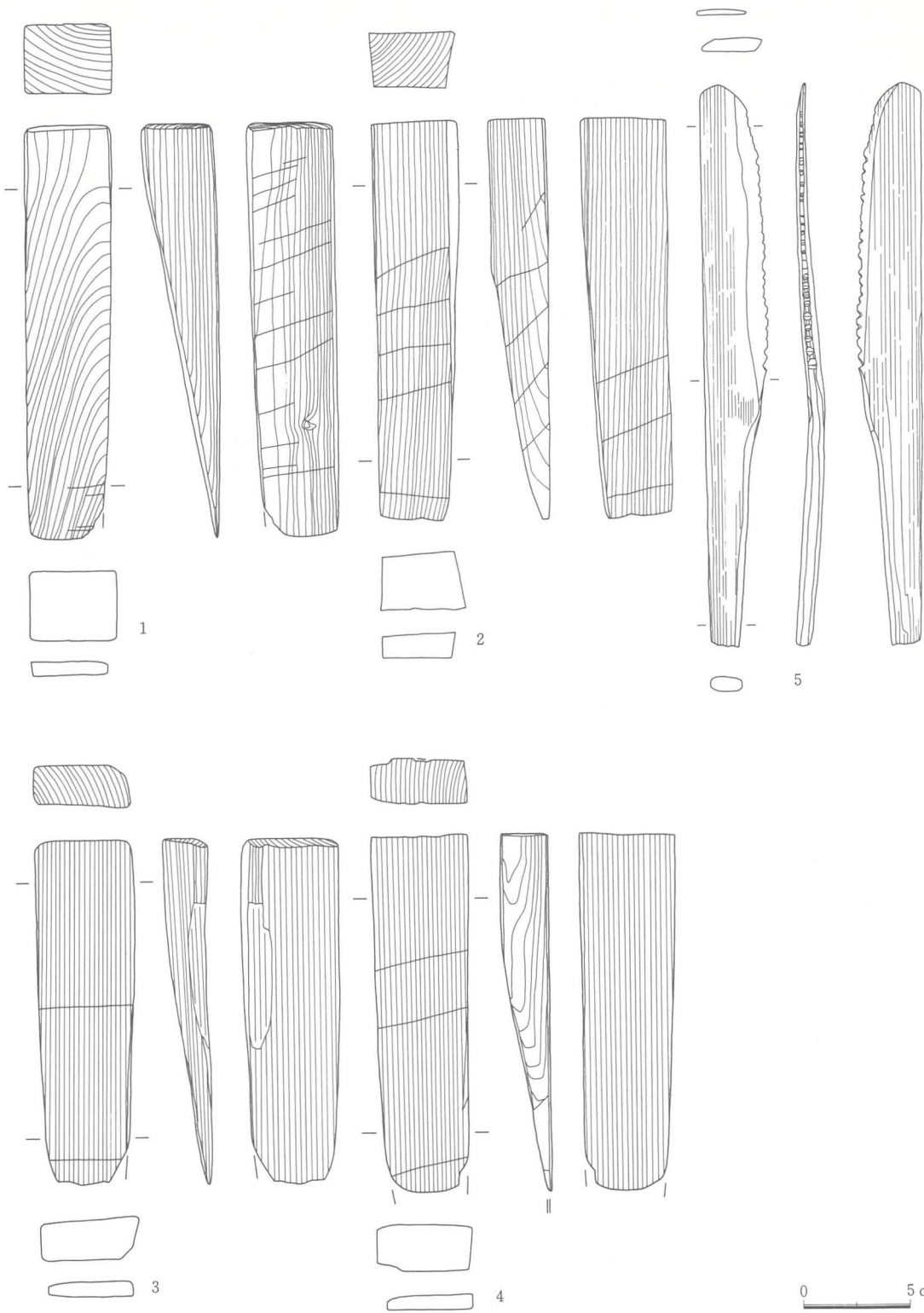
第24図 調査区出土遺物（木製品）



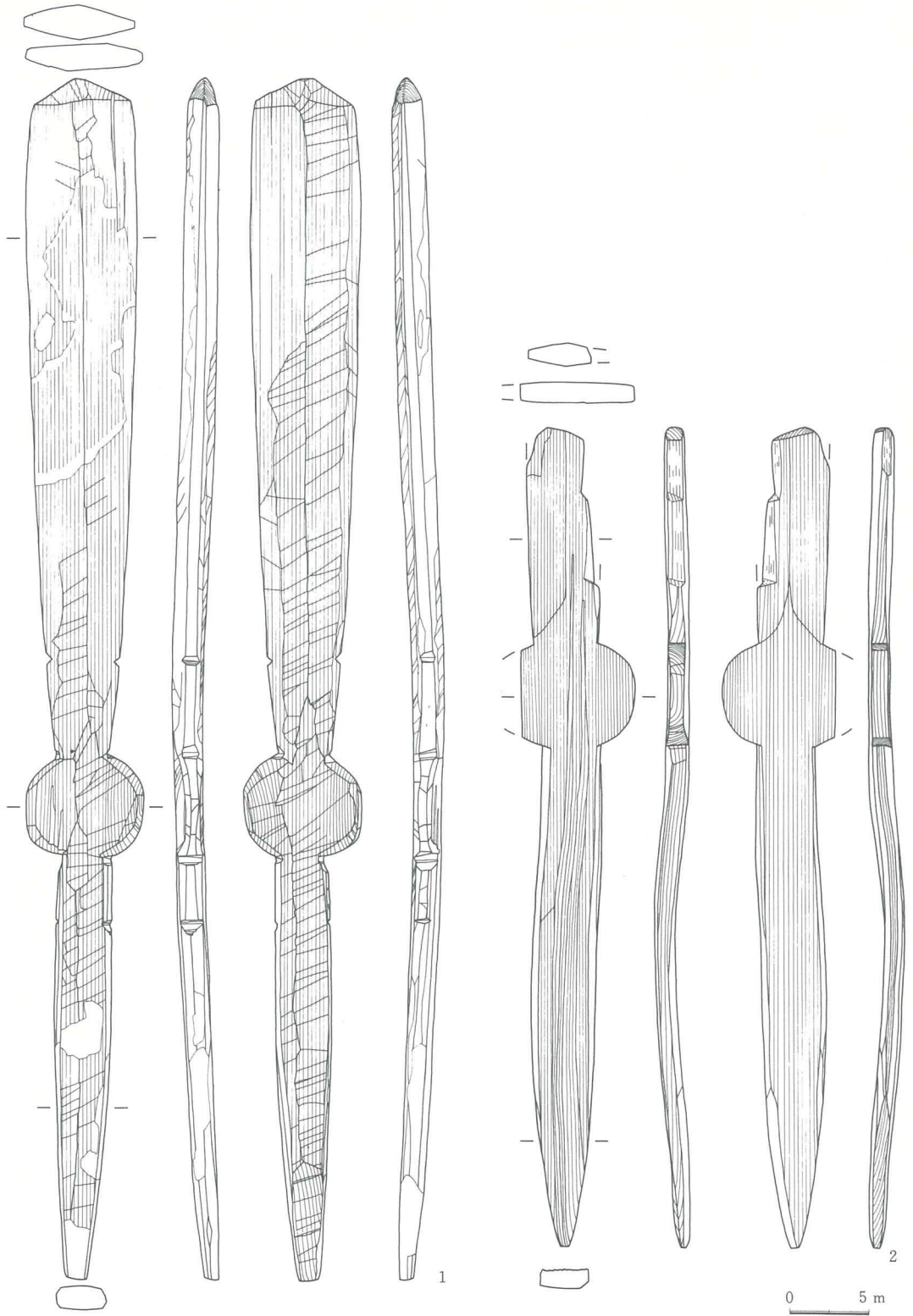
第25図 調査区出土遺物（木製品）



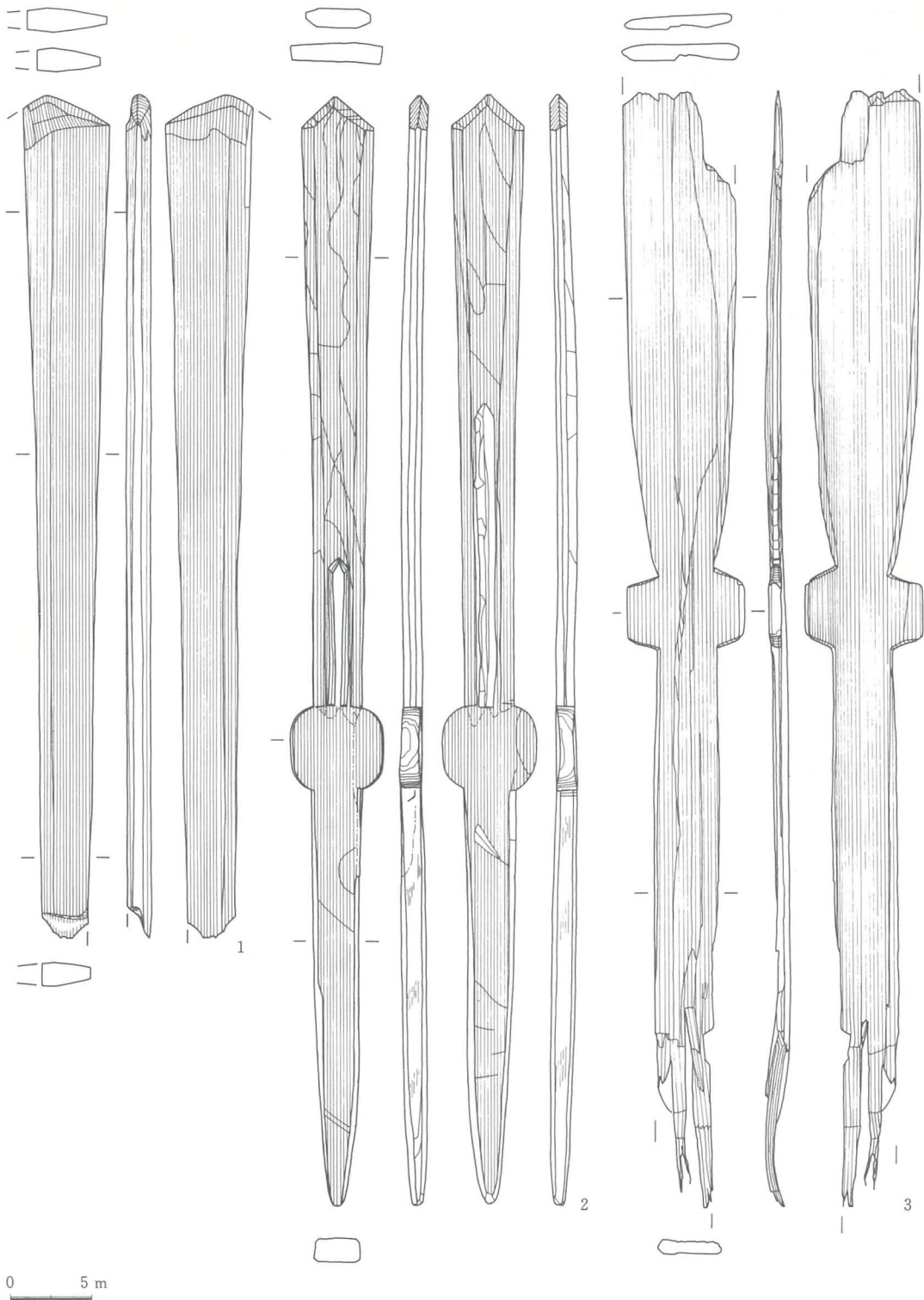
第26図 調査区出土遺物 (木製品)



第27図 調査区出土遺物 (木製品)

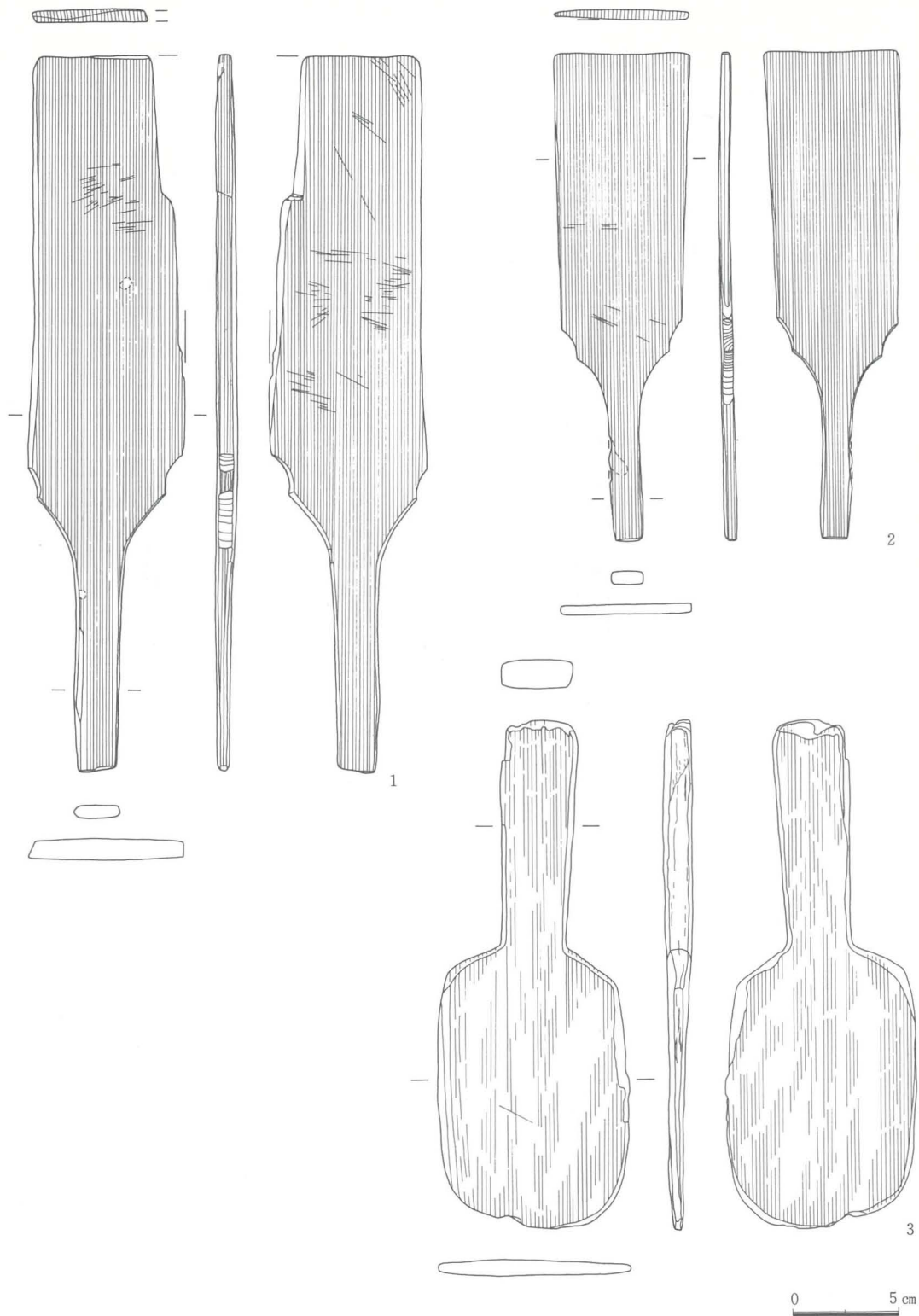


第28図 調査区出土遺物（木製品）

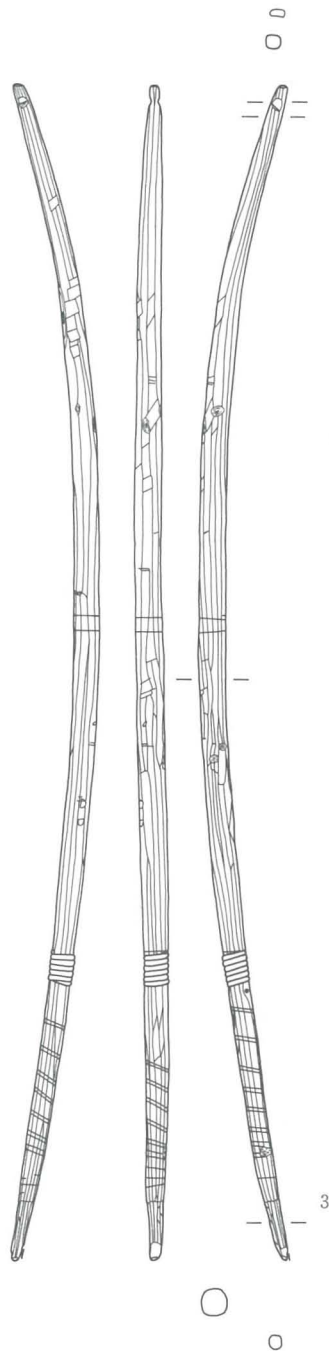


第29図 調査区出土遺物（木製品）

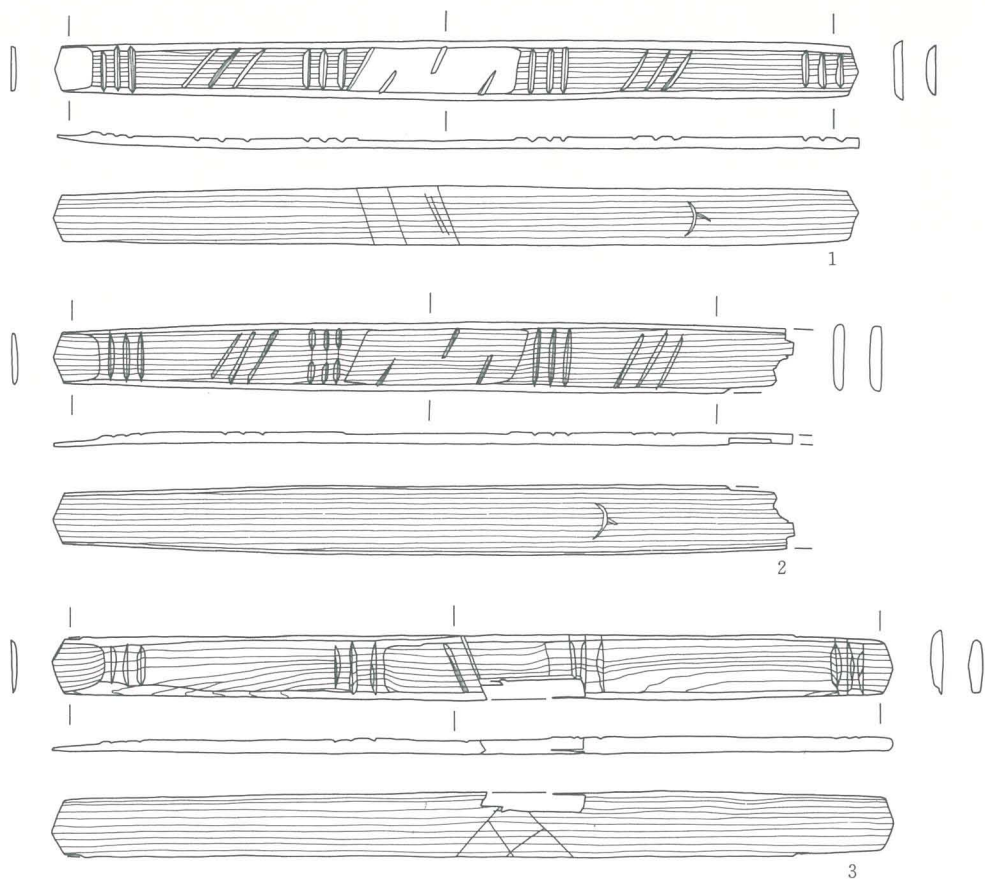




第30図 調査区出土遺物（木製品）



第31図 調査区出土遺物 (木製品)



第32図 調査区出土遺物（木製品）

0 5 cm

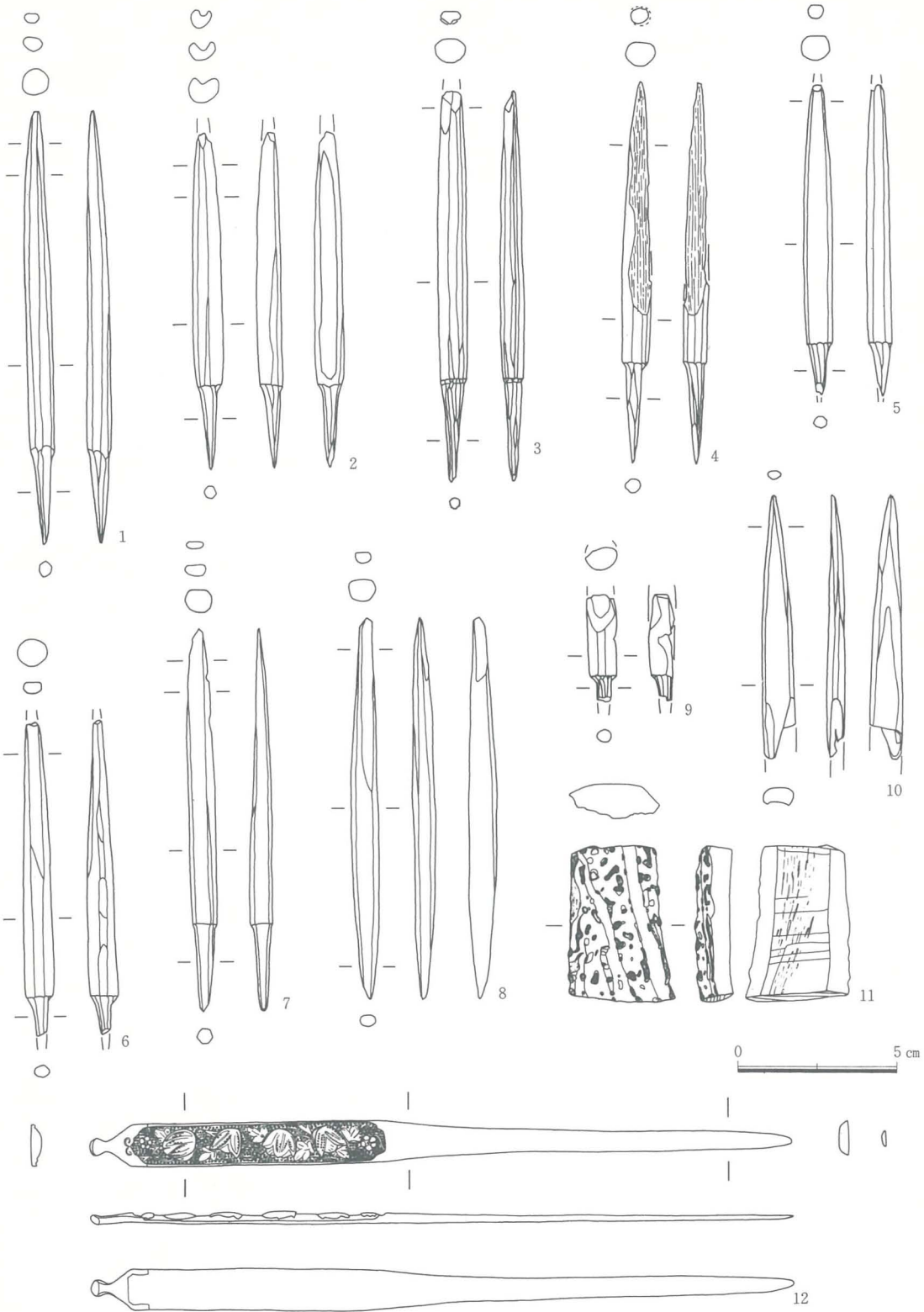
状に作る。一部欠失するが、歯の数は25個を数える。用途は不明である。

へら：（第30図3）全長24cm、柄の長さ10.5cm、調理の際の攪拌用のへらか。

網浮子：（PL.12-11）両端が窄まり、網に結わえ付ける為の括れを有するものが14点、両端に一对の穴があくものが3点出土している。大きさ、形態から前者は、1. 全長が38～35cm前後、幅7.5～5.5cm、2. 全長33cm前後、幅が3cm前後の細いもの、3. 全長25.5cm、幅1.3cm程で断面形が方形の棒状のもの、4. 全長20cm、幅が6cm程の短いものの4つに大別される。表面に横位、斜位の刻印や焼き印（？）が付くものがある。

形代：（第28～29図、PL.12-4～8）剣ないしは矛形を呈するものであり、いずれも一木より作り出される。1は刀身両面には鑄を作り、柄と

の間に円形状の飾りを作る。鑄を意識したものか。柄は下端が尖り、左右に3対の切り込みがある。結束痕跡は残っていないが、何かを括りつけるためのものと推される。2も同形と推されるもので、刀身と円形の飾りの一部が欠損している。刀身両面には鑄が見られ、柄の下端は尖る。第29図1は破損が著しいが、先端の形状と両面に鑄状の高まりがあることから前2者と同様のものと推される。刀身の長さは前2者より長い。2は前者とほぼ同じ形状のものだが、前3者と違い表面は平滑で鑄は無く、代わりに剣先形の彫刻がある。裏面は長さcmにわたって溝状に窪む。柄と刀身部に折れて出土した。3は、前後が欠損しているため全長は不明。長さ34cm以上の柄と30cm以上の刀身と推される。厚さ1cm程の板状を呈する。6.5cm幅の刀身部は柄部手前10cmの所で窄まり始め、刀身と柄



第33図 調査区出土遺物 (骨角器他)

の間には長方形の飾りが作られる。前4者とは異なった形状を呈する。

**羽子板：**(第30図1・2、PL.12-9・10) 2点、近接した状態(PL.4-2)で出土した。1は全長34cm、2は全長23cm。後者は柄の長さが7cm以下で、大人が握るには短すぎ、子供用と推される。両者とも柄に近い部分を弧状に2段に挟む。打痕は確認できない。

**木簡：**(第26図3、PL.4-6・12-1~3) 全長18.9cm、幅3.3cm、厚さ0.6cm。長方形の上下部が窄まる形状を呈する。上部5cmの所の左右を3mm程挟み、また上部2cmの所の左右にも僅かに切り込みがある。表面、上端2.5cmの所に「三」、その下右寄りの所に、上の文字よりやや小さめに「むしろ」と墨書されている。裏面には墨書は確認されていない。上部の切り込みや墨書の文言から「むしろ」の荷札と推される。

釈文は奈良国立文化財研究所史料調査室山下信一郎氏による。

**弓：**(第31図3) 全長62.7cm、中央の径1.5cmの丸木弓である。末弭の左右に削り込みがある。本弭は、一段細く削り出す。本弭側下端より15cmの所には桜の樹皮を6周巻いている。上端より28cm中央付近と本弭側には巻き付けの痕跡が残る。同様に桜樹皮が巻かれていたと推される。全長が短いことと桜の樹皮を巻く特徴からアイヌの用いるボンクと推される。

**イクパスイ：**(第32図、PL.5) 4点出土し、3点を図示した。1は先端(パスイ・エトゥ)を薄く削り、表面には長軸に直交する方向に3条の刻印(パスイ・イトクパ)が、先端・尻(オホントキ)と中央(ノシュキ)脇の計4カ所があり、パスイ・イトクパの間2カ所には3条の斜行する刻印がある。中央は薄く削られ、3つの刻みがある。裏面には尻寄りにシロシが刻まれる。形状からレブンクルカムイ(シャチ)を表現したものと推される。2は一部欠失しているが残存部から推すると1とはほぼ同じサイズ、意匠である。3は表面に3条の刻印が、前2者同様4カ所にあるが、その間には何も刻まれない。中央は薄く削り、2条の斜行する刻印がある。裏面中央に、交差するように刃物を当てた傷があり、これがシロシになると推される。(松田)

**漆器：**宮ノ沢右岸地区から37点の漆器類が出土

した。椀27、皿(一部蓋か?)7、高杯ないしは台皿・盃台に類似のもの3、盆(大皿)1、不明小片5である。

**椀：**内面赤・外面黒漆15、内外面黒漆6で、このうち文様の認められたものは12点である。外面に文様の描かれるものが10あり、木葉文5、鶴?丸文1、その他4、内外に文様の描かれるもの2である。第31図1は内外に黒漆塗りの丈高の椀で高台裏に赤で×印が記される。佐々木利和氏によれば、樺太の発掘資料に類例があるという。又、PL.6-2は高台裏に<sup>〰</sup>・<sup>〱</sup>(イチヤマ又はイチヤマイチ)と家印風に記号が書かれている。

**皿：**内外面黒・赤、内面赤外面赤などがあり、文様の認められるものが2点ある。PL.6-4は内面に赤漆で細い二重圏線を引き内側に三引画を描く。

高杯・台皿と推したものは、内面見込みや腰部が削られ段のつく低平なもので径を18cmと推したのものもある。

**盆：**(第31図2)は外面口唇直下を削り、凹線状の段を設ける。内面は見込み外縁を一条削り浅い段をつける。やや外開き気味に高台が付く。下地塗りの後に黒漆を内外全面に塗り、器体部内外のみ赤漆を重ねる。見込み、高台裏に細かい線が残る。横木取り。(松崎)

**f 土製品** II c層から土錘が1点出土している。  
**g ガラス玉** 径7.5mm、厚さ4.5mm、中央に3mmの穴が開く青色のもの、径8mm、厚さ5.5mm、中央に径2.5mmの穴が開く水色のもの、径6mm、厚さ5mm、中央に径2mmの穴が開く無色透明のもの、計3点出土している。(松田)

表14 遺物計測表

図版番号	器種	口径mm	底径mm	器高mm	出土地点	図版番号	器種	口径mm	底径mm	器高mm	出土地点
第16図1	青磁皿	-	68	-	A2・I層	第20図3	唐津皿	113	48	45	F6・IIc層他
第16図2	白磁皿	-	39	-	D6・IIc層	第20図4	唐津皿	150	52	39	D6・IIc層
第16図3	染付碗	121	52	57	F7・II d層他	第20図5	唐津皿	138	-	-	E6・IIc層
第16図4	染付碗	142	-	-	E7・土壌13	第20図6	唐津碗	110	-	-	D7・I層他
第16図5	染付碗	114	-	-	G6・I層	第20図7	唐津皿	-	82	-	B5・II層他
第16図6	染付碗	140	-	-	F7・I層	第21図1	唐津皿	236	80	66	E7・土壌13
第16図7	染付碗	116	-	-	A4・I層他	第21図2	唐津皿	-	45	-	F6・II d層
第16図8	染付碗	112	-	-	F7・II d層	第21図3	唐津皿	-	88	-	E7・IIc層
第16図9	染付碗	141	-	-	D7・I層	第22図1	肥前碗	114	61	61	E6・II層他
第16図10	染付碗	-	54	-	D7・II層	第22図2	肥前碗	109	57	58	E5・I層
第16図11	染付碗	-	54	-	E6・II層	第22図3	肥前碗蓋	110	58	31	A1・II層
第16図12	染付碗	-	43	-	E7・IIc層	第22図4	肥前皿	136	76	41	A2・I層他
第16図13	染付皿	130	74	29	E7・IIc層	第22図5	肥前皿	144	76	33	A3・I層他
第16図14	染付皿	-	52	-	G7・IIc層	第22図6	肥前皿	106	50	28	A5・I層
第16図15	染付皿	-	72	-	F6・IIc層	第22図7	肥前瓶	16	-	-	B1・I層
第16図16	染付皿	-	72	-	E7・IIc層	図版番号	名称	長mm	幅mm	厚mm	出土地点
第16図17	染付皿	-	32	-	E6・IIc層	第22図8	輪羽口	(80)	132	137	B2・堀
第16図18	染付皿	-	44	-	E7・II層	第22図9	鉄滓	134	123	35	D6・IIc層
第16図19	染付皿	97	38	32	E6・II層	第22図10	鉄	134	23	4	E6・IIc層
第16図20	染付盤	234	-	-	A1・I層	第23図1	樽・底板	305	312	32	G7・IIc層
第16図21	染付盤	272	-	-	G7・IIc層	第23図2	樽・蓋	30	82	18	G7・IIc層
第17図1	瀬戸・美濃皿	84	44	22	F6・IIc層他	第23図3	樽・栓	117	29	27	F6・IIc層
第17図2	瀬戸・美濃皿	96	52	27	G7・IIc層他	第23図4	樽・栓	94	29	26	
第17図3	瀬戸・美濃皿	-	58	-	D6・II層	第23図5	樽・栓	91	29	29	
第17図4	瀬戸・美濃皿	81	54	20	E6・IIc層	第23図6	樽・栓	85	30	30	
第17図5	瀬戸・美濃皿	-	62	-	E7・IIc層	第23図7	樽・栓	50	31	28	E7・IIc層
第17図6	瀬戸・美濃皿	105	50	20	E6・IIc層	第23図8	樽・栓	26	30	29	E7・IIc層
第17図7	越中瀬戸皿?	106	56	27	F6・IIc層	第24図1	折敷・底板	333	(99)	12	
第17図8	瀬戸・美濃碗	115	-	-	E7・IIc層他	第24図2	桶・底板?	219	217	12	
第17図9	瀬戸・美濃碗	122	-	-	E6・IIc層	第24図3	桶・底板	353	(100)	7	
第17図10	瀬戸・美濃碗	-	46	-	F6・IIc層他	第25図1	串	360	12	6	F7・IIc層
第17図11	志野皿	120	74	21	E7・IIc層	第25図2	串	350	13	7	
第17図12	志野皿	123	70	23	E6・IIc層	第25図3	串	347	12	7	
第17図13	志野皿	114	-	-	I層	第25図4	串	325	13	8	
第17図14	志野皿	120	74	34	B1・土壌5他	第25図5	横槌	324	77	76	F7・IIc層
第17図15	志野皿	129	77	-	B1・土壌5他	第26図1	下駄	248	114	75	F7・IIc層
第17図16	志野皿	123	73	29	E7・IIc層	第26図2	下駄	184	80	45	E7・IIc層
第17図17	志野皿	130	-	-	E7・IIc層	第26図3	木簡	189	33	6	E7・IIc層
第17図18	志野皿	110	59	23	F7・II d層	第27図1	楔	195	40	34	G6・IIc層
第17図19	志野皿	-	70	-	E7・IIc層	第27図2	楔	189	40	28	E.F・6.7 II c層
第18図1	唐津碗	121	48	67	G6・II d層	第27図3	楔	163	46	20	E.F・6.7 II c層
第18図2	唐津碗	113	44	55	D6・IIc層他	第27図4	楔	168	45	23	E.F・6.7 II c層
第18図3	唐津碗	-	44	-	D6・IIc層	第27図5	ナイフ形木製品	265	30	9	
第18図4	唐津碗	116	-	-	G6・II d層	第28図1	形代	759	73	22	E7・II d層
第18図5	唐津碗	123	54	55	G7・IIc層	第28図2	形代	(517)	(71)	15	
第18図6	唐津皿	134	53	32	E6・IIc層	第29図1	形代	(523)	(53)	15	
第18図7	唐津皿	108	45	35	D7・IIc層	第29図2	形代	689	57	15	F7・IIc層他
第18図8	唐津皿	116	42	33	D6・IIc層	第29図3	形代	693	72	10	F7・II d層
第18図9	唐津皿	110	46	31	E6・IIc層	第30図1	羽子板	339	73	10	F7・IIc層
第18図10	唐津皿	103	40	33	B1・土壌5	第30図2	羽子板	230	64	6	F7・IIc層
第18図11	唐津皿	104	35	30	E7・IIc層	第30図3	ヘラ	241	90	14	E7・IIc層
第18図12	唐津皿	110	47	39	E7・土壌13	第31図1	漆碗	132	66	78	E6・IIc層
第18図13	唐津皿	119	47	32	E6・IIc層他	第31図2	漆盆	220	164	31	E7・IIc層
第18図14	唐津皿	116	46	32	E6・IIc層他	第31図3	丸木弓	627	14	15	G6・IIc層
第18図15	唐津皿	115	46	32	F6・II d層他	第32図1	イクバスイ	321	25	5	F7・IIc層
第18図16	唐津皿	110	49	34	D6・IIc層	第32図2	イクバスイ	(296)	28	5	E7・IIc層
第19図1	唐津皿	144	38	39	E6・II層他	第32図3	イクバスイ	335	26	7	F7・IIc層
第19図2	唐津皿	140	46	37	F7・IIc層他	第33図1	骨角器・中柄	137	8	8	D6・IIc層
第19図3	唐津皿	132	46	32	E7・IIc層他	第33図2	骨角器・中柄	(106)	9	8	F6・IIc層
第19図4	唐津皿	130	41	46	E6・IIc層他	第33図3	骨角器・中柄	(123)	10	8	E6・II層
第19図5	唐津皿	114	36	31	E7・IIc層	第33図4	骨角器・中柄	121	9	8	E7・IIc層
第19図6	唐津皿	109	39	36	E7・IIc層	第33図5	骨角器・中柄	(98)	9	8	F7・IIc層
第19図7	唐津瓶	48	-	-	F6・I層	第33図6	骨角器・中柄	(99)	9	9	D6・IIc層
第19図8	唐津皿	121	50	35	E6・IIc層他	第33図7	骨角器・中柄	121	8	8	E7・IIc層
第19図9	唐津皿	116	39	30	F7・IIc層他	第33図8	骨角器・中柄	120	9	7	E7・IIc層
第19図10	越中瀬戸播鉢?	-	-	-	D7・IIc層	第33図9	骨角器・中柄	(29)	9	7	E6・II層
第19図11	備前播鉢	254	128	83	A1・土壌5	第33図10	骨角器・中柄	(83)	10	6	F7・IIc層
第20図1	唐津皿	126	45	48	A1・土壌5	第33図11	鹿角切片	49	33	11	E7・IIc層
第20図2	唐津皿	120	44	45	E7・IIc層他	第33図12	弁	220	13	4	D6・IIc層

## Ⅲ 小括

**Ⅱc・d層出土陶磁器**：Ⅱc・d層からは中世～近世初頭に位置付けられる陶磁器が約500点出土した。中国、瀬戸美濃、志野、唐津等の日常雑器から茶道具まで様々な器種がある。国産は唐津胎土目積み製品が一番多く、次の段階の唐津砂目積みの製品はごく僅かである。これに志野の皿や、備前の播鉢等が加わる。中国製品は殆どが染付で、明末期のものが多く、中には漳州窯系の製品と推されものがある。15・16世紀代の玉取獅子文の端反皿、蓮子碗等は僅かしかない。又、中国製品の個体数は勝山館に比べると減少傾向にある。以上のようにⅡc・d層出土陶磁器は、勝山館終末期（慶長初年頃）の年代に近いもので構成されている。又、肥前磁器が全く伴わず唐津砂目製品も僅かであることから、Ⅱc層出土陶磁器は、慶長後半を大きく降らない遺物群と推される。勝山館跡、上ノ国漁港遺跡、市街地調査を通して、すでに指摘されているところであるが、中世後半には瀬戸美濃・越前・中国製品が主体を占め、近世初頭に唐津、志野さらには肥前磁器へとその主体が移り変わる陶磁器流通の転換の予兆がここでも窺える。又、勝山館最盛時の製品は少ないが、珠洲終末期の播鉢や白磁切高台皿等の勝山館草創期の遺物や最盛時の瀬戸美濃大窯期の碗・皿も混入し、この周辺地での人々の生活が勝山館併行期から続いていたことも窺われる。

**形代**：Ⅱc・d層から矛形を呈する形代が5点出土した。剣形の物の中には切り込みがあり、何かを括ることが想定されるものもある。これに柄を装着し使用することを仮定すると「年中行事絵巻」の祇園御霊会、「上杉本洛中洛外図屏風」の上御霊社の祭列に付き従う矛に類似している。5点の形代も上記の様な祭礼具の一種であったと推される。

上ノ国には「大蔵鯨」という伝説が伝わり、菅江真澄「蝦夷喧辞辯」や立松東蒙「東遊雜記」にも採録されている。記録や伝承に若干の異同があるが、以下に概略を述べる。かつて上ノ国に秀海という修験者（上國寺住職兼八幡宮別当ともいわれる）がいた。ある年、春になっても鯨が浜に来ず、困り果てた村人の要請で、秀海は鯨を呼び寄せる祈禱を行い、その験現れ豊漁となった。しか

し、報酬の件で違約した村人と争いが起こり、秀海は無念の死を遂げる（上國寺の過去帳に慶長3年没とある。一説には死後崇りをなしたともいわれる）。又、その霊は鯨神として「若宮社」に祀られたともいわれる。調査地の対岸は若宮社のあった地といわれる。それ以来春の鯨漁の祭に「旗鉾祭、柴おろし祭」が行われたといわれる。

今回出土した形代が伝説と同時代のものであり、秀海の祈禱道具ではといった報道もあったが、形代の使用方法と祈禱作法の関係が不明である以上、秀海の使用した物と断定することは出来ないとするのが、調査員一同の現段階の見解である。しかし、伝説の真偽、関係はどうであれ、この形態の形代の同時代資料は、全国的にも類例を知らず、中世から近世移行期の信仰の一端を窺わせる数少ない資料といえよう。（松田）

**木簡**：木簡乃至木簡状の遺物は、勝山館跡の発掘調査で6点出土しているが、文字の解読されたものはなかった。11年度調査区宮ノ沢右岸地区では2点の木簡が確認されている。1点は発掘調査中に確認の上取り上げられ、奈良国立文化財研究所のご配慮により釈文も作られ、本概報に記述したところである。今一点は、木質遺物を大量に含む包含層を4×4mの調査区別に層位毎に一括封入取り上げの土壌中から、その水洗い選別作業中に抽出したものである。この作業は未だ途中にあり又、1,000点を越える木製品の点検も不十分であり、確定はできない。因みに今一の木簡の釈読はまだできていない。

前述の木簡の出土位置は第14図に示した。ほぼ水平で、表面を下にしていた。層位は木質遺物が大量に包含されたⅡc層中であり、時代は再三述べているように慶長年間頃と推される。形状から付け札と解され、「三む志ろ」と釈読されたことから荷物としてのむしろに付されたそれとすることができる。三については何らかの番号を示すものと石井進先生からご教示を賜った。想像を許されるのであれば、幾種類かの荷物の三番目にむしろがあるということであろうか。

江戸時代も後半、鯨漁の降盛とともに大量の筵が北陸方面から購入されたことは江差町史にも見え（宮下正司先生のご教示による）、幕末期の上

ノ国<sup>ノ</sup>笹浪家文書中にも、越中や七尾、くつみ(敦賀)等の筵二百束以上の購入が記されている(上ノ国町文化財保護審議会委員渡部良三氏釈読)。又、七尾市史編纂室によれば、松前(北海道)へ大量の筵が出荷され、昭和年代まで続いたという。鯨漁場での魚粕の乾燥は広い干場に筵を敷き並べた上で行われ、又それら海産物の出荷は筵で梱包されてなされる為、漁期を前に毎年大量に購入されるものであったという。また、昭和20年頃まで、運送業に従事した、江差町の木村勝美氏(76才)は筵の積み降しが重労働であり20枚一束の筵を一人でかつぐのがやっとなこと、特に「たて筵」は重く一人で担げたのはキリカナと呼ばれた上ノ国の草間与惣吉さんぐらいたったとの体験を教示された。既にこの地域での鯨漁はなかったがスルメ等の海産物の出荷にはなお欠くことの出来ない必需品として本州から購入されていたものである。

大量に購入、消費される筵一束ごとに件の木簡が付けられたものかどうかは明らかに出来ないが、思いの外に早くから、筵が商品として本州から購入されていたことをこの木簡は示すようであり、それは又、上ノ国での海産物の出荷が早くから行われていたことを示唆するものであろう。

**アイヌ文化関連遺物：**4点のイクパスイ、桜皮巻きの丸木弓、高台裏に刻印や赤漆書の印のある漆器椀、中柄10点などが出土している。第14図に写真で桜皮巻きの太刀柄を示したが、他に二点ありその一点には赤漆が施されている。繰り返しになるがこれらの遺物はⅡc、Ⅱd層とした慶長期に比定される包含層からの出土である。

**イクパスイ：**文献上の初見は永禄8(1565)年(中世蝦夷資料)であり、「酒を飲むときに棒で髯を上げる」とある。又、天正19(1591)年九戸城攻めの蒲生氏郷の前で二名の夷人が盃の上に箸を置き、箸を持って種々所作の上、鬚をかき上げて(酒)を飲んでいる。

発掘例では千歳市美々8遺跡のものが知られている。報告者は擦文期に属するものがあるとする。近世アイヌの諸文化要素が擦文期に遡り、或いは限りなく擦文期に近づくものであることは、今後の発掘調査で、より明らかにされるであろう<sup>註)</sup>。

第32図3のイクパスイは、折損して出土し、包含層の堆積を見る為設定したサブトレンチ内出土

の一と第31図3のように接合している。裏面中央に刻まれたシロシの線が折損部となっており、これはサブトレンチを掘りあげる時に一端に強い力が加わり、一部欠失して細くなっていた中央の、シロシの刻み目にそって折損したもので、元来はほぼ完形の状態と推される(PL. 5・4)。実測図を示した三点のイクパスイは近接しており、面も近い。こうした出土状況に更に漆器椀の位置、更には調査区内出土の高杯?とした数点を盃台(佐々木利和氏のご教示)、或いはタカサラ(杉山寿栄男)などの酒器の一部と解し、ある風景を想定することも不可能ではないようである。

**丸木小弓：**アイヌが半弓に毒矢を番えて狩猟を行い、戦場に臨むことは古くから記される。アイヌの弓は70~110cm程のものが多く、樺太のものに比し北海道のものが小さく、桜皮巻きのものも北海道に多いとされる(北海道原始文化聚英)。江戸時代のアイヌは「イチイ」をその材の第一とした(松前志)。

本例は全長62cm程と上述の如く一般的なアイヌの弓のサイズに比しても小さく、実用品かどうかは、中柄が矢尻装着用のそれであり、両者をもって弓矢が一応揃うことにはなるが、なお即断しかねるところである。非実用品としては、第一に儀式用が想定されるが、矢(柄)も伴ってはいず積極的に示すことはできない。アイヌが子供の時から遊びの中で、弓矢や槍投げの稽古に興ずることが知られている(アイヌ絵集成)。北海道大学蔵版の蝦夷国風図絵(文久三・1863年写本)には一人が転がした輪に弓を射る様が描かれており、こうした子供の遊び道具とも推した。桜皮を巻きつけた丁寧な作りは、裏山の細木を「肥後の守」で削り、笹竹を削いで矢にして遊んだ体験からはやや異質な感があるが、同絵図中の弓も小さくはないが、同種のを巻き付けた描写になっている。付言すれば本図絵は小玉貞良の筆によるとされる(「蝦夷の風俗画」)が、自筆本の一つとされる稽古館旧蔵本(同)や函館図書館本に弓射図はない。

**刻印・赤漆書印付き漆器椀：**博物館や個人の収蔵・蒐集の伝世アイヌ資料に刻印の付けられた漆器のあることはよく知られている(亮昌寺資料目録他)。又それらと擦文土器底部の刻印との関連についても注意の向けられているところである。後述のように勝山館跡出土陶磁器等に刻印のある



ものがあり、その関連が注視されていた。本例は（イチャマ）と明瞭に認められ、その下に一・二本横に細線が残るが漆皮膜のひび割れとの区別が難しいところである。〰・〰のいずれにしても、現在の上ノ国町内を含め、本州系の家印に通有の記号でもある。平成12年2月、幕末に上ノ国の名主を務めた吉見家旧蔵と推される什器類の寄贈を受けたが、その漆器裏にも家印が刻されていた。冠婚葬祭時に借り出される為、目印に付けられたもの（吉見定吉氏談）と推される。又根来寺出土品にも類例が見られ（1997年発掘速報展図録）、陶磁器に刻印される例も各地にあるとのご教示を小野正敏氏から得た。他方杉山寿栄男の集成によれば、時代は不明であるが、「アイヌ文様」とする中に多数の家印と同様の記号がある。

漆書きの例は、樺太アイヌ墓地からの出土品と推される椀にあるとのご教示を佐々木利和氏から得た。日常の雑器に類する磁器片にも漆継ぎの跡が見られ、勝山館跡近在の塗師を否定し切ることはできないが、漆書きについては所有者自らが書いたとすることは難しいのかも知れない。

桜皮巻き太刀柄はエムシと後に呼ばれるものであろうか。

勝山館跡の発掘調査で大量の骨角器や素材・残片・未製品が出土し、利器の幾つかに使用痕や補修痕が残るところから、それらは勝山館跡内の住人の所産としてきた。更に十年度の調査で高台裏に同一記号の刻された白磁皿が7点一括出土し、アイヌのシロシとの関連が論議された。改めて勝山館跡出土遺物を通観すると「エ」と刻された天目茶碗（概報Ⅳ-16頁）、赤（漆？）で×の印された黄天目（同Ⅶ-41頁）、鹿角製マキリ（小刀）柄、彫刻のある弓弭？（同Ⅳ-42頁）、×印の刻まれたマキリ鞘、矢筒？としたもの（同ⅩⅡ-14頁）などの類例を見る。又近年の上ノ国市街地発掘等でも骨角器の出土を見ている。

勝山館跡出土のこれらの遺物は、狩猟・漁労具という日常的な物であり、一定の量とその製作・使用過程を辿り得ることから、近世アイヌに連る人達の存在は否定できないかと考えてはいたところであるが、今一面の裏づけ資料として、その精神文化を具体的に示すものが必要と推してきた。

今年度出土のイクパスイ、漆器椀、盃台（タカサラ）をやや強引に結びつけ、ある儀式（礼）が

この近くで行い得たとするのは付会に過ぎるのかも知れない。しかし、弓や矢（中柄）など日常的な生活具（子供の遊具？）を合わせ一体に視る時、その存在は自ずと浮かび上がってくるものと思われる。

**近世初頭和入地とアイヌ：**筆者は上ノ国の地が寛文9（1669）年頃もなお、北海道西海岸で戸数140～150と100戸を超える唯一の集落として存在していたこと（津軽一統志）、しかし、延宝6（1678）年には松山番所が上ノ国から江差へ移ること（続上ノ国村史）からして、それは既に上ノ国の「衰退期」にかかっていること、それは「最盛期」と推される勝山館期の賑わいを示唆するものであろうと述べて来た。そしてその140・150の中にアイヌの存在も記されていること（同前）を指摘してきた。しかし、同書によって松前の東へ目を転ずると亀田（現函館市）迄の間にアイヌの集落や、その長の名が点々と記されていることを知らされる。膝下の松前については、アンジェリスが、松前に生まれ育ったアイヌと、他の地のアイヌとの比較を述べてもいるところである。

先に氏郷記にイクパスイを持って献酒、飲酒するアイヌの記述があったが、この二名のアイヌは九戸城内に立籠って毒矢で応戦させられようとした者である。氏郷の前で開放された後に何故へ去っていったのかは詳らかではないが（或いは九戸攻めに参戦した蛸崎氏が引き連れて行ったアイヌ（三河後風土記）が捕らえられ、九戸城内に引き入れられたと考えられなくもないが、）南部町聖寿寺館から出土した矢尻用の骨製中柄（永井治氏のご教示により実見）や下北半島の貝塚調査（工藤竹久氏のご教示による）などからは、東北地方北半の中近世にあっても、相似た状況が想定し得るのかとも思うところである。（松崎）

**註** 報告書によればこのイクパスイの材質が杉であることから、樽等の本州産木製品の転用材による作成とされる。樽等の出現は鎌倉時代のものであり、擦文時代の年代観、樽で搬入する酒？の流通、

（以下56頁右下へ）

## IV 保存処理

**鉄製品** 390点の処理を行った。錆除去後、エタノール脱水、パラロイドNAD-10のソルベントナフサ溶液による減圧含浸を行った。処理後はRP剤、酸素インジケーターとともに気密性の高いフィルムに封入し、保管している。又、過年度に処理済みのもので錆が発生し劣化が始まったものの鉄製品400点の再処理を行った。

**銅製品** 50点の処理を行った。錆除去後、エタノール

脱水、ベンゾトリアゾールのエタノール2～3%溶液による減圧含浸処理を行った。処理後はRP剤、酸素インジケーターとともに気密性の高いフィルムに封入し、保管している。

**木製品** 300点のP.E.G処理を行った。P.E.Gの濃度を20～90%と順次上げ重量の変化が止まった時点で終了した。次年度アルコールによる表面処理を予定している。(松田)

## V まとめ

本地区出土遺物のうちに同一意匠の唐津向付けとしたもの3点がある。2点は宮ノ沢川右岸の遺物集中地区内であり一点は調査区南東隅、旧笹浪家南裏手からの出土である。三～五脚程のセットがあり、その当初の帰属(使用)場所は現笹浪家住宅下部かとは推すところである。しかしながら、和人中心史観との誇りのあることは充分承知しながらも、この使用場所がアイヌの居住地であり、本地区出土品の全てがそのアイヌ人の遺した物とすることにはなお躊躇うものがある。

本年度調査した宮ノ沢川右岸地点は、慶長3(1597)年、魚寄せ祈祷により、時期はずれに鯨を呼び寄せた伝説で名高い八幡宮別当も兼ねた上国寺二代大蔵法印秀海が祀った、或いは同年法印を祀ったともされる若宮社の対岸に位置すると推される。かつての宮ノ沢川の川巾がどれくらいであったかは定かでないが、現在の3m余の川巾や、調査区内の転石の状況はこれと余り違いのない規模の小川であったことを思わせる。

五点の鉾形木製品は形代の類と推され、法印が行ったという「旗鉾奉り」に連想を進めた報道もみられた。水場や水辺から、信仰・儀礼に用いる木製品等が出土する例は多い。木製品という遺物の性質状それは当然のことではあるが、水辺がある種祭祀・儀礼の場となるが多かったのであろうか。4点のイクパスイを合わせ、ここが、共通・共同の祭祀の場とするには、祭祀・儀礼具以外の日常品の類が多すぎるように思える。アイヌの重要な祭祀具が他の生活具と共に捨てられることは、今に伝わるアイヌの伝統からは容れられないところであろう。調査の不充分さもあるが、特

定の意識のもとにこれらが置かれたとは把握できなかった。美々8遺跡の出土品は本地点以上に多様なようである。蝦夷生計図説は「神から授かった大切な食べ物に関わるものは、それを製する道具の類までも、捨て場を家の近くに定め神を祀るものとし、猥に捨てる事を禁じ、中でも水中に捨てることを最も強く忌む」と記している。甚だ穿った見方で気が引けるところであるが、逆説的には水中への物の投げ捨てがある程度行われていたことを示唆しているとも解される。

山田悟郎氏による花粉分析の結果を後掲したが、その分析によれば、この川べりはアシやイタドリが生い茂った状態のようである。捨てられた様々な生活用具が、そうしたアシ原の中に寄り集まり、形成されたのがこの包含層とも推される。

筆者が子供の頃のこの川は洗濯が行われ、茶碗や鍋が洗われ、刃物研ぎがなされ、魚がさばかれ、大根が洗われる場所であった。澱粉取りが行われ、漬物樽が幾つも並んでいた。勿論一個人の占有するところではなく近隣の10戸余の人達が集う場所でもあった。そんな風景が近世初頭にも見られ、その所産がこの出土品ではあるまいか。

別表は、本調査区出土の勝山館跡存続併行期及びその直後と推される陶磁器の集計である。有田焼や瀬戸焼き等の陶磁器の精査が未了であり、若干の異同はあると思うが概その傾向は窮われる。

染付では勝山館期とその後で碗と皿の比が逆転し、碗が急増する。又、唐津焼きが大量に流入し、その大部分が皿であることが知られる。

上ノ国漁港遺跡の調査以来、近年の上ノ国市街地での発掘調査や分布調査では、勝山館跡では出

土しない砂目積唐津焼、唐津（肥前）・備前焼播鉢と明末染付の一群が出土し、これらに微妙な時間差があるものと推してきた。本調査区でも砂目積唐津焼、備前焼播鉢などが僅かながら見られ、勝山館跡内のそれとは異なる染付の一群も出土している。染付については筆者の怠慢で未だ勝山館跡末期の一群との差違を明示し得ないが、今一つの時間帯が設定できるかと推している。刷毛目文様の唐津焼きも早くから流入していることが明らかとなった。

本年度のホド長根地区での建物跡の検出と1670年頃焼成の伊万里碗（大橋康二氏のご教示による）の出土は、勝山館が慶長の初めまでとする村人の伝え（東遊雑記）や、それと直接関わると推される松山番所の上ノ国設置を慶長元年とする伝聞とともに、この頃に勝山館から大規模な人の移住があったことを推させるところである。この宮ノ沢川右岸の出土遺物は、そうした勝山館からの移住者が現上ノ国市街地に居住し残したものと思われる。

今年度出土の遺物は勝山館跡から連続して営まれている上ノ国の人達の動向を示すものであり、それは又、丁度この時期が山城を降りて新しい町場を形成していく、上ノ国にとって大きな時代の転換期に当たっていることを示すものであろう。

勝山館内での和人・アイヌの混住については、否定的見解や疑問も呈せられてきているが、本年度の調査は、従前の勝山館跡出土の非和人社会的なものとした一連の遺物が、アイヌ文化を荷う人達の所産であることを間接的にはあるが明らかにしたものと思われる。混住の実体解明が今後の課題ではあるが、究明の術はなかなか難しい。

平成11年11月から重要文化財日笹浪家住宅の保存修理事業が開始された。幕末期に「はなれ」が増設され、明治期に（国）道路拡幅に伴い「前通り」が三尺切り詰められたとの伝えもあり、笹浪家建築当初やその後の改変の様子を探り、更にはこれらに先立つ江戸期の資料を得るべく、周辺部の調査を実施した。幾つかの面や、石列・積、柱穴、溝跡などを検出したが、各々の組み合わせや、前後関係については未だ充分な検討ができていない。一つには現場での昭和から江戸初期までの各

面の層位的把握が困難であったこと、二つには出土したこの時期の陶磁器の分類が手付かずの状態にあることによる。加えて保存修理工事に伴う解体調査が新たな視点や知見を与えることも考えられる。このような状態で作成した本概報には随所に無理や難がある。平成12年度には今少し周辺部の調査や部材除去後の笹浪家母屋の一部地下調査も予定されている。積み残した諸問題も含め今一度検討を加え笹浪家変遷の過程に迫ることを期したい。

公務で大変お忙しい中、赤沼英男、山田悟郎の両氏から金属と植物遺存体・花粉の分析結果について玉稿を頂戴した。末尾ではあるが深く感謝申し上げます。

多量にして例を見ない遺物に目を奪われ、遺跡遺物の持つ本質を追求することが希薄との指摘を受けるような調査に終始したことは大いに反省しなければならない。年かさの筆者が調査員でもありながらこう述べるのは無責任とお叱りを受けるところであるが、本概報を一読されれば、自明のところであり、自戒を込めて敢えて記するものである。もとより、さまざまな障害が立ち塞がる中で最後まで調査を完遂し、これらの成果を引き出した若い担当者の努力を大いに可として、認めて下さるよう切に願うところであります。なお一層の努力を期すとともに、諸先学諸先生の変わらぬご叱正とご指導をお願い申し上げます。

（松崎）

（54頁註続）

アイヌが伝えるイクパスイの用材規制についてはそれを用いる儀式に対する考え方などについても示唆するところは少なくない。発表を引用し撥文期にイクパスイがあるとした講演があったが、これらについても併せてご教示をお願いしたいと思うところである。



# VI 上之国勝山館遺跡出土遺物の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼 英男

## 1 はじめに

北海道檜山郡上ノ国町上之国勝山館跡は、1979年から今日に至るまで20年間にわたり発掘調査が続けられてきた遺跡である。これまでの調査をとおして、館内での生活はもとより、倭人とアイヌの関わりを知るうえでの遺構や遺物が発見された<sup>1)</sup>。

出土した遺物の中には膨大な数の金属器、とりわけ鉄器があり、鉄塊や鉄滓も確認されている。また、銅もしくは銅合金資料、部分溶解した後固化したと思われる銅片も散見される。これらの遺物をとおして、館内では鉄や銅に関する生産活動が実施されていたことがうかがえる。

館内での生産活動の内容を明確にし、鉄器の使用状況を解明することを目的として、資料の金属考古学的調査が行われた。調査によって得られた結果と、出土状況、遺物の形状を総合的に検討した結果、館内では他地域から供給された原料鉄を素材として、生活に必要な鉄器が造り出されていたものと推定された。原料鉄の一つである銑鉄は、脱炭により鋼にされ、別途もたらされた鋼、あるいは使用目的を果たした鋼製鉄器とともに、生活に必要な鉄器に加工されたものとみることができる。同様に他地域から運び込まれた銅地金や銅製品を使って、銅もしくはその合金の溶解と製品製作が行われていた可能性の高いことも明らかとなった。

原料鉄や銅地金の供給地域を明確にすることは困難であったが、微量元素の組成比が微妙に異なる鋼製鉄器が存在することをふまえると、同時代に複数の供給地域が存在したか、あるいは時代経過とともに供給地域が変わったかのいずれかを想定することができた。上之国勝山館遺跡にみられる現象は、東北地方北部に立地する城館跡<sup>2)</sup>や、北海道札幌市のアイヌ文化に伴う遺跡<sup>3)</sup>、沙流川中流域に点在するチャシ跡においても認められている<sup>4)</sup>。出土鉄関連遺物の金属考古学的調査をとおして、中世の北方社会が他地域との交渉により金属器を入手し、必要に応じ加工を施しながら、

その使用を計っていたことを考えることができたわけである。以下では、上之国勝山館跡から見いだされた出土金属関連遺物の金属考古学的調査によって得られた知見について述べる。

## 2 調査資料

金属考古学的調査資料はNo. 1 (7026) 半製品、No. 2 (9453) 鉄鏃、No. 3 (9461) 釘、No. 4 (8650) 小札、No. 5 (8701) 鉄鍋、No. 6 (4841) はまぐり形鉄塊、No. 7 鉄塊、No. 8 ~ No. 11 鉄滓、No. 12 羽口、No. 13 (2394) 銅もしくは銅合金塊、No. 14 (2389) 銅片、No. 15 るつぼの合計15点の資料である。鉄製品の遺物番号、検出遺構、推定年代を表1aに、鉄滓の検出遺構と外観上の特徴を表1bに、銅関連の遺物番号、検出遺構を表1cに、資料の外観と試料片摘出位置はPL.13~17・19に示すとおりである。

表1aの中で、No. 1 鉄器は漁具を製作するための半製品と推定されている<sup>5)</sup>。また、No. 8、No. 9、No. 10は椀形滓で、特にNo. 8は表面凸部に粘土状物質が部分溶解したと思われる青灰色の異物が付着しているという点で特徴的である。一方、No. 13銅もしくは銅合金塊は流通した素材、No. 14銅片は使用目的を果たした製品の一部であった可能性が考えられる。

## 3 調査試料片の摘出

鉄器、銅もしくは銅合金塊については、肉眼観察で残存状況が良好と判断された部分から2つの微小試料片が摘出された。試料片の摘出にあたっては外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、ダイヤモンドカッターを使って慎重に行った。鉄滓については資料の一部に切り込みを入れ、それぞれの切り込み面から2つの小試料片を摘出した。羽口については熱の影響を受けていないと判断される部分から小試料片を切り出した。一方、るつぼについては破断した部分から小試料片を抜き出した。

表1a 調査資料 (鉄器)

No.	資料番号	資料名	検出遺構	推定年代
1	7026	半製品	16K17	15C後半～16C代
2	9453	鉄鏃	銅鑄造遺構	15C後半～16C代
3	9461	釘	〃	15C後半～16C代
4	8650	小札	〃	15C後半～16C代
5	8701	鉄鍋		15C後半～16C代
6	4841	はまぐり形鉄塊	16J3	15C後半～16C代
7		鉄塊	19J12	15C後半～16C代

注) 資料番号、資料名、検出遺構、推定年代は上ノ国町 松崎水穂氏に、分析番号 (No.) は筆者による。

表1b 調査資料 (鉄塊・羽口)

No.	資料番号	資料名	検出遺構	外観上の特徴
8	K-3	椀形滓	16J8 濠中	凸部に著しく礫のかみ込みがみられ、土砂が固着している。
9	K-3	椀形滓	15L11 〃	鉄滓部は黒褐色を呈する。いたるところに気孔がみられ、赤錆が混在している。
10	M-3	椀形滓	18L11 土塙20	黒褐色を呈する鉄滓に赤錆が混在する。
11	M-6	塊状滓	15M19 キバン+シルト	黒褐色を呈する鉄滓に赤錆が混在する。
12	-	羽口	17N25	外径6.4cm、内径2.4cmで先端に向かい先細となる。

注) 資料番号、資料名、検出遺構、推定年代は上ノ国町 松崎水穂氏に、分析番号 (No.)、外観の特徴は筆者による。

表1c 調査資料 (銅製品・るつぼ)

No.	資料番号	資料名	検出遺構	推定年代
13	2394	銅もしくは銅合金塊	18-M1	15C後半～16C代
14	2389	銅片	18-M1	15C後半～16C代
15		るつぼ	17N25Ⅲ-4	15C後半～16C代

注) 資料番号、資料名、検出遺構、推定年代は上ノ国町 松崎水穂氏に、分析番号 (No.) は筆者による。

## 4 分析方法

### (1) 鉄関連遺物の調査方法

鉄器・鉄滓から摘出した試料片のうち、大きい方をエポキシ樹脂で固定し、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。次に研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金および鉄滓の成因を推定するうえで重要と判断された非金属介在物（鋼を製造する過程で分離されずに鋼中に残った異物）、および鉄滓中に残存する鉱物相を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。

摘出したもう一方の小試料片については、その表面に付着する錆や土砂を除去した後、エチルアルコール、アセトンで洗浄し恒温乾燥機の中で乾かした。健全なメタル資料については直接に、錆試料については粉碎の後テフロン分解容器に秤量し、酸を使って溶解した。このようにして調整した溶液中の、T、Fe、Cu、Mn、P、Ni、Co、Ti、Si、Ca、Al、Mg、Vの12成分を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）により分析した。なお、鉄器の健全なメタルについて十分な試料量が摘出できた場合には、燃焼-赤外線吸収法によりC、Sも定量した。また、鉄滓中のFeOについては酸可溶性鉄（II）定量法により含有量を調べた。

### (2) 銅関連遺物の調査方法

No.13銅もしくは銅合金塊、No.14銅片から摘出した試料片については、内田らの方法<sup>5)</sup>に従って溶解した。すなわち、表面に付着する錆を除去し、エチルアルコールとアセトンを使って洗浄、乾燥した後、テフロン分解容器に直接秤量する。つぎに硝酸で溶解し、塩酸を加え試料濃度約1000ppm、塩酸1モル溶液となるよう蒸留水で希釈するというものである。このようにして調整した試料溶液に含有されるCu、Sn、Pb、Fe、As、Sb、Znの7成分をICP-AES法により定量した。また、るつぽから摘出した試料片については、鉄滓と同様の方法により組織観察だけを実施した。

## 5 分析結果

### 5-1 鉄器の組織観察結果

No.1半製品Sa<sub>1</sub>・Sa<sub>2</sub>から摘出した試料片（PL.13a）はそのほとんどが健全なメタルによ

って構成されていたので、ナイトール（硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5mlの溶液）により腐食した。Sa<sub>1</sub>のマクロエッチング組織の大枠で囲んだ内部のマイクロ組織は、ところどころに黒く腐食されたパーライトがみられるものの、そのほとんどはフェライトによって構成されている（PL.13b<sub>1</sub>・b<sub>2</sub>）。炭素含有量が0.1~0.2%の鋼と推定される。Sa<sub>2</sub>はSa<sub>1</sub>に比べパーライトの占める面積割合が多く、フェライトが細粒化している（PL.13c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>）。0.5~0.6%Cで、オーステナイト域から空冷された組織と思われる<sup>7)</sup>。

Sa<sub>1</sub>・Sa<sub>2</sub>に残存する非金属介在物（PL.13b<sub>1</sub>・c<sub>1</sub>の枠内）にはともに灰色柱状化合物XTが観察され、前者は微細な化合物を内包するガラス質けい酸塩（S）の中に暗灰色柱状化合物Fもみられた（PL.13b<sub>3</sub>・c<sub>3</sub>、PL.8）。EPMAによる分析によって、XTはFe-Ti-Al-O系のチタン化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物〔マグネシウムを固溶した鉄かんらん石2(Fe,Mg)O・SiO<sub>2</sub>と推定される〕であることがわかった。

No.3釘、No.4小札の試料片もほぼ健全なメタルからなる。ナイトールによる腐食組織はNo.1半製品Sa<sub>1</sub>とほぼ同じであり（PL.14）、それぞれ0.1~0.2%C、0.2~0.3%Cの鋼と推定される。一方、No.2鉄鍍はその全域が錆で構成されていた。マクロ組織の枠で囲んだ内部には金属光沢を呈する細線状物質（Cm）がみられた。この物質は層状をなし、島状組織を形成している（PL.14）。これまでの出土鉄器の組織観察結果に基づけば、線状物質はもとの健全な鋼におけるパーライト中のセメントタイトと推定される<sup>8)9)</sup>。セメントタイトによって形成される島状組織をもとの健全な鋼におけるパーライトとし、錆化による膨張を無視すると、もとの健全な地金は炭素含有量0.3~0.4%の鋼とみることがができる（PL.14）。

No.3釘には灰色粒状をしたウスタイト（化学理論組成FeO）、Fe-Ti-Al-V-O系化合物（XT）、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物F〔鉄かんらん石：2(Fe,Mg)O・SiO<sub>2</sub>と推定される〕、およびマトリックス（M）によって、No.3小札はウスタイト、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物F、およびマトリックス（M）によって構成される非金属介在物が観察された（PL.14）。なお、No.2鉄鍍は錆化が著しく非金属介在物を見いだすことができなかった。

No. 5 鉄鍋から抽出した試料片には片状黒鉛(G)とレーデプライト組織がみられ、鑄造鉄器であることが確かめられた。No. 6 鉄塊から抽出した試料片もその全域がレーデプライト組織によって構成されており、鑄鉄品であることがわかった。以下ではこの資料をはまぐり形鑄鉄と呼ぶことにする。No. 7 鉄塊の試料片にはところどころに空隙が観察された。ナイタールによる腐食組織には、初析セメンタイト(PCm)とパーライトからなる組織が観察され、過共析鋼であることが確かめられた(PL.15)。

### 5-2 抽出した試料片の化学組成

表2、表3に抽出した試料片の化学成分分析結果を示す。No. 2 鉄鏝、No. 5 鉄鍋、およびNo. 6 はまぐり形鑄鉄を除く4点のT.Feは95%以上にある。ほぼ健全なメタルが分析されたことがわかる。これに対し、No. 2 鉄鏝、No. 5 鉄鍋のT.Feは49~60%にあり、相当に鑄化が進んだ試料が分析されたとみななければならない。

No. 1 半製品Sa<sub>1</sub>、No. 3 釘にはそれぞれ0.23%、0.12%のCが、No. 6 はまぐり形鑄鉄、No. 7 鉄塊

にはそれぞれ4.73%、2.14%のCが含有されていた(表4)。この結果は、上述の組織観察結果とよく整合する。一方、No. 5 鉄鍋からは0.074%のCuと0.354%のPが検出された。Pについては埋蔵環境下からの富化の心配がある。このような場合、ほぼ同じ埋蔵環境にあったとみなすことのできる鉄器に含有されるPとの比較を行い、埋蔵環境下からの富化の可能性を検討する必要があるが、共伴遺物の調査結果はなく、その実施は困難であった。ここでは、もとの健全な地金に相当量のPが含有されていた可能性を述べるにとどめておく。はまぐり形鑄鉄からも0.185%のPと0.044%のCuが検出された。これらは通常の砂鉄<sup>10)</sup>に含有されるCuに比べ高値にある。この資料のT.Feは84.75%にあり、そのほとんどが健全なメタルからなることを考慮すると、検出されたP、Cuのほとんどは、もとの健全な地金に含有されていたとみることができる。

### 5-3 鉄滓・羽口から抽出した試料片の組織観察結果と化学組成

No. 8 椀形滓から抽出した試料片にはいたると

表2 鋼製鉄器の分析結果

No.		化学成分 (%)														マイクロ組織	n.m.i
		T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V		
1	半製品Sa <sub>1</sub>	98.73	0.23	0.018	0.016	<0.001	0.007	0.016	0.050	<0.001	<0.001	0.004	0.001	0.001	0.001	Pa(0.1-0.2)	XT,F,M
	Sa <sub>2</sub>	96.84	0.54	0.004	0.023	<0.001	0.016	0.019	0.069	0.005	<0.001	0.016	0.004	0.003	0.002	Pa(0.5-0.6)	XT,M
2	鉄鏝	59.64	-	-	0.009	0.003	0.131	0.004	0.009	0.033	1.22	0.026	0.389	0.039	0.002	Cm(0.3-0.4)	no
3	釘	96.52	0.12	0.006	0.022	tr	0.011	0.010	0.051	0.034	<0.001	0.028	0.023	0.012	0.002	Pa(0.1-0.2)	W,XT,F,M
4	小札	97.68	-	-	0.014	tr	0.007	0.005	0.017	0.006	<0.001	0.015	0.015	0.003	<0.001	Pa(0.2-0.3)	W,F,M
	釘(K3.M1)	96.47	-	-	0.015	0.011	0.035	0.016	0.065	0.003	0.444	-	-	-	-	-	S
	釘	92.89	-	-	0.012	0.011	0.024	0.014	0.064	0.019	<0.01	-	-	-	-	-	-

注1) C,Sは燃焼赤外線吸収法、他はICP-AES法による。

注2) Paはパーライト、Cmはセメンタイトもしくはその欠落孔、カッコ内の数字はマイクロ組織から推定される炭素含有量。

注3) n.m.i是非金属介在物組成、Wはウスタイト、XTはFe-Al-Ti-O系化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、Sはガラス質けい酸塩、Mは、マトリックス。

表3 鑄造鉄器の分析結果

No.		化学成分 (%)											マイクロ組織	
		T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg		V
5	鉄鍋	49.44	0.074	0.003	0.354	0.007	0.005	0.018	0.917	0.0694	0.181	0.021	0.020	L, G

注1) 分析はICP-AES法による。Lはレーデプライト、Gは片状黒鉛。

表4 鉄塊の分析結果

No.		化学成分 (%)														マイクロ組織
		T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	
6		84.75	4.73	0.030	0.044	0.004	0.185	0.012	0.011	0.001	0.067	0.016	0.002	0.001	0.017	G
7	半月形	95.14	2.14	0.023	0.027	-	0.018	0.008	0.009	0.001	0.043	0.014	0.005	0.010	0.009	PCm+Pa
	鉄滓付着	99.67	0.01	0.001	0.010	<0.001	0.018	0.009	0.037	0.004	-	-	-	-	-	Pa
		84.54	2.55	-	0.203	0.006	0.048	0.030	0.016	0.120	-	-	-	-	-	L+PCm

注1) C,Sは燃焼赤外線吸収法、他はICP-AES法による。

注2) Gは片状黒鉛、Lはレーデプライト、PCmは初析セメンタイト、Paはパーライト。



ころに空隙がみられ、ところどころに錆が混在していた。鉄滓部分は灰色粒状化合物W、暗灰色の化合物F、やや暗灰色をした角状化合物(XT)、およびマトリックス(M)によって構成される領域と、粒状化合物W、灰色化合物F、マトリックス(M)からなる領域の2つがみられる(PL.16)。EPMAによる分析によって化合物Wはウスタイト(化学理論組成FeO)、化合物FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物〔マグネシウムを固溶した鉄かんらん石: 2(Fe,Mg)O・SiO<sub>2</sub>と推定される〕、化合物XTはFe-Ti-Al-O系化合物と判定された。PL.16から明らかなように、No.11鉄滓はFe-Al-O系化合物H、Fe-Si-Ca-O系化合物O、およびマトリックス(M)によって、No.9・No.10鉄滓はともにウスタイト、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、およびマトリックス(M)によって構成されていた。一方、No.12羽口はそのほとんどがガラス化しており、わずかに石英と思われる化合物Qが残存していた。

鉄滓の化学組成を表5に示す。No.8~10のT.Feは59~65%にある。操作の過程で鉄分に富むスラグが生成したものと推定される。一方、No.11からは21%のT.Fe、22.4%のFeOが検出された。前者の3点に比べ、高還元状態下にさらされたものとみることが出来る。Tiは0.5%未満に

ある。鉄滓から抽出した試料片に鉄チタン酸化物がわずかにみられるとした組織観察結果とよく整合する。

羽口のT.Feは3.28%、Siは19.8%、Alは9.05%にある。羽口先には鉄滓の付着はなく、粘土状物質を素材としていることがわかる。

#### 5-4 銅もしくは銅合金資料の化学組成とつぼの組織観察結果

表6に銅もしくは銅合金塊および銅片の化学成分分析結果を示す。No.13銅もしくは銅合金塊には98.5%のCuが含有され、0.13%のSn、0.20%のPb、0.31%のAs、0.26%のZnが含まれていた。No.14銅片Sa<sub>1</sub>からは88.1%のCu、4.86%のSn、3.41%のPbが、Sa<sub>2</sub>からは85.2%のCu、5.36%のSn、4.46%のPbが検出された。No.13は精銅、No.14は銅、錫、鉛の三元系合金であることがわかる。

PL.17にはNo.15のつぼの外観と抽出した試料片の組織観察結果を示した。内面にはところどころに緑青が析出している。抽出した試料片のマクロ組織にはいたるところに金属粒が残存しており、EPMAによって銅粒であることが確認された。この分析によって、遺跡内では銅を溶融する操作が行われていたことが確実となった。

表5 鉄滓の分析結果

No.		化学成分 (%)													鉱物組成
		T.Fe	FeO	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	
8	椀形滓	59.12	66.0	0.008	0.041	0.141	0.001	0.005	0.481	3.87	0.303	1.64	0.334	0.046	(W,XT,F,M)(W,F,M)
9	椀形滓	61.80	49.7	0.012	0.040	0.144	0.002	0.011	0.459	1.14	0.432	0.963	0.283	0.055	W,F,M
10	椀形滓	64.19	71.4	0.013	0.027	0.074	0.004	0.016	0.137	8.57	0.274	1.58	0.237	0.014	W,F,M
11	塊状滓	21.23	22.4	0.020	0.219	0.830	0.005	0.012	0.272	9.33	7.78	2.96	1.90	0.016	H,O,M
12	羽口	3.28	-	0.002	0.041	0.137	0.003	tr	0.436	19.8	1.64	9.05	1.25	0.020	Q,S

注1) FeOは酸可溶性鉄(II)定量方法、他はICP-AES法による。

注2) Wはウスタイト、XTはFe-Al-Ti-O系化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、HはFe-Al-O系化合物、OはFe-Ca-Si-O系化合物、Sはガラス質けい酸塩、Mはマトリックス、Qは石英と推定される。

表6 銅関連資料の化学組成

No.	資料名	化学組成 (mass%)						
		Cu	Sn	Pb	Fe	As	Sb	Zn
13	銅もしくは銅合金塊	98.5	0.13	0.20	<0.005	0.31	0.011	0.26
14	銅片Sa <sup>1</sup>	88.1	4.86	3.41	0.67	0.91	0.055	0.061
	Sa <sup>1</sup>	85.2	5.36	4.46	0.54	0.99	0.065	0.040

注) 分析はICP-AES法による。

## 6 考察

### 6-1 鉄器の分類

鉄器は鋼を素材とする鋼製鉄器と、銑鉄を素材とする鑄造鉄器の2つに分類される。5-1に基づけば、No. 1 半製品、No. 2 鉄鏃、No. 3 釘、No. 4 小札は亜共析鋼(炭素含有量0.8%未満の鋼)を素材とする鋼製鉄器、No. 5 鉄鍋は鑄鉄鑄物、No. 6 はまぐり形鉄塊は鑄鉄製、No. 7 鉄塊は過共析鋼であることがわかった。No. 1 半製品、No. 3 釘には主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物とFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物が、No. 4 小札からはウスタイト、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物が残存する非金属介在物が見いだされている。鋼の製造過程で、酸化鉄に富み、少量の鉄チタン酸化物を含むスラグと鉄とが接触した状態が存在したことは確実である。一方、No. 5 鉄鍋からは通常の砂鉄に比べ高いレベルにあるCuおよびPが検出された。錆化が進んだ資料ではあるが、鍋に鉄以外の金属の付着がなかったことをふまえると、少なくともCuについては製鉄原料に起因するものと推定される。

上之国勝山館跡では鑄造鉄器の製作につながる鑄型は未検出にある。後述する鋼製造法に基づけば、No. 6 はまぐり形銑鉄は鋼製造の素材として使用された可能性がある。一方、No. 7 過共析鋼については、使用不能と判断された廃棄品、あるいは亜共析鋼を製造する素材として使用されたとする二つの見方をとれるが、出土状況と気孔があったところにみられるという組織観察結果をふまえると、筆者は廃棄品の可能性が高いと考える。

鉄器ならびに鉄塊の調査によって、上之国勝山館には組成の異なる鉄器あるいは鉄塊が使用されていたことが明らかとなった。金属考古学的調査を行った遺物はそれぞれ異なった遺構から見いだされている。従って、それらすべてを同一年代に位置づけて議論を進めることは危険であり、ある程度の時期差を設定する必要がある。このような考古学の発掘調査結果を加味すると、鉄器や鉄塊に見いだされた組成の差異については、銑鉄や鋼など製品鉄器の素材であったと推定される原料鉄、あるいは製品鉄器そのものの入手ルートが時代とともに変わったとする見方に加え、使用不能となった製品鉄器の再利用が計られた、とする点をも考慮に入れて検討する必要がある。

### 6-2 中世における鋼製造法

現在提案されている中世の鋼製造法は幾つかの見方が提示されている。原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石)を製錬して鉄が生産されるという点では一致するが、その際に得られる主生成物、すなわちどのような組成の鉄が生産されたとみるか、その点についての見解の差異が主要因といえる。

製錬産物である鉄は炭素含有量に応じ、鋼と銑鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力前者の鋼部分を摘出して、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そして、その鋼を使って製品鉄器が製作されたとする見方がある<sup>12)</sup>。製錬炉で直接に鋼が造り出されるという意味で、この方法は直接製鋼法に位置づけることができる。この方法によって得られた鉄(炭素量が不均一で相当量の鉄滓が混在した鉄で、主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている)を精製し目的とする鋼に変えるという上述の操作は、精錬鍛冶<sup>12)</sup>と呼ばれている。

ところで、製錬では銑鉄も生産される。銑鉄は再び溶解し、鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器となる。また、銑鉄中の炭素を低減させる、すなわち脱炭することによって鋼も製造できる。この方法は間接製鋼法に位置づけられる。銑鉄の脱炭方法としては、近世のたたら吹製鉄における大鍛冶がよく知られている。この方法については、中沢護人氏が山田賀一氏の論文を基に詳しく説明されている<sup>13)</sup>。それによると、製錬炉でまず銑鉄が生産される。生産の主目的物はあくまで炉外に排出される銑鉄であるが、副生成物として炉内に鉤鉄もできる。これは操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄を鍛冶場に運ぶ。そこではまず、火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ状に積み重ね、さらに小炭で覆い、底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火焰にふれ、酸化されて鋼(左下鉄)となる。ここまでの操作を「左下」という。左下鉄は製錬時の副生成物である鉤とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にしてさらに脱炭が計られる。脱炭が十分に進んだところで、金敷の上ののせ、加

熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。このように「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法は一般に大鍛冶といわれている。

大鍛冶は銑鉄を酸化焰下におき、局所的に脱炭を進めるという方法であるが、最近中世には、溶銑を準備し造滓材を使用しながら空気酸化を併用して脱炭を進めるという方法が行われていたとする見解が筆者らによって提示されている<sup>14)15)</sup>。このように、中世の鋼製造法には幾つかの異なった方法があった可能性が高く、遺跡内における鉄生産活動内容を検討するにあたっては、慎重に行う必要がある。

### 6-3 上之国勝山館跡における鉄関連の生産活動

金属考古学的調査を行った鉄滓には椀形滓と塊状滓の2つの異なった形状がみられた。それらは主としてウスタイト、鉄かんらん石と推定される化合物からなり、他にFe-Al-Ti-V-O系化合物と、Fe-Al-O系化合物を含むものがあつた。6-2で述べた直接製鋼法の立場に立つと、上述の椀形滓や塊状滓は、製錬または精錬鍛冶に伴う廃棄物とみることができる。しかし、製錬に不可欠な気密性を有する炉跡はもとより、相当量の木炭が生産されていたことを示す遺構も未確認にあるという発掘調査結果をふまえると、館内において製錬が行われていた可能性は乏しく、精錬鍛冶の実施が想定される。

既述のとおり、精錬鍛冶を行うためには鋼を主成分とするが、銑鉄も混在した組成が不均一な鉄が出発物質として用意されていなければならない。1993年に実施した鉄関連遺物の金属考古学的調査によって、銑鉄および過共析鋼（炭素含有量が0.8%を越える鋼）からなる鉄に鉄チタン酸化物を含む鉄滓が付着した資料が確認された（PL.18b<sub>1</sub>）。鉄からは通常の砂鉄に含有される量を遙かに上回る、0.2%を越えるCuが検出されている<sup>16)</sup>（表4）。このような組成の鉄が精錬鍛冶の出発物質であつたとすると、製鉄原料としては脈石中に銅鉱物を随伴する鉄鉱石の使用を想定する必要がある。館内およびその周辺にはそのような鉱石を産出する鉄鉱山はない。精錬鍛冶の実施を主張するためには、組成が不均一な鉄の広域的流通があ

つた、あるいはそのような鉄の広域的流通がなかったとすると、上之国勝山館直轄の製錬所が列島内のいずれかの地域に確保されており、そこで生産された組成が不均一な鉄が館内に運び込まれたとする見方をとる必要がある。

1988年の発掘調査において、館内ではPL.15に示すはまぐり形をした重量1156gの鉄塊（No.6）が確認された。摘出した試料片のミクロ組織には片状黒鉛が残存しており、ゆっくりと冷却された鑄鉄で、0.1%を越えるP、0.044%のCuを含むことが確認されている。館内からは鑄造鉄器が製作されていたことを示す鑄型やるつぼは未確認にあり、銑鉄については別の使用を考えなければならない。前述の椀形滓や塊状滓の組成に基づけば、操作の過程で相当量の酸化鉄を含むスラグと鉄とが接触した状態があつたことは確実である。

これらの資料に基づき、銑鉄を脱炭し鋼を製造する操作の実施を考えることができる。この場合の操作方法としては、まず溶銑を準備し、造滓材の使用によって生成したスラグと接触させた後、空気を送り込むという操作が想定される。この操作にあつては、溶銑を蓄えるための設備と空気送風の道具が必要となる。出土鉄滓には椀形滓がみられる。その外観形状は設備の一部を表しているものとも思われる。また、鉄滓とともに、内径が約2.5cm、外径が約6.5cmで、先端に向かうに従って先細となる羽口が検出されている。木炭を燃焼させるための道具としては、気道内径が細い。むしろ、反応サイトに空気を送り込むための道具として使用された可能性がある。銑鉄と過共析鋼からなり、0.2%を越えるCuを含む鉄と鉄滓が付着した資料、あるいはNo.7過共析鋼は、上述の方法により銑鉄を脱炭する過程で生成したもので、いずれも脱炭が不十分であつたため廃棄されたものとみることができる。溶銑の脱炭という操作を考慮に入れて鉄関連遺物の発掘調査を慎重に進めることにより、生産設備と具体的操作の実態に迫ることができるに違いない。

既述のとおり、館内では0.1%を越えるPを含む銑鉄塊が見いだされており、0.2%を越えるCuを含む銑鉄も使用されていた可能性が高い。組成の異なる銑鉄が遺跡内に持ち込まれたか、あるいは銑鉄塊とともに、鉄鍋をはじめとする鑄鉄鑄物の再利用が計られたかのいずれかと推定される。

一方、館内からは1993年の発掘調査によって、重量約5.5Kgの半月形鉄塊（PL.18a<sub>1</sub>）が、検出されている。半月形鉄塊は $\alpha$ Fe（フェライト）に近い組成である<sup>16)</sup>。非金属介在物がほとんど残存せず、それを鉄滓との接触により生成したと解釈することは危険である。なんらかの純化操作が施された可能性もあり、その成因については慎重に判断する必要がある。規格化された形状をとることから、鋼素材として遺跡内に持ち込まれたとみることができる。今後、他の遺跡において同様の形状と組成を有する資料が確認できれば、その点が明確であろう。

#### 6-4 鋼および銅関係資料の分類と流通

出土遺物の金属考古学的調査によって、上之国勝山館跡では銑鉄を脱炭し鋼を製造する操作、鋼を加熱・鍛打し生活に必要とする鉄器を製作する操作、精銅を溶融する操作が行われていることがわかった。鋼製造の素材となった銑鉄は他地域から供給されたものの他、使用不能となった鑄鉄鑄物の二次利用が計られていた可能性がある。一方、鋼については遺跡内で製造されたものと他地域から供給されたものの二つが、製品鉄器については製品としてもたらされたものと、遺跡内で製作されたものがあり、後者の素材としては、他地域から供給された鋼、遺跡内で製造された鋼、および使用不要となった製品鉄器の三つを考えることができる。

これまでの発掘調査によって遺跡内では、武器、

農具、工具をはじめとする多種多様な鉄器が検出されている。遺跡内では銑鉄を脱炭して鋼を製造する操作がなされていたものと推定されたが、それらの鉄器がすべて同じ方法により製造された鋼を素材としていたとは考えにくい。製品鉄器により地金の分類を行う場合には、異なった方法で製造された製品が混在していることを念頭に置き検討する必要がある。

表2～表4に示す化学成分分析値の中で、Cu、Ni、Coの三成分については、一度メタルに取り込まれた後は鉄とはほぼ同一の挙動をとり、その組成比は主として製鉄原料に起因するとみることができる。表2の下段にはこれまでに行われた上之国勝山館跡出土2点の釘の金属考古学的調査結果も併せて示してある。図8（PL.19）にはそれらの中から、定量精度と埋蔵環境下からの富化の問題を考慮し、Ni、Coがともに100ppm以上含有されている9点の鉄器・鉄塊について、Cu/Co、Ni/Co値を求めプロットした。それによると、No.1半製品、No.3釘はすでに分析が行われている釘や半月形鋼素材とはほぼ同じ位置にあり、それらの地金は同じ組成の製鉄原料を用いて製造されたとみることができる。これに対し、No.4小札は図のやや上方に、No.6はまぐり形鑄鉄塊、No.7過共析鋼は図の上方の大きく離れた位置にある。これら3点の鉄器・鉄塊は異なった組成の製鉄原料を用いて製作された可能性が高い。上之国勝山館には組成の異なった鉄器、鉄塊が供給されていた可能性が高いことがこの図からも容易に

表7 出土鉄器の化学組成と非金属介在物組成

資料名	所在地	推定年代	化学組成 (mass %)											n.m.i
			T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al		
浪岡城跡F-3 鉄 杖鉄器	青森県浪岡町	15～16C代	90.70	0.013	0.001	0.085	0.012	0.035	0.028	0.115	0.017	0.015	W,XT,F,M	
浪岡城跡F-382 鉄 杖鉄器	青森県浪岡町	15～16C代	95.90	0.017	0.003	0.088	0.027	0.061	0.005	0.582	<0.001	tr	XT,S	
根城跡鉄 杖鉄器A	青森県八戸市	15～16C代	92.48	0.024	0.002	0.024	0.042	0.134	<0.001	<0.001	tr	0.009	W,XT,F,M	
根城跡鉄 杖鉄器B	青森県八戸市	15～16C代	92.22	0.026	0.002	0.021	0.037	0.114	0.006	<0.001	0.006	0.007	W,XT,F,M	
K501遺跡漁獲具	北海道札幌市	撥文晩～中近世	52.90	0.014	0.002	0.036	0.020	0.035	-	0.578	-	-	XT,S	
K501遺跡漁鉈A	北海道札幌市	撥文晩～中近世	55.56	0.010	0.008	0.043	0.019	0.017	0.054	0.819	0.019	0.133	XT,S	
K501遺跡漁鉈B	北海道札幌市	撥文晩～中近世	95.60	0.008	0.003	0.012	0.024	0.014	0.005	0.030	<0.001	0.001	XTO,S	
鳥越館芋引金	岩手県一戸町	15後半～16C代	97.42	0.008	0.002	0.058	0.019	0.046	0.014	0.082	0.004	0.016	W,XT,F,M	
鳥越館飾り金具	岩手県一戸町	15後半～16C代	97.78	0.008	0.001	0.006	0.019	0.076	0.009	0.028	0.003	0.012	XT,F,M	
鳥越館刀子	岩手県一戸町	15後半～16C代	58.69	0.001	0.011	0.028	0.006	0.014	0.020	0.873	0.037	0.185	XT,S	

注1) trは痕跡、-は分析せず。分析はICP-AES法による。

注2) n.m.iは非金属介在物組成、Wはウスタイト、XTは鉄チタン酸化物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、Sはガラス質けい酸塩、Mはマトリックス。

理解される。

図8には北海道札幌市に立地するK501遺跡のアイヌ文化に伴う遺構、東北地方北部の城館跡から出土した鉄器(表7)の三成分の組成比を示した。多くは出土遺跡や器種を問わず図8の左下にプロットされる。中世にはほぼ同じ組成の鉄器が広域的に流通していたことを想定させる結果であり、中世の東北地方北部ならびに北海道の城館、さらにはアイヌ社会には、原料鉄や製品鉄器の主たる供給依存地域が確保されていたことを考えることができる。なお、No.4小札、No.6はまぐり形鑄鉄、およびNo.7過共析鋼については、それらがほぼ同時代のものであるとすると、複数の地域が確保されていた可能性が高いことを、一方、時代が異なる場合には、時代とともに供給地域が変化した可能性を考えなければならない。この点については、検出遺構の状況を吟味し、慎重に判断する必要がある。

銅および銅合金資料の中で、出土銭貨については、列島内の経済状況と大陸の関係を研究するうえで重要であるという認識の基に、考古学、歴史学、経済史、および自然科学、それぞれの領域に属する研究者が協力して、その製作と流通の状況を解明するための研究が進められている。図9は、出土銭貨研究会を中心として中世の銅生産と銭貨地金の組成について研究を進めてきた佐々木稔氏による銭貨地金の分類結果<sup>17)</sup>に、馬淵久夫氏、富沢威氏らによって行われた輸入明銭と国内模鑄銭に関する分析結果<sup>18)19)</sup>と、咲山まどか氏や筆者によって行われた分析結果<sup>20)</sup>を三角ダイヤグラムに整理したものである。

佐々木稔氏は、あらかじめ時代を銭貨の国内模鑄が盛んになる室町中期から戦国末までに限定したうえで、ア)明代の公鑄銭の鑄造には、銅・錫・鉛の各地金を適正な組成の範囲に調整のうえ、溶製して合金化されたものが使用された、イ)公鑄銭に比べ銅あるいは鉛の含有量が著しく高い銭貨は、私鑄銭もしくは模鑄銭とする、ウ)硫化銅鉱を始発原料に製錬した精銅(精製された銅)に残る銀の回収が明代には広く行われていた、という3つの仮説を設定し、銭貨地金の原材料を分類している<sup>17)</sup>。それに従えば、図9の領域Iにある銭貨は公鑄銭、領域I<sub>Pb</sub>は領域IのものよりもPbの量を増やした私鑄銭、領域I<sub>Cu</sub>は領域IにCuを加え

た模鑄銭とされ、精鉛と青銅のみの場合には領域IIに、精銅のみの場合には領域IIIにプロットされる。図には咲山らの分析結果のみを黒丸で示してあるが、地金の組成による分類結果は、下関市立大学 櫻木賢一氏による肉眼分類結果ともほぼ整合することが確かめられている<sup>20)</sup>。上之国勝山館跡からも銭貨の出土が知られているが、今後その組成を調べることによって、館内での模鑄銭と中国銭貨との存在比率をより明確にできるものと思われる。

金属考古学的調査を行ったNo.13銅もしくは銅合金資料は一定の形状に規格化されており、その形で流通した素材の可能性が高く、No.14銅片については2つの板状のものが部分溶融し付着している。板状の資料を溶解する過程で廃棄されたものと推定され、製品の再利用があったことを示唆している。表6の化学成分分析結果をもとに、No.13、No.14試料に含有されるCu、Sn、Pbの三成分比を図9にプロットすると、No.13棒状資料は領域IIIに、No.14銅片の一方は領域IIIの境界付近に、もう一方はI<sub>Cu</sub>に分類される。銅もしくはその合金資料についても、精銅と銅合金を素材とする組成の異なったものの存在を確認できた。

最後に問題となるのが、上之国勝山館における金属資料の流通範囲であるが、この点を明確にすることは難しい。中世には次第に鉄生産地域が集約化されるという考古学の研究結果や、明代には銅が重要な輸出品目になるという文献史学の研究結果をふまえると、まず、第一には列島内でその供給地域を探す必要がある。しかし、舶載陶磁器や中国銭貨の流入、そして中国の公鑄銭と判定される銭貨地金とほぼ同じ組成の銅合金資料の検出、Cu鉱物を随伴する鉄鉱石を製鉄原料としたと推定される鉄器の存在、これらの事実を総合すると、鉄器や銅製品またはそれらの素材の供給候補地を国内に限定して考えることは危険であり、供給候補地の一つとして大陸をも設定し、東北アジア経済圏の中でその解明を計る必要があると筆者は考える。

列島内、そしてそれを取り巻く東北アジアの社会情勢の変化によって新しい素材や器形の製品が生み出され、その普及とともに、それぞれの地域における生活様式が変わる。そのような幾つかの生産と流通に関する変遷を経て、金属器の生産と

その使用が進んだものと思われる。住居や食生活をも含む生活様式の復元の中に鉄と銅を位置づけ、広域的流通を念頭に入れて研究を進めることにより、上之国勝山館はもとより、北海道のアイヌ社会における鉄の普及の状況が一層みえてくるにちがいない。今後の研究の進展に期待したい。

註)

- 1) 『海峡がつなぐ地域史を掘る』上ノ国教育委員会、1999。
- 2) 赤沼英男「城館跡出土遺物の組成からみた鉄器製作とその流通」季刊考古学、57、1996、pp.53-56。
- 3) 赤沼英男『K501遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果』札幌市埋蔵文化財調査センター、発掘調査報告書編集中。
- 4) 赤沼英男「鉄をとおして擦文文化期・アイヌ文化期の交易を考える」『沙流川歴史館年報』第1号、沙流川歴史館、2000、pp.34-39。
- 5) 上ノ国教育委員会 松崎水穂氏からは、同館跡内から複数の同型品が出土していることから、流通品かと推しているとの意見が示された。
- 6) 内田哲男・平尾良光「ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究」保存科学、29、1990、pp.43-49。
- 7) 佐藤知雄『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』1981、p.44。
- 8) 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と製法」季刊考古学、8、1984、pp.27-33。
- 9) Knox, R. "Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel".  
Arcaeometry, Vol.6, 1963, pp.43-45.
- 10) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が、岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものを砂鉄鉱床という<sup>11)</sup>。従って砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して使用することには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。

- 11) 『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、1981。
- 12) 大澤正巳「古墳共献鉄滓から見た製鉄の開始」季刊考古学、8、1984、pp.36-46。
- 13) 村上英之助「中沢・村上の往復書簡」たたら研究、36・37、1996、pp.78-88。
- 14) 赤沼英男「遺物の解析結果からみた半地下式堅型炉の性格」季刊考古学、57、1996、pp.41-45。
- 15) 赤沼英男、福田豊彦「鉄の生産と流通からみた北方世界」国立歴史民俗博物館研究報告、72、1997、pp.1-40。
- 16) 赤沼英男「上之国勝山館跡出土鉄器・鉄塊・鉄滓の金属学的解析(2)」『上之国勝山館跡XV』上ノ国町教育委員会、1994、pp.64-66。
- 17) 佐々木稔「出土銭貨の自然科学的解析法について」出土銭貨、7、1995、p.93。
- 18) 馬淵久夫・野津健治・西松重義・不破敬一郎・井山弘幸・富永 健「古代貨幣の化学組成」日本化学会誌、1979、p.586。
- 19) 富沢 威・横山哲也・米沢仲四郎・葉袋佳孝・富永 健・嶋谷和彦「中世銭貨の化学分析」堺市環濠都市遺跡発掘調査概要報告—SKT78地点・銭鑄型出土地点の調査—1997。
- 20) 咲山まどか・赤沼英男・佐々木稔「出土銭貨の極少量試料摘出による化学成分分析とその修復法」出土銭貨、7、1997、p.106。

## VII 低湿地性堆積物から検出された花粉・孢子と寄生虫について

北海道開拓記念館 山田 悟郎

### 1. 試料

ここでは、笹浪家跡の発掘調査に際して屋敷跡の地下に分布した低湿地性堆積物中から検出された花粉・孢子と寄生虫卵について報告する。

屋敷跡の西側には沢水を集めて流れる小川があり、小川沿いは樹幹を含む泥炭や樹幹が主となった木質泥炭、泥炭質砂・粘土からなる厚さ70cm～50cmの低湿地性堆積物が分布する。試料はトレンチ5内のA、B地点の2カ所で、堆積物上位から塩化ビニール管を打ち込んで採取された。

A地点の層序は、上位から樹幹や小枝が主となった暗褐色な木質泥炭（厚さ31cm：試料No. 1～6）、やはり樹幹や小枝が主となった黒色木質泥炭（厚さ10cm：試料No. 7～9）、暗褐色木質泥炭（厚さ10cm：試料No. 10～12）、多量の樹幹を含む黒褐色泥炭（厚さ9cm：試料No. 13～15）、最下部が泥炭質粘土の薄層を挟む褐色泥炭質砂（試料No. 16～17）である。

B地点の層序は、上位から樹幹が主となった暗褐色木質泥炭（厚さ10cm：試料No. 1～3）、樹幹が主となった黒色木質泥炭（厚さ12cm：試料No. 4～7）、樹幹や細礫・粗粒砂を含む暗褐色泥炭（厚さ7cm：試料No. 8～9）、多量の樹幹を含む黒褐色泥炭（厚さ15cm：試料No. 10～14）である。

### 2. 試料の処理方法

試料処理にあたっては、円柱状のコアを半割した後に、中心部から1cm<sup>3</sup>の試料を50cc遠沈管にとり、下記の順に化学・物理処理を行ってプレパラートを作製した。

アルカリ処理（10%液を加えて攪拌後24時間放置）→水洗（遠心分離で10回）→フッ化水素酸処理（試料をプラスチック製遠沈管に移し、遠心分離で脱水した試料にフッ化水素酸を加えて攪拌後、24時間放置）→水洗（遠心分離で5回）→比重分離（試料をガラス製遠沈管に移して脱水後、比重を2.1に調整した塩化亜鉛液を加えて攪拌し、1.000r.p.m.で1時間遠心分離）→水洗（比重液

に浮いた部分を取り出し、遠心分離で5回水洗）→傾斜沈殿法で樹幹の細片等を除去→アセトリシス処理（脱水した試料に氷酢酸を加え遠心分離で水分を除去した後に、無水酢酸：濃硫酸の9：1液を加えて攪拌後、3分間湯煎。遠心分離で混合液を除去した後、氷酢酸で洗浄）→水洗（遠心分離で5回）

検鏡にあたっては、樹木花粉を200個以上数えるまでにレンズ下に出現した花粉・孢子を無差別に同定・計数することに努めたが、樹木花粉の検出数が極めて少なく、処理した試料全てを観察しても、樹木花粉を200個以上数えることができた試料は無かった。したがって、表記にあたっては各試料から検出された花粉・孢子数を一覧表にして示した（第1・2表）。また、形態が類似していて分類が困難なものについてはハイフォンで結んで表示した。

また、プレパラート内に寄生虫卵が含まれていたことから、各試料ごとに寄生虫卵の数を数え、形態が特徴的で分類可能なものについては分類し、分類が難しいものについては大分類した上で一覧表にして示した（第3・4表）。

### 3. 分析結果

#### 1) 花粉・孢子

A、B両地点から採取した31点の試料中から20属の樹木・灌木花粉と、3属17科の草本花粉、3科の孢子と、2種類の形態分類孢子が検出された。しかし、第1表、第2表に示したように樹木花粉の出現数は少なく、花粉・孢子的含有数が多かったA地点試料No. 10～12やB地点No. 8～9暗褐色泥炭の試料では、総数で1681～2210粒の花粉・孢子を数えたものの、樹木花粉と孢子的合計がその一割にも満たない、草本花粉が卓越した組成となっている。

暗褐色木質泥炭や黒色木質泥炭、黒褐色泥炭、褐色泥炭質砂では、ヤナギーハコヤナギ属（ドロノキ・各種ヤナギ類）、クルミ属（オニグルミ）、ハンノキ属（ハンノキ・ケヤマハンノキ）、カバ

第1表 笹浪家トレンチ5A地点で検出された花粉と寄生虫卵について

層位 試料番号	暗褐色木質泥炭						黒色木質泥炭			暗褐色泥炭			黒褐色泥炭			褐色泥炭質砂	
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17
モミ属	1	3	-	1	2	-	1	2	-	1	1	2	1	1	1	3	4
トウヒ属	-	1	1	-	-	-	-	1	2	1	2	1	-	1	-	-	-
マツ属	-	1	-	-	1	-	-	-	-	5	2	1	-	2	-	2	5
ヤナギ-ハコヤナギ属	1	5	-	3	7	1	6	-	-	1	3	5	3	4	1	1	3
クルミ属	3	6	3	4	9	6	5	9	5	14	20	9	7	5	3	10	8
ハンノキ属	6	9	7	12	13	15	8	9	12	13	22	19	11	13	7	16	11
カバノキ属	5	3	6	9	4	7	9	12	6	12	16	13	15	22	11	7	6
クマシデ属	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	5	2	-	-	-	1	1
ハシバミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ブナ属	8	3	-	5	3	-	1	5	2	29	39	21	6	3	3	5	3
コナラ亜属	6	12	13	15	22	8	7	17	7	23	28	25	23	19	16	18	9
ニレ属	3	11	4	3	13	3	3	6	4	9	13	8	9	6	13	8	11
モクレン属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	1	1	2	1	3
サクラ-ナナカマド属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	2	-	-	1	2
カエデ属	2	1	-	-	3	-	-	-	2	4	1	1	2	1	2	3	2
シナノキ属	-	2	-	-	2	2	-	3	2	3	3	2	2	2	1	3	3
ニワトコ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
エノキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1
ニシキギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
クワイラクス科	27	39	69	63	85	76	99	69	33	495	427	348	91	51	87	78	114
タデ科	11	33	9	31	56	24	15	39	28	63	61	81	24	48	39	16	87
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	17	16	8	13	27	33	18	13	7	265	329	276	26	189	18	34	22
ナデシコ科	1	5	-	3	5	-	-	2	1	52	42	19	9	286	6	8	4
キンボウゲ科	4	11	1	1	4	3	2	3	4	5	5	9	5	6	2	3	5
アブラナ科	3	5	-	6	2	-	-	-	1	4	1	1	1	2	1	2	4
バラ科	1	1	-	-	1	-	2	1	-	1	1	2	1	2	3	1	1
マメ科	-	2	-	-	-	-	-	1	1	1	-	1	-	-	1	-	2
タラノキ属	2	2	-	-	2	-	2	1	1	2	1	1	2	1	2	3	1
セリ科	13	17	9	14	5	15	4	17	3	21	29	24	28	14	8	4	18
シソ科	-	-	-	-	-	3	-	-	-	1	2	1	-	2	-	2	1
ヒルガオ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	531	165	108	198	272	219	92	129	113	158	163	129	117	109	67	105	181
キク亜科	3	17	6	43	12	16	7	17	11	16	25	26	43	116	25	12	7
タンポポ亜科	-	2	-	-	2	1	-	2	-	2	2	3	-	1	2	2	2
イネ科	421	399	345	321	467	495	429	396	447	859	927	722	692	655	363	948	808
イネ科>45μ	1	1	-	-	3	1	2	1	-	2	1	1	-	-	-	3	1
カヤツリグサ科	4	2	-	6	4	2	-	2	4	4	3	-	-	2	3	4	1
ユリ科	2	3	-	1	1	2	-	1	-	2	3	1	2	1	1	1	2
トクサ科	1	-	-	-	1	-	1	-	-	2	-	-	1	-	1	2	1
ゼンマイ科	2	2	-	1	2	2	-	-	2	3	1	2	1	2	3	2	2
ヒカゲノカズラ科	-	-	-	-	1	1	1	-	-	1	-	1	-	-	1	-	1
単溝型孢子	11	13	9	23	21	15	6	9	5	9	29	15	14	21	7	9	13
三溝型孢子	3	1	1	1	6	2	1	-	-	1	-	1	1	-	1	1	1
合計(個)	1093	794	599	777	1060	952	722	767	704	2091	2210	1775	1140	1589	701	1320	1353



第2表 笹浪家トレンチ5B地点で検出された花粉・孢子

層位 試料番号	暗褐色木質泥炭			黒色木質泥炭				暗褐色泥炭		黒褐色泥炭				
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14
モミ属	1	2	-	1	2	-	-	1	1	2	1	2	2	1
トウヒ属	1	1	-	-	1	2	-	-	1	-	-	2	-	-
マツ属	1	1	2	1	1	1	1	9	3	-	2	-	-	-
ヤナギ-ハコヤナギ属	1	1	2	-	1	-	1	3	1	2	3	7	1	-
クルミ属	7	6	11	4	7	3	2	23	9	5	7	11	4	3
ハンノキ属	5	5	9	12	15	5	9	17	19	7	12	13	9	7
カバノキ属	5	7	3	5	6	3	7	18	15	11	5	9	6	8
クマシデ属	-	1	-	-	1	-	-	4	2	1	-	-	-	-
ハシバミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ブナ属	2	1	3	2	2	1	1	21	25	5	3	4	5	3
コナラ亜属	12	9	5	13	9	6	8	31	29	35	19	23	15	8
ニレ属	9	7	1	4	6	4	6	8	7	9	4	10	7	5
モクレン属	1	-	2	1	1	-	1	2	2	1	-	1	2	1
サクラ-ナナカマド属	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-
カエデ属	1	-	2	1	3	1	2	6	3	1	1	2	3	2
シナノキ属	2	3	1	2	2	1	3	3	2	2	3	6	4	1
ニワトコ属	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-
ニシキギ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
クワイ-イラクサ科	36	58	12	13	61	51	41	332	267	32	19	73	94	76
タデ科	20	31	17	22	43	32	35	54	68	35	23	37	29	41
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アカザ科	14	18	9	10	14	17	5	201	235	26	43	212	113	6
ナデシコ科	2	3	1	-	2	1	1	24	41	4	16	298	19	7
キンボウゲ科	5	5	2	2	5	2	3	4	5	9	4	8	2	2
アブラナ科	4	1	2	1	3	2	2	5	2	2	2	3	2	1
バラ科	2	2	1	1	1	-	2	4	2	4	6	13	1	1
マメ科	-	1	1	-	-	-	-	3	1	1	-	1	1	-
タラノキ属	1	1	2	1	-	2	-	4	2	-	2	1	1	-
セリ科	13	11	7	17	15	14	16	28	23	11	9	19	14	8
シソ科	-	-	1	-	-	-	-	2	1	-	1	3	-	-
ヒルガオ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	-	-
ヨモギ属	551	193	143	131	144	123	112	185	129	103	118	121	92	86
キク亜科	9	12	9	14	21	29	5	19	17	13	56	143	15	11
タンポポ亜科	-	2	1	2	1	1	-	1	1	1	3	5	1	-
イネ科	513	451	328	315	401	362	435	835	746	758	686	637	354	307
イネ科>45μ	-	1	-	-	1	-	-	3	2	-	1	-	-	-
カヤツリグサ科	1	3	2	3	1	2	1	3	2	2	2	3	4	2
ユリ科	-	2	-	3	2	-	-	3	1	1	3	21	2	-
トクサ科	-	1	1	-	1	-	-	3	1	1	1	1	2	1
ゼンマイ科	1	2	1	1	-	-	1	3	1	2	3	4	1	1
ヒカゲノカズラ科	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	1	-	1
単溝型孢子	7	6	6	9	5	6	3	16	8	17	11	15	8	5
三溝型孢子	-	2	2	1	-	-	-	2	2	1	2	1	1	1
合計(個)	1227	852	590	592	778	671	705	1887	1681	1106	1074	1712	814	596

第3表 笹浪家トレンチ5・A地点で検出された寄生虫卵

層位 試料番号	暗褐色木質泥炭						黒色木質泥炭			暗褐色泥炭			黒褐色泥炭			褐色泥炭質砂	
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17
回虫	3	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鞭虫	5	3	6	4	2	3	2	3	7	4	2	2	4	2	3	2	7
吸虫類	2	5	6	2	1	2	-	2	5	3	3	4	2	1	3	5	3
不明寄生虫卵	-	-	1	2	1	1	3	1	6	2	4	2	3	2	2	3	3
合計(個)	10	8	17	8	4	6	5	6	18	9	9	8	9	5	8	10	13

第4表 笹浪家トレンチ5・B地点で検出された寄生虫卵

層位 試料番号	暗褐色木質泥炭			黒色木質泥炭				暗褐色泥炭		黒褐色泥炭				
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14
回虫	-	5	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鞭虫	-	7	5	4	2	1	1	3	7	4	4	3	2	1
広節裂頭条虫?	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
吸虫類	1	-	2	2	1	1	-	2	15	3	2	4	3	2
不明寄生虫卵	3	-	4	2	1	1	1	1	5	-	-	2	3	3
合計(個)	4	12	15	8	4	3	2	6	27	7	6	9	8	6

ノキ属(シラカンバ・ウダイカンバ)、ブナ属(ブナ)、コナラ亜属(ミズナラ・コナラ・カシワ)、ニレ属(ハルニレ)からなる樹木花粉が主となり、ヨモギ属(オオヨモギ)、イネ科(ススキ・ヨシほか)が優勢で、次いでクワイラクサ科(ヤマダワ・イラクサ・カナムグラほか)、タデ科(オオイタドリ・ミチヤナギ・エゾノギシギシ・ミゾソバほか)、アカザ科(アカザ・シロザほか)、セリ科(エゾニュウ・ヤブジラミ・ミヤマトウキほか)、キク亜科(アキタブキ・カニコウモリほか)、単溝型孢子(シダ類)が多く出現する傾向を見せる。下位の黒褐色泥炭では一時的にアカザ科、ナデシコ科が急増する。中位の暗褐色泥炭ではクルミ属とブナ属が急増し、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属などの樹木花粉が主となり、クワイラクサ科、アカザ科、ヨモギ属、イネ科が優勢で、次いでタデ科、ナデシコ科(カワラナデシコ・ハコベほか)、セリ科、キク亜科、単溝型孢子が多く出現する。

全般に樹木花粉ではクルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属が主となり、草本花粉・孢子ではクワイラクサ科、タデ科、アカザ科、セリ科、ヨモギ属、イネ科が主となった花粉組成である。このほかに、針葉樹のモミ属(トドマツ)と落葉広葉樹のシナノキ属(シナノキ・オオバボダイジュ)、カエデ属(イタヤ

カエデ・ハウチワカエデほか)、草本花粉・孢子のアブラナ科(タネツケバナ・コンロンソウほか)、キンポウゲ科(アキカラマツほか)、タラノキ属(ウド・タラノキ)、ゼンマイ科(ゼンマイ・ヤマドリゼンマイほか)なども少ないながら連続して出現した。また、出現数は少ないものの栽培種のイネ科花粉がほぼ連続して出現したほか、B地点試料No.9の暗褐色泥炭から1粒ではあるがソバ属(ソバ)花粉が検出された。

## 2) 寄生虫卵

プレパラート中には花粉化石のほかに寄生虫卵も含まれていた。寄生虫卵はクチン質の丈夫な卵殻をもっているため腐敗しにくく、泥炭などのような低湿地性堆積物中では良好な状態で保存される。検出された寄生虫卵は第3表、第4表に示したような線形動物の回虫卵と鞭虫卵、扁形動物の広節裂頭条虫卵に類似したものと吸虫類の卵、不明としたものからなる。花粉分析の対象となった31点の試料全てで、1cm<sup>3</sup>の試料から2個から27個検出された。

回虫卵は楕円形で外層には金平糖のような凸凹した蛋白膜があり、PL.20-24は長径45μ、短径39.2μである。回虫は、人糞を肥料として栽培された野菜から人体に感染する大型の線虫である。

鞭虫卵(PL.20-26)は卵殻が厚く、卵の前端と後端に半透明の栓があり、提灯に似た特異な形

をしている。鞭虫も人糞を肥料として栽培された野菜から人体に感染する寄生虫である。

吸虫類の卵 (PL.20-25) は、一端が細い楕円形で長径が28 $\mu$ 、短径が15 $\mu$ の卵である。吸虫類はカワニナやマメタニシなどを第1中間宿主、コイ科やアユ、ドジョウなどの淡水魚やサワガニ、モクズガニなどを第2中間宿主とした寄生虫である。

広節裂頭条虫卵に類似した寄生虫卵は長径48 $\mu$ 、短径33 $\mu$ の楕円形で、PL.20-23のように吸虫卵に似て前端に小蓋がある。広節裂頭条虫はサクラマス、カラフトマス、サケを第2中間宿主として人に感染する寄生虫である。

#### 4. 若干の考察

検出された花粉・胞子は樹木花粉の出現数が少なく、イネ科、ヨモギ属、クワイイラクサ科、タデ属、アカザ科などの草本花粉が卓越した構成となっていて、一見すると樹木の分布が乏しかった状況が復元される。しかし、背後の丘陵に分布した樹木が乏しかったのではなく、コナラ亜属、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属などが主となった落葉広葉樹林が分布していたと考えられる。

背後の丘陵に落葉広葉樹が分布していた木本泥炭や泥炭が堆積した流れの淀んだ小河川周囲が開かれた空間で、水際にはヨシやミゾソバ、イラクサが、幾分乾燥した場所には荒れ地などに多いススキ・オオヨモギ・アカザ・オオイタドリ・エゾニユウ・シダ類が主となった草本群落が発達した環境下にあった結果と考えられる。草本群落は下位の泥炭質砂が堆積した時にはイネ科が卓越しクワイイラクサ科、ヨモギ属を伴うものであったが、黒褐色泥炭が堆積した時にはイネ科、ヨモギ属、アカザ科、ナデシコ科が卓越した群落を形成し、暗褐色泥炭が堆積した時にはクワイイラクサ科やアカザ科、イネ科が卓越した群落に替わり、上位の黒色木質泥炭や暗褐色木質泥炭が堆積した頃にはヨモギ属とイネ科が卓越した群落に替わるといった変遷を辿る。

わずかではあるが連続して検出された栽培種のイネ科や、暗褐色泥炭から1粒検出されたソバ属花粉は、近くでイネ科やソバ属の穀物が栽培されていたことを示す。これまでに松谷 (1989, 1992) によって、勝山館跡からコメやキビ、ソバ、アワ、

小豆、ウリや、ウメ、ムクロジなどの種子の出土が報告されている。また、山田 (1985) は勝山館跡の井戸周囲の堆積物からソバ属花粉を検出し、ソバが栽培されていたことを明らかにしている。泥炭中から検出されたイネ科やソバ属花粉は、これらの栽培種のいくつかは上ノ国で栽培されていたことを物語る。

泥炭中から連続して寄生虫卵が検出されたが、1 $\text{cm}^2$ の泥炭中から出土した数が最大でも27個である。金原 (1997) によると、藤原京などの便所遺構中からは1 $\text{cm}^2$ の堆積物中に5,000~6,000個の寄生虫卵が含まれており、鞭虫と回虫は定住している、人口密度が高い、農耕生活をしているという条件下で蔓延する種類であるとしている。したがって、今回試料を採取した個所は便槽や肥溜跡ではない。陸上部に堆積した土壌の分析を行ってはいないが、当時の上ノ国の市街地が寄生虫によって汚染されており、雨水によって土壌が河川に流れ込んだ際に、土壌中に含まれていた寄生虫卵がともに流れ込んだことが考えられる。

ともあれ、16世紀末から17世紀初頭にかけて、回虫や鞭虫で汚染された野菜を十分に洗浄しないでたべ、サケ科の魚類やコイ科の魚類を生で食べるという生活が行われていたことを示すものと考えられる。

#### 引用文献

- 金原正明 (1997) 「自然科学的研究からみたトイレ文化」大田区立郷土博物館編『トイレの考古学』p.197-216
- 松谷暁子 (1989) 「植物遺存体の同定」『史跡上之国勝山館跡 X』p.63
- 松谷暁子 (1992) 「勝山館出土植物遺残の識別」『史跡 上之国勝山館跡 XIII』p.57-58
- 山田悟郎 (1985) 「勝山館跡の古環境について」『史跡 上之国勝山館跡 VI』p.p.133-139

## 第2部 夷王山墳墓群第Ⅱ地区の調査

### I 遺跡の概要

夷王山墳墓群は、夷王山麓周辺に広がる中世の墳墓群で、勝山館の人々の葬送地と推される。今尚、マウンド状に墓の封土が残り、地表面からでもその位置が容易に確認できる。現在、地表観察と発掘調査から6つの丘陵に計622基の墳墓があると想定されている。その内、今回の調査地点で

ある第Ⅱ地区には、113基の墓が想定されている。発掘調査は昭和27年明治大学の調査を嚆矢とし、同39・56・57、平成元年に調査が行われ、土葬墓、火葬墓、火葬施設等を検出している。昭和56年度勝山館の搦め手地区の調査でもその一群と思われる土葬墓を調査している。

### Ⅱ 遺構確認調査

#### 1. 調査目的

現園路は夷王山墳墓群第Ⅱ地区内を通るものであり、来年度以降園路整備が行われる予定のルート上に掛かる遺構の状況を確認する調査である。墳墓の広がりを確認することを目的とした。

#### 2. 位置

夷王山の裾、平成元年度調査区の南東側、標高127m前後の平坦地である。北東側は小さな沢に向かい傾斜し、東側は50基の墓が分布し、寺ノ沢川の一支流に至る。又、地表観察では、マウンド状に残る墓を確認していない地点である。

#### 3. 調査法

現駐車場とはほぼ並行するラインを横軸とし調査区を設定した。作図方法等は宮ノ沢川右岸地区の調査方法とはほぼ同様であり割愛する。調査はL1～O1・L3～O3・L5～O5ラインの3つのトレンチを設定し、表土を除去、遺構（墳墓）の分布を確認した。その後、遺構を確認したL5～O5ラインに隣接するL4～O4ラインでも遺構（墳墓）の存在が想定されるので、調査区を拡張し、3基の土壌を調査した。

#### 4. 調査経過

10月4日調査開始。表土除去後、遺構、土層堆積状況を確認。14日～土壌2、4調査。後土壌5を調査。10月21日調査終了。

#### 5. 基本層序と堆積状況

基本層位は勝山館跡の調査に基づき設定。

I層 10YR2/3～7.5YR4/3黒褐色土、褐色土（近・現代に相当）。

II層 2層に細分される（近世に相当）。

II a層 7.5YR2/3～7.5YR4/3黒褐色土、褐色土。

II b層 白色火山灰（Ko-d、1640年降灰）。

III層 7.5YR2/1～7.5YR2/3黒褐色土、暗褐色土、盛土（中世に相当）。

IV層 3層に細分される（中世以前に相当）。

IV a層 7.5YR2/1～7.5YR2/3黒褐色土、暗褐色土。

IV b層 褐色火山灰（B-Tmと推される）。

IV c層 7.5YR2/2～10YR3/4黒褐色土、暗褐色土。

V層 7.5YR4/4 ソフトローム。

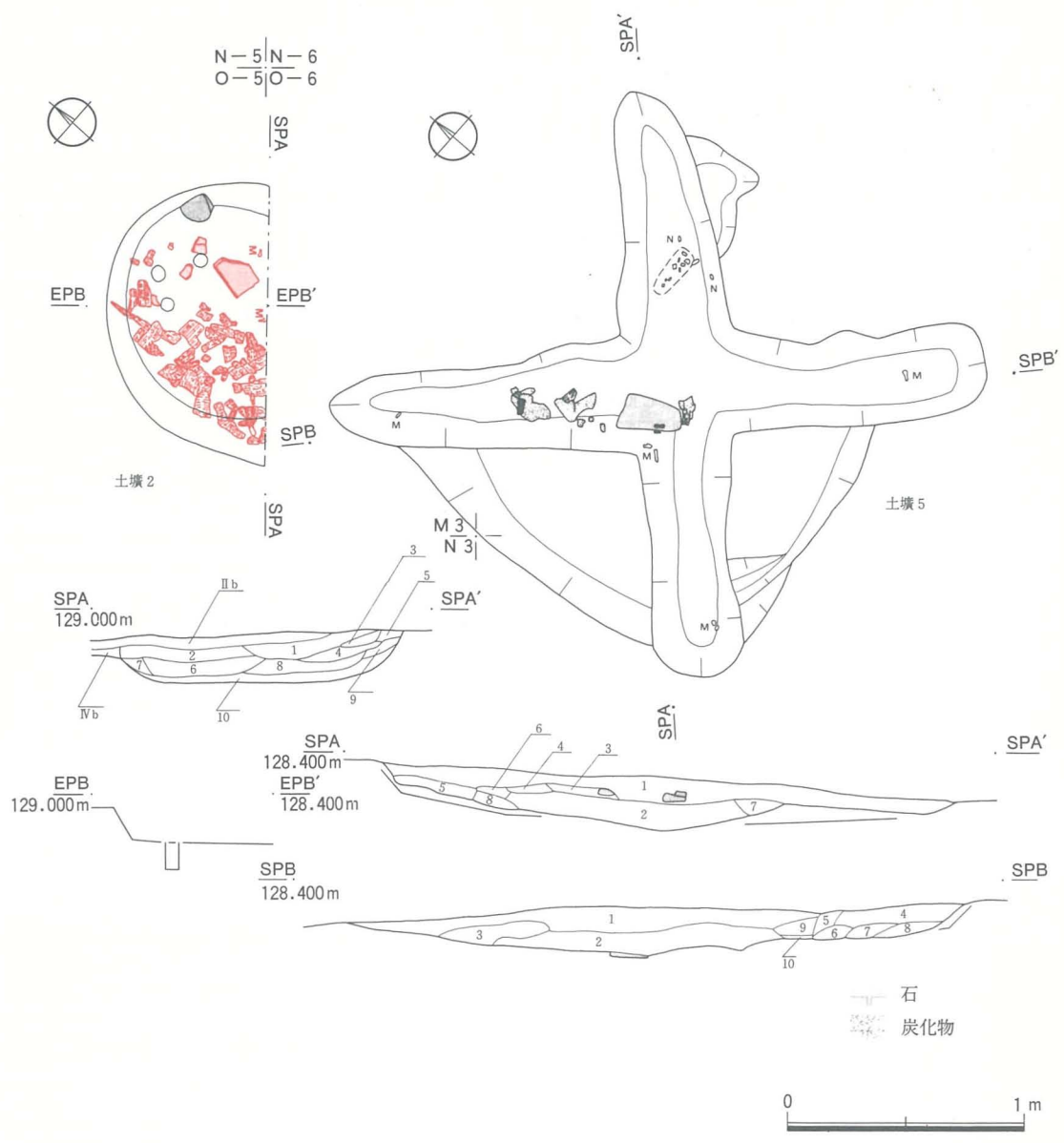
VI層 7.5YR4/6 ハードローム。

調査区西側ではIV層以降の堆積が良好に残り、L1～O1区周辺でKo-dを確認し、厚いところでは5cmの堆積がある。又、K～M1区周辺で礫粒の混じる盛土を確認した。Ko-d下層であり中世以前のもので推される。一方調査区東側M・N3区では後世の削平のため、I層下がV・VI層になる場所もある。

#### 6. 検出遺構

勝山館期と推される火葬墓4基、火葬施設1基を検出した。遺構配置図に示した柱穴は道指定史跡の昭和の頃の柵や案内板の柱である。又、K～M1区周辺で中世期と想定される盛土を確認した。**土壌1**：O5区に位置する。長軸1.3m、短軸は最大0.9m、平面形は台形状を呈する。覆土に炭化物を多量に含む。遺構プランの確認で調査終了。**土壌2**：（第3図、PL. 8-3）O5区に位置する。調査区外部分は未調査であり、平面規模は不





第3図 土壤2・5平面図他

明だが、平面形は長軸1m以上の隅丸長方形ないし、楕円形を呈すると推される。炭化物を多量に含む。覆土上面にKo-dのブロックが堆積する。

**土壌3**：N5区に位置する。長軸1.2m、短軸1.1m、平面形は隅丸方形ないしは楕円形を呈する。覆土に炭化物を多量に含む。遺構プランの確認で調査終了。

**土壌4**：(PL.8-2)L5区に位置する。平面形は、長軸1.4m、短軸1.2mの長方形を呈する。覆土上部にはKo-dが20cmと厚く堆積し、下部に

は焼土が6cm程堆する。焼骨が東壁側を中心に出土。他に銅銭、釘等が出土した。今回の調査は焼土面で終了した。

**土壌5**：(第3図、PL.8-4)M3区に位置する。長軸(北西-南東)2.7m、短軸(北東-南西)2.4mの十字状の溝の南西脇と南東脇に段が付く形態である。覆土は炭化物を多量に含み、溝北東部では骨片を検出した。平成元年度調査でも、十字形の溝を伴う土壌が検出され、火葬施設と推されたが、これも同様の遺構と推される。

### Ⅲ まとめ

今回の調査で、夷王山墳墓群第Ⅱ地区で地表観察で確認されているもの以外に、新たに4基の火葬墓を確認し、十字形の溝を伴う火葬施設を1基検出した。これで第Ⅱ地区で検出された十字形の溝を伴う火葬施設は6基となった。墓の内、土壌4は壙内に焼土が厚く堆積しており、4~5cm長程の焼骨を複数検出した。焼土に混じりが少ないことと焼骨の残り具合から2次堆積とは考えがたく、壙内で生じたもの、つまり土壙内で火葬されたと推される。前述の十字溝を伴う火葬施設で焼き、墓へ収めるものとは違った葬送法があると推される。しかし、土壌4の壙底部は未調査であり、遺構の全容が不明である以上、火葬方法の違いに

ついては、今後検討を要する課題である。

調査区北西部で盛土を確認したが、この周辺は墓の分布しない地点である。盛土の性格は不明であるが、墓の分布しない場所にも人の手が加わっている状況を確認したのは、平成元年度調査検出の道遺構に続いて2例目である。

第Ⅱ地区の調査では、これまでの調査で墳墓、火葬施設、道の遺構が確認され、墓地の実態が少しづつ浮かび上がってきた。しかし、墓の調査数が少ない中、今年度調査の結果を併せても、第Ⅱ地区の様相を述べるには資料不足であり、来年度調査予定の東隣接地の調査結果を踏まえ再考したい。(松田)

表3 土壌2土層観察表

II b	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	白色火山灰 (Ko-d) 20%	ソフト	炭化物少量 炭化物多量  炭化物少量  炭化物多量
IV b	7.5YR	2/1	黒褐色土主体	7.5YR4/6褐色火山灰 (B-Tm) 混じる	ソフト	
1	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ローム粒	ソフト	
2	7.5YR	2/2	黒褐色土主体		ソフト	
3	10YR	2/1	黒色土主体		ソフト	
4	7.5YR	1.7/1	黒褐色土主体		ソフト	
5	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ローム粒	ソフト	
6	7.5YR	1.7/1	黒色土主体		ソフト	
7	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ローム粒	ソフト	
8	7.5YR	1.7/1	炭化物主体		ソフト	
9	7.5YR	2/1	黒色土主体	ローム粒	ソフト	
10	10YR	4/3	褐色土主体	ソフトローム	ソフト	

表4 土壌5土層観察表1 (A-A')

1	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	火山灰少量	焼土粒微量C少量 骨少量 C少量 焼土粒少量C少量  焼土粒少量
2	7.5YR	1.7/1	黒色土主体		
3	7.5YR	2/1	黒色土主体	火山灰少量	
4	7.5YR	2/2	黒褐色土主体		
5	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ローム粒	
6	7.5YR	4/3	褐色土主体	ローム粒	
7	7.5YR	2/1	黒褐色土主体		
8	7.5YR	4/4	褐色土主体	ソフトローム	

表5 土壌5土層観察表1 (B-B')

1	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	火山灰少量	焼土粒微量 骨少量C微量 C少量 焼土粒少量C微量 C微量 C微量 焼土粒少量C微量 C少量 C微量 C多量
2	7.5YR	1.7/1	黒色土主体		
3	7.5YR	4/3	褐色土主体	ソフトローム	
4	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	火山灰微量	
5	7.5YR	4/3	褐色土主体	ソフトローム	
6	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ソフトローム	
7	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ソフトローム	
8	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ソフトローム	
9	7.5YR	2 2	黒褐色土主体	ソフトローム	
10	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ソフト	

# 圖 版







1 重要文化財旧笹浪家住宅主屋正面石垣検出状況（北西から）



2 堀跡検出状況（西から）

1 IIc 層木製品出土状況 (北から)



2 杭列出土状況 (北から)





1 調査区西側宮ノ沢川右岸完掘状況（南から）



2 調査区西側宮ノ沢川右岸完掘状況  
（杭列が連続する一北から）



3 調査区西側宮ノ沢川右岸西壁土層堆積状況



4 調査区西側宮ノ沢川右岸北壁土層堆積状況



6 木簡 (表面)  
(写真提供 奈良国立文化財  
研究所)



3 染村碗出土状況



4 染村皿出土状況



1 調査区南東部遺物出土状況



2 調査区西側IIc層羽子板他出土状況

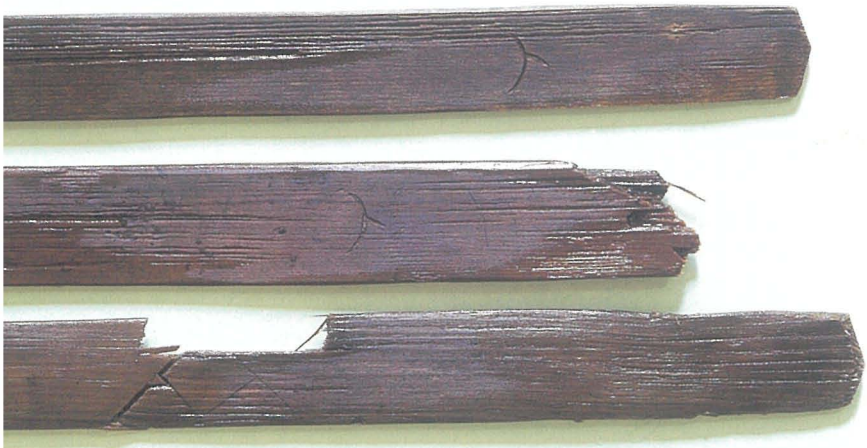
1 イクバスイ (表面)



2 イクバスイ (裏面)



3 イクバスイ (シロシ部分)



4 イクバスイ出土状況 (北から)



1 漆盆出土状況



2 漆椀（シロシ入り）出土状況



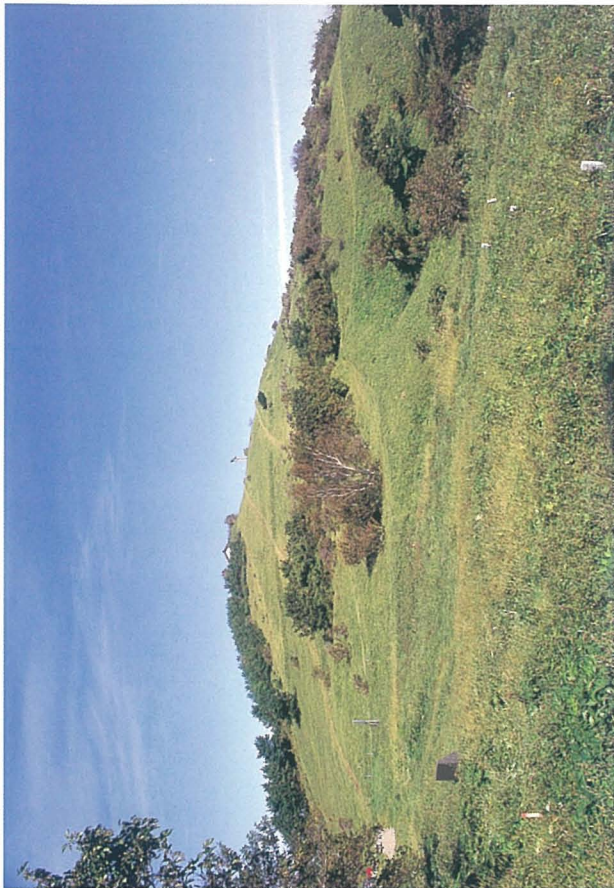
3 漆椀出土状況



4 漆器出土状況



1 表王山墳墓群第Ⅱ地区 (南から)



2 土壇 2 炭化物検出状況 (北から)



3 土壇 4 検出状況 (西から)



4 土壇 5 (東から)





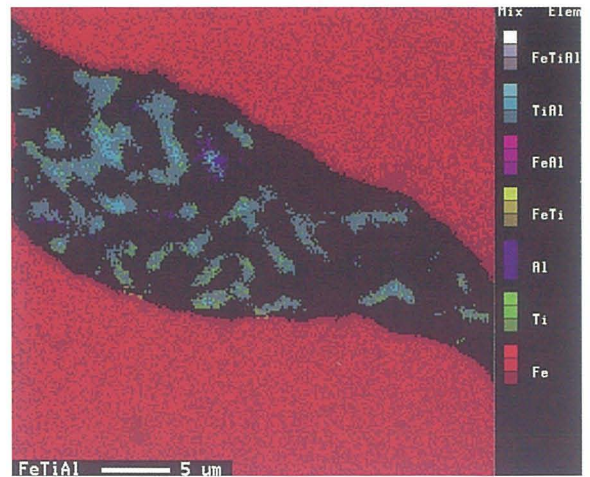
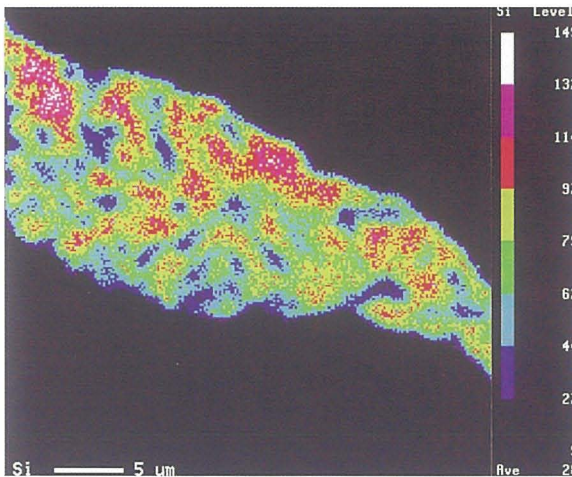
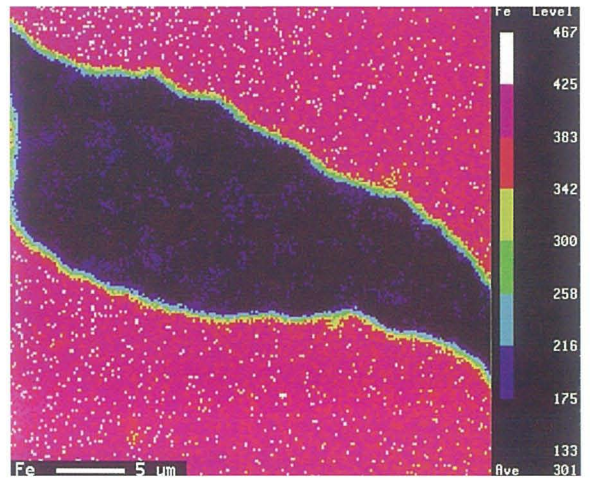
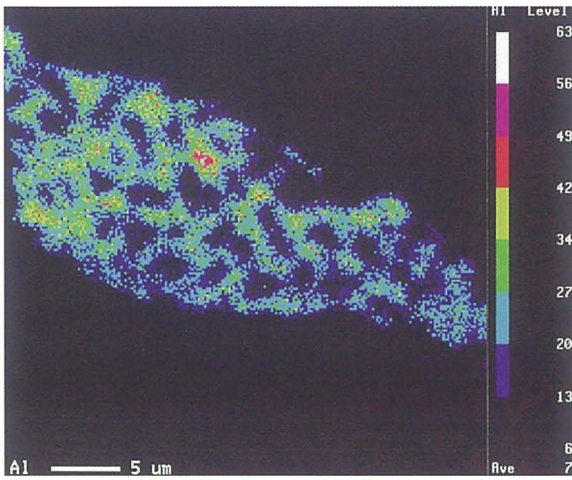
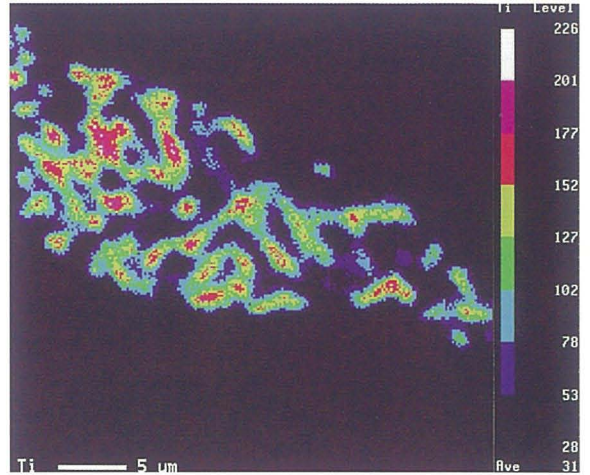
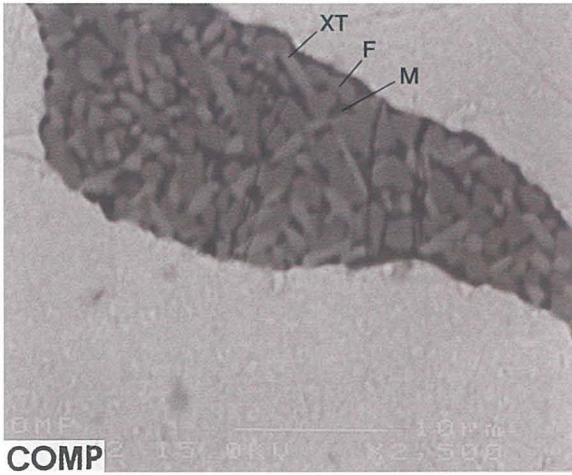
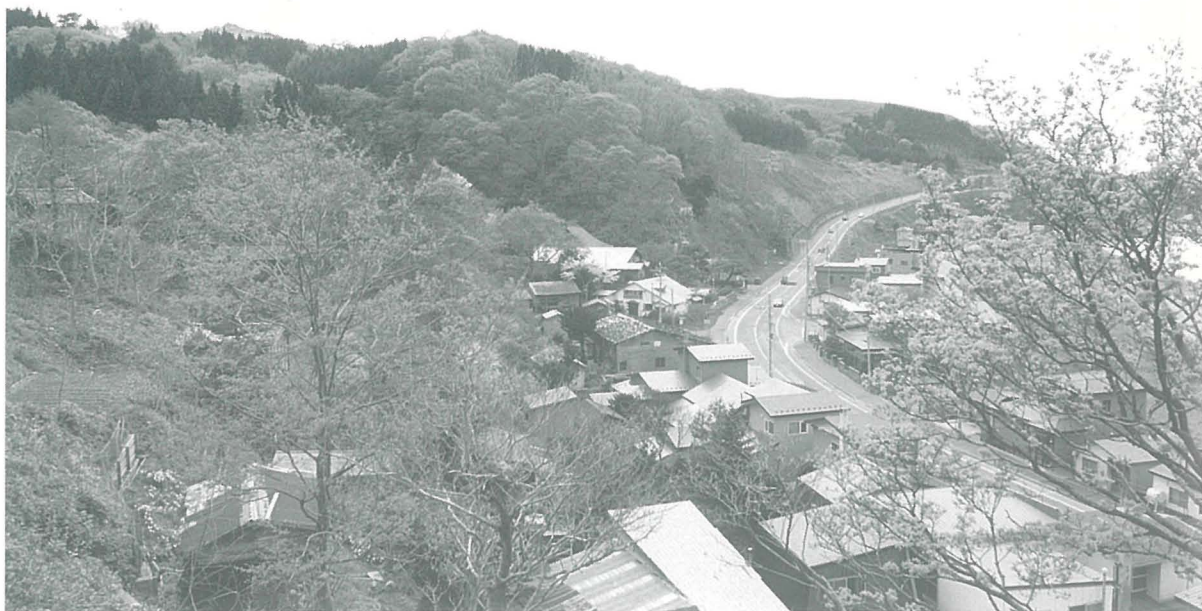


写真1 No.1 (7026) 半製品の非金属介在物に含有される元素濃度分布のカラーマップ  
 色が青-赤-白の順に含有濃度が高い。  
 XTは鉄チタン酸化物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、Mはマトリックス。



1 調査区遠景（東から）



2 調査区南側（調査前・南から）



1 旧笹浪家住宅主屋裏庭石積（西から）



2 旧笹浪家住宅主屋正面石垣（西側部分）



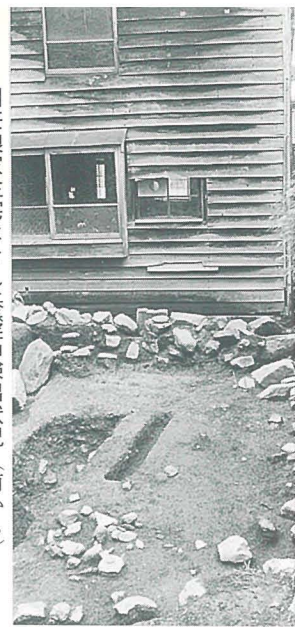
5 土壌5（西から）



6 鍛冶関連滓検出状況（南から）



7 鍛冶関連滓検出状況  
（部分拡大・南から）

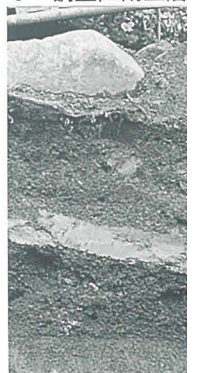


3 旧笹浪家住宅はなれ基礎石検出状況（南から）



4 旧笹浪家住宅はなれ基礎石検出状況（南から）

8 調査区南土層





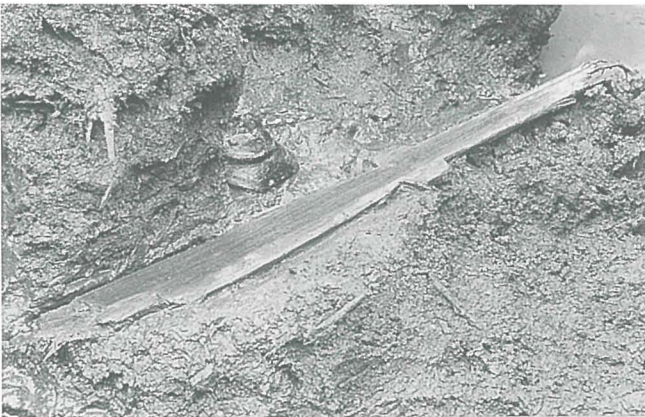
1 箆・串出土状況



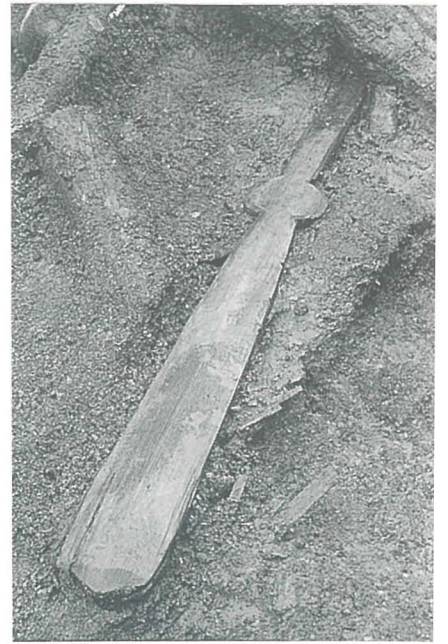
5 木製品出土状況 (下駄他)



2 形代・志野皿他出土状況



3 形代出土状況



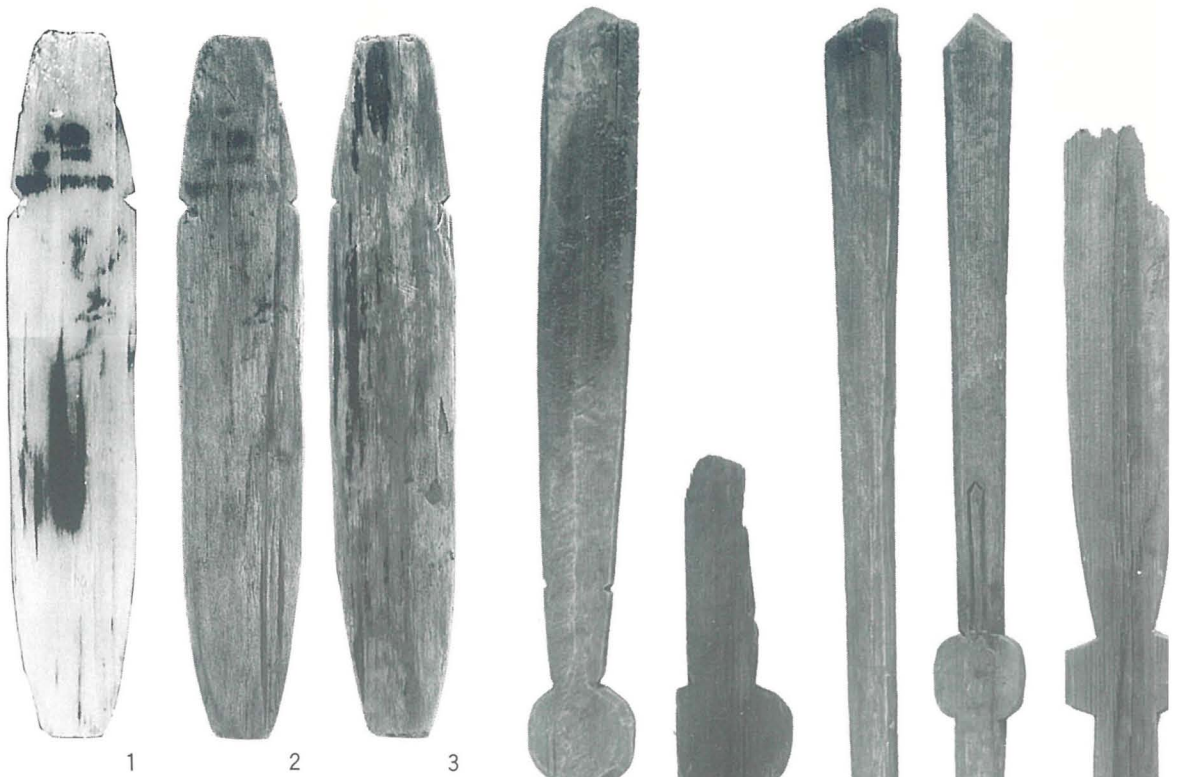
6 形代出土状況



4 樽出土状況



7 漆椀出土状況



1 木簡 (表・赤外線撮影) 2 木簡 (表)  
 3 木簡 (裏)  
 (写真提供 奈良国立文化財研究所)



4~8 形代  
 9・10 羽子板  
 11 網浮子



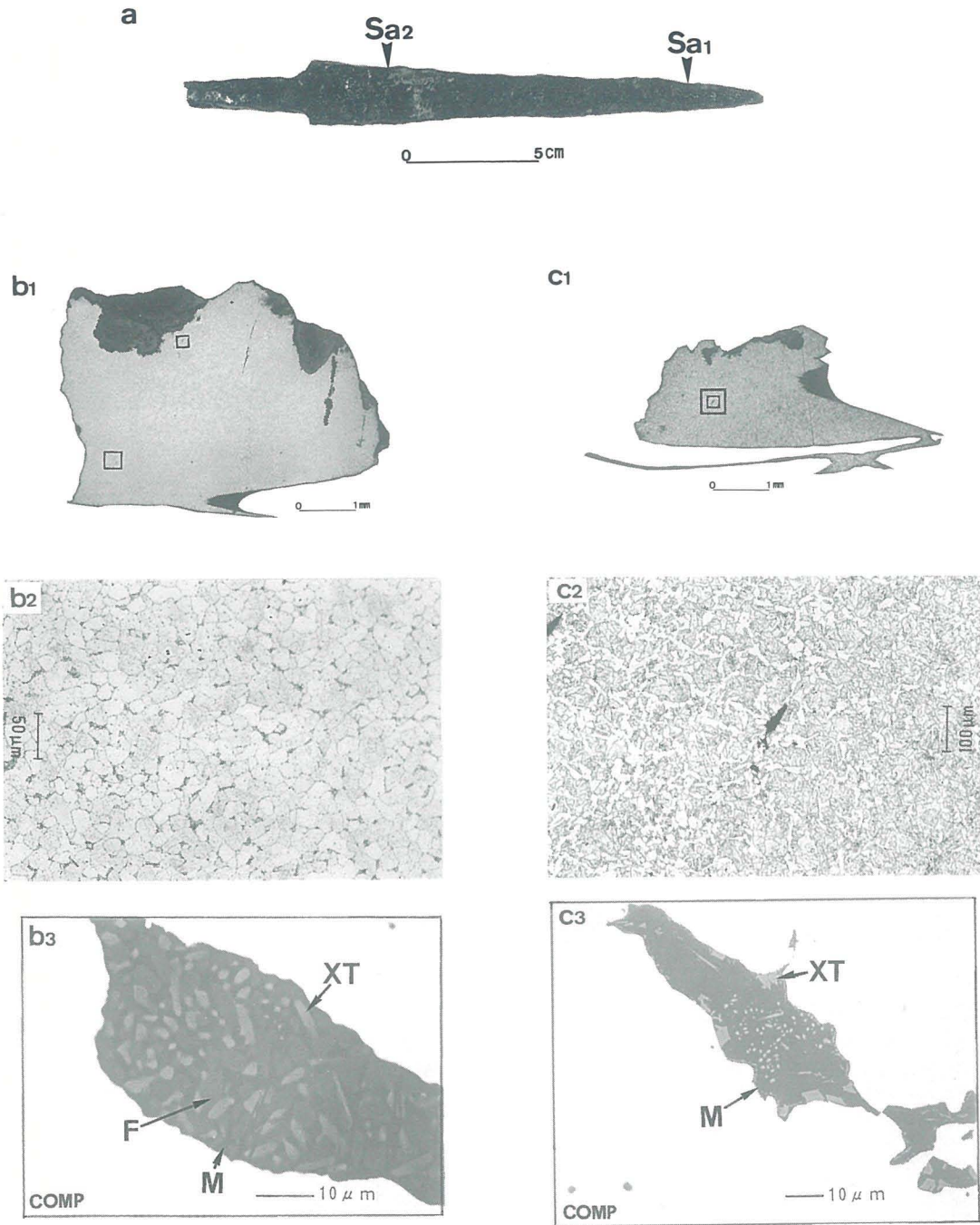


図1 No. 1 半製品の外観と抽出した試料片の組織観察結果

a ; 外観、矢印は試料片抽出位置。

b<sub>1</sub> ~ b<sub>3</sub> · c<sub>1</sub> ~ c<sub>3</sub> ; a の Sa<sub>1</sub> · Sa<sub>2</sub> から抽出した試料片のナイトールによるマクロ・マイクロエッチング組織と残存する非金属介在物の E P M A による組成像 (COMP)

X T は Fe-Ti-Al-O 系化合物、F は FeO-MgO-SiO<sub>2</sub> 系化合物、M はマトリックス。


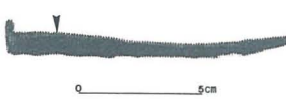


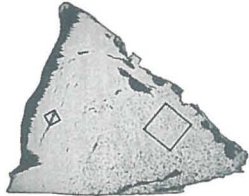

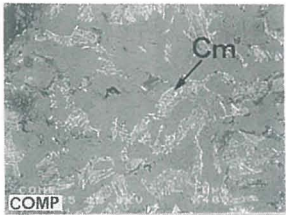


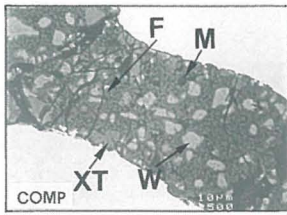
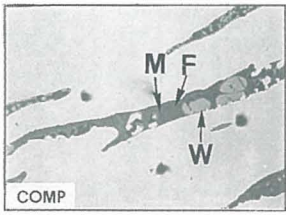
	No. 2 鉄鏃	No. 3 釘	No. 4 小札
外観			
マクロ組織			
ミクロ組織			
EPMAによる組成像			

図2 鉄器の外観と抽出した試料片の組織観察結果

外観の矢印は試料片抽出位置。No. 3・No. 4はナイタールによるエッチングを実施。  
マクロまたはマクロエッチング組織の枠囲んだ内部をミクロ組織観察。COMPはEPMAによる組成像。Cmはセメントイト ( $Fe_3C$ )、Wはウスタイト、XTはFe-Ti-Al-V-O系化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、Mはマトリックス。

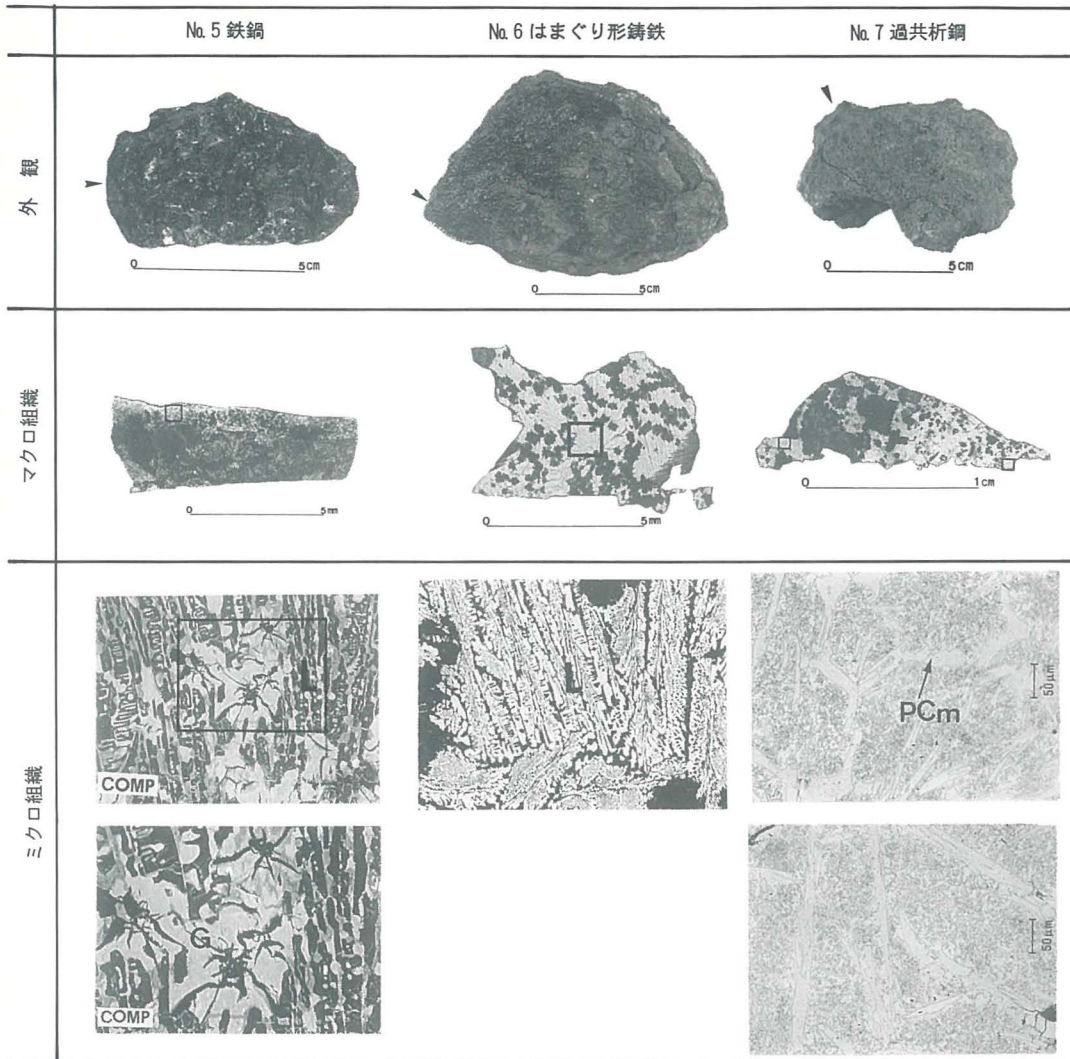


図3 No. 5 鉄鍋・No. 6 はまぐり形鑄鉄・No. 7 過共析鋼の外観と抽出した試料片の組織観察結果  
 外観の矢印は試料片抽出位置。No. 6・No. 7 はナイトールによるエッチングを実施。  
 マクロまたはマクロエッチング組織の枠囲んだ内部をミクロ組織観察。COMPはEPMAによる組成像。  
 Lはレーデブライト組織、Gは片状黒鉛、PCm は初析セメントイト。




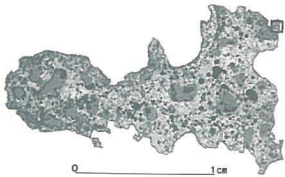
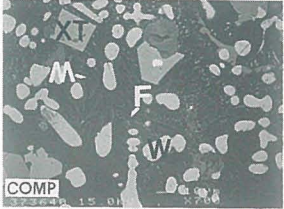
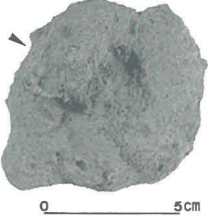
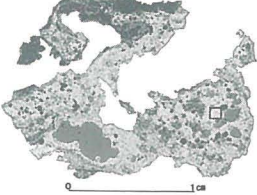
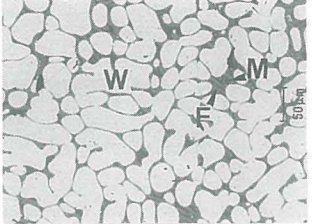
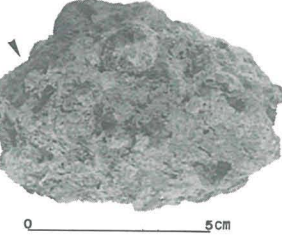
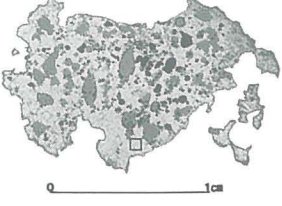
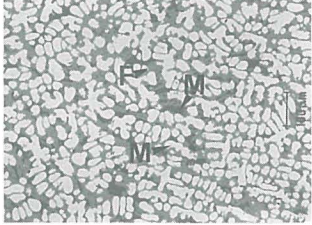
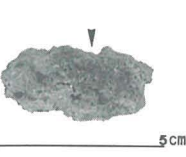
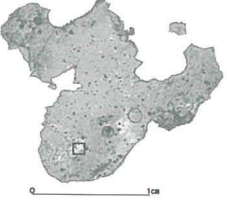
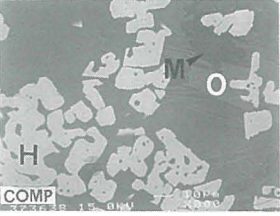
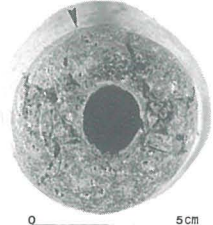
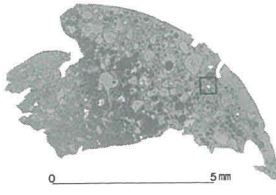
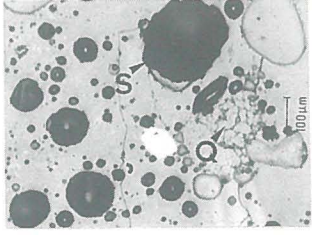
	外 観	マクロ組織	ミクロ組織
No.8 鉄滓			
No.9 鉄滓			
No.10 鉄滓			
No.11 鉄滓			
No.12 羽口			

図4 鉄滓・羽口の外観と抽出した試料片の組織観察結果

外観の矢印は試料片抽出位置。マクロ組織の枠囲んだ内部をミクロ組織観察。

COMPはEPMAによる組成像。Wはウスタイト、XTはFe-Ti-Al-O系化合物、HはFe-Al-O系化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、OはFe-Si-Ca-O系化合物、Qは石英、Mはマトリックス。

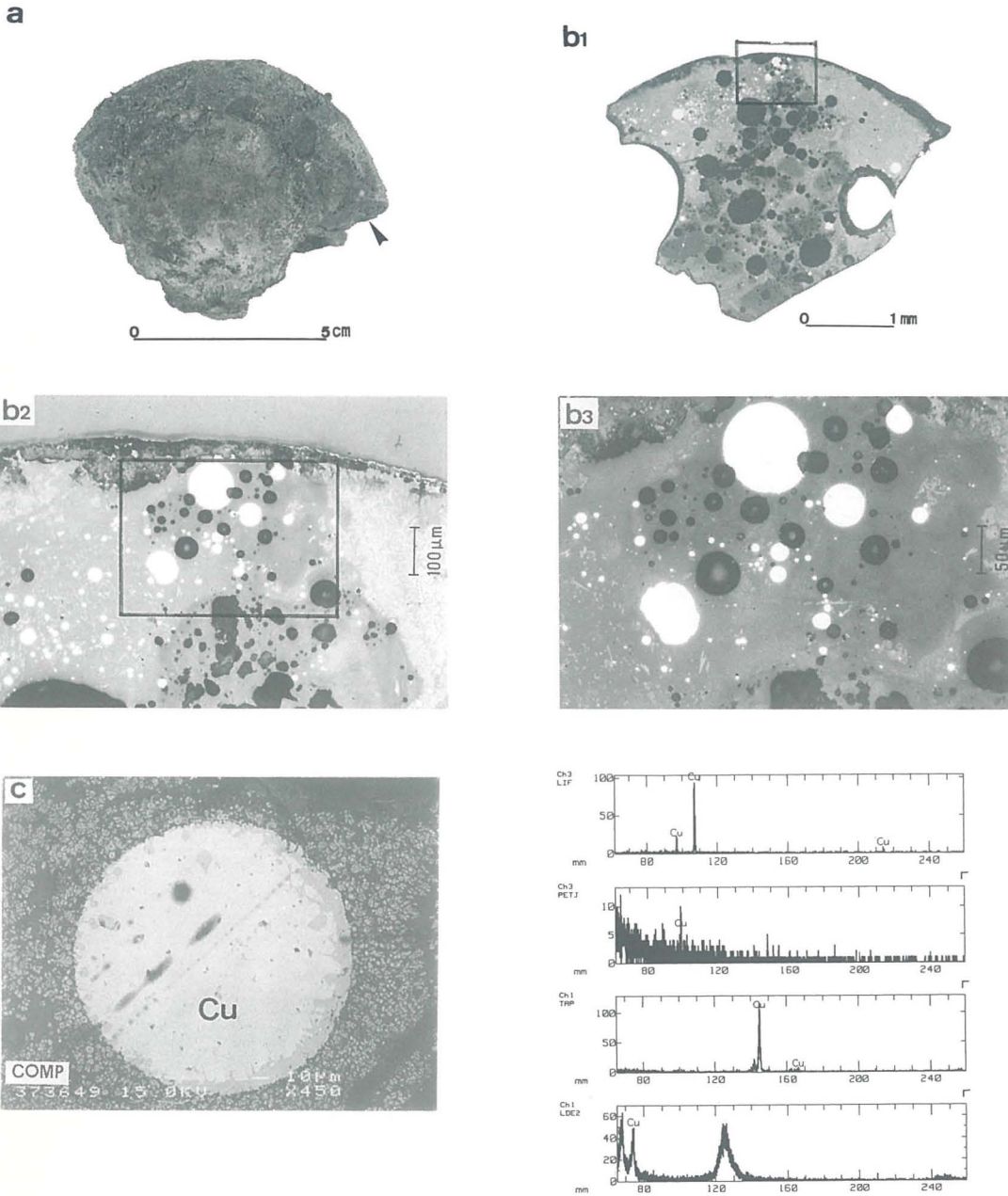


図5 No.15るつぼの外観と摘出した試料片の組織観察結果

- a ; 外観、矢印は試料片摘出位置。b<sub>1</sub> ; 摘出した試料片のマクロ組織。  
 b<sub>2</sub>・b<sub>3</sub> ; b<sub>1</sub>の枠で囲んだ内部のミクロ組織。  
 c ; EPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果

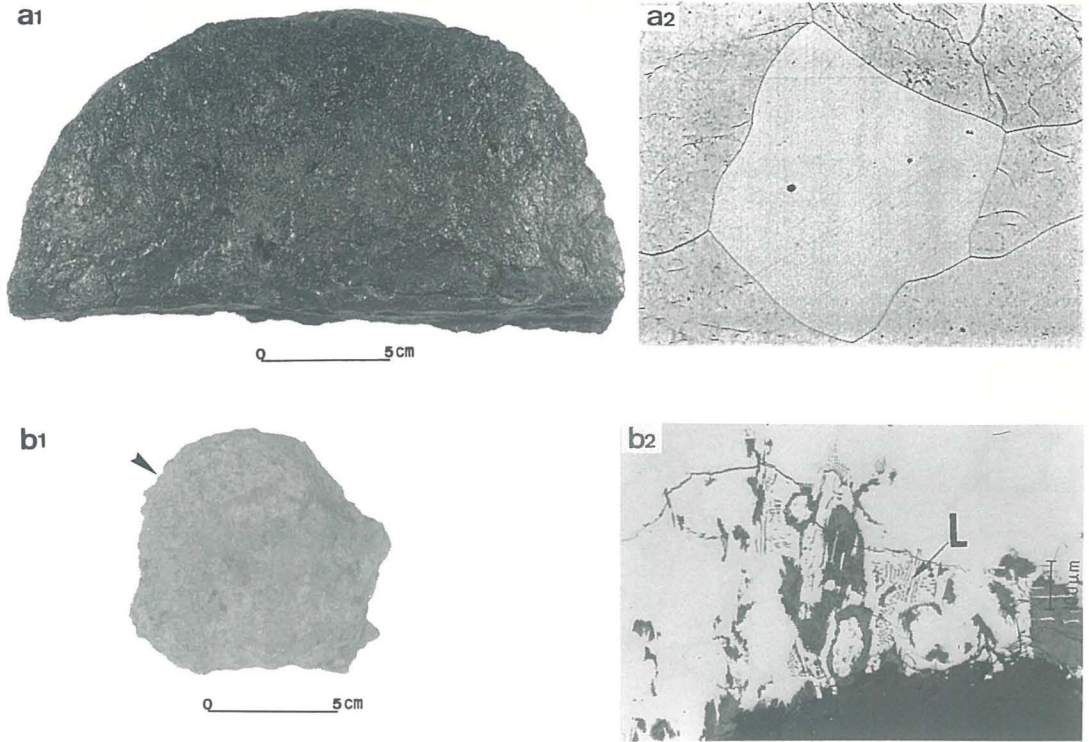


図6 半月形鉄塊ならびに鉄塊系遺物の外観と組織観察結果  
a<sub>1</sub>・a<sub>2</sub>;半月形鉄塊の外観と摘出した試料片の組織観察結果  
b<sub>1</sub>・b<sub>2</sub>;鉄塊系遺物の外観と摘出した試料片の組織観察結果  
L;レーデブライト組織

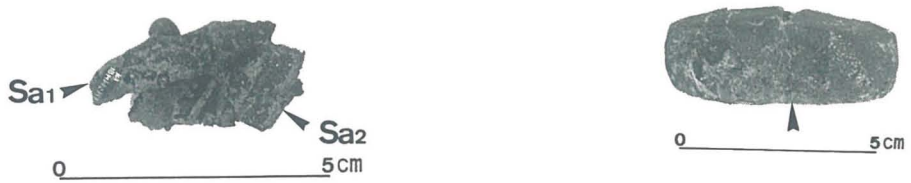


図7 銅もしくは銅合金塊と銅片の外観  
矢印は試料片摘出位置

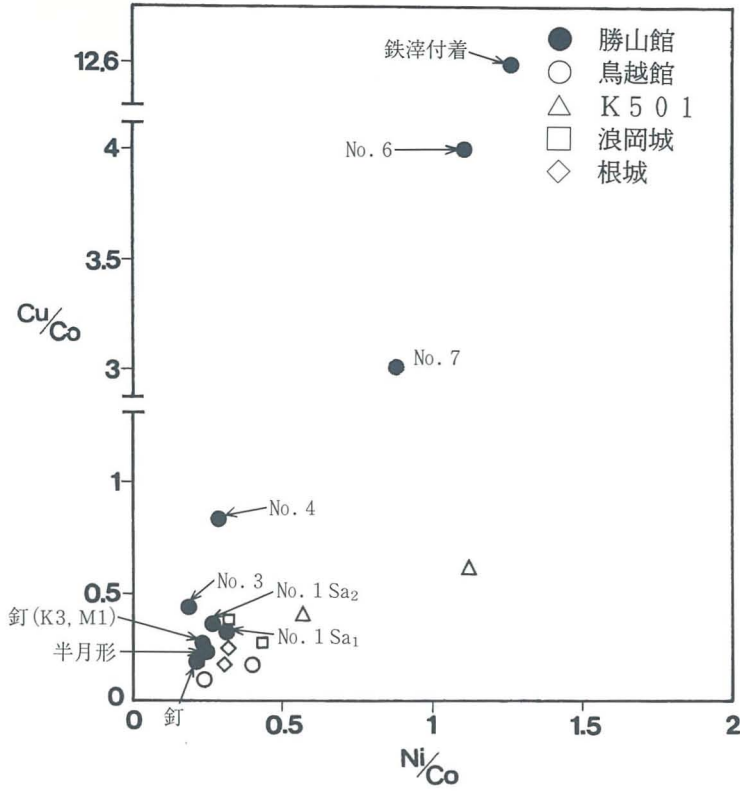


図 8 出土鉄器・鉄塊のCu, Ni, Co<sub>3</sub>成分比

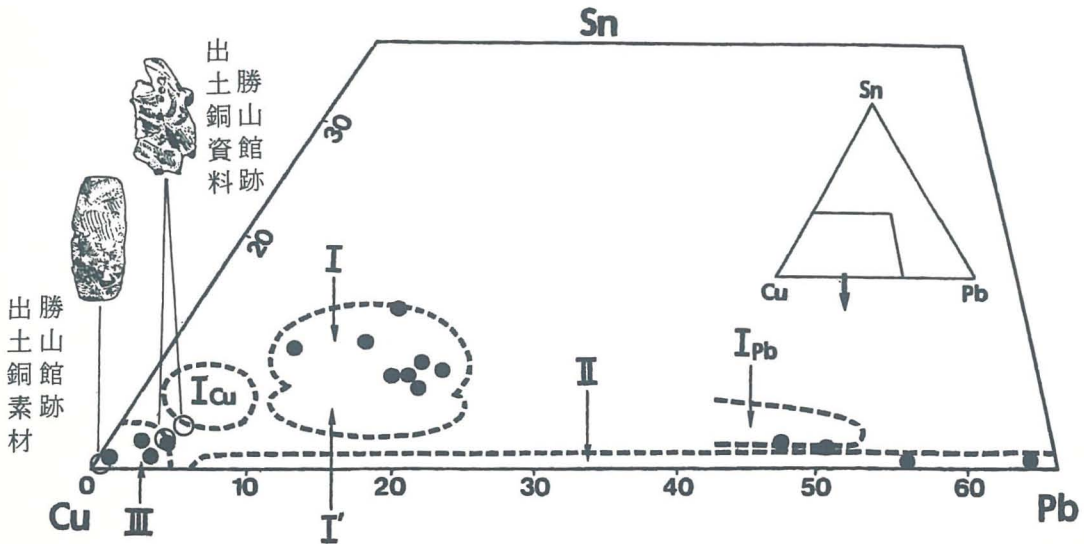
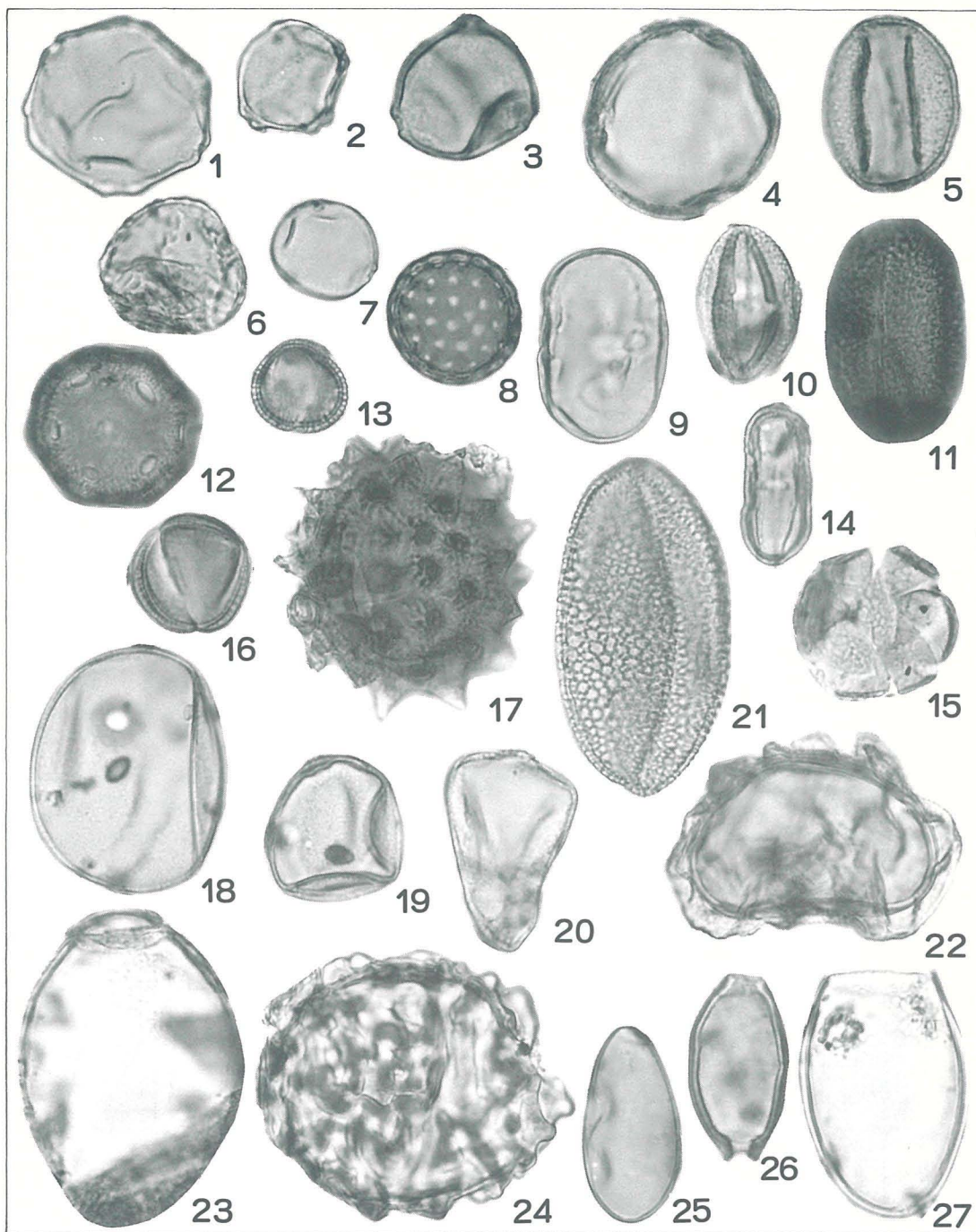


図 9 輸入明銭と国内模鑄銭の化学成分組成範囲の概念図



主な花粉・孢子と寄生虫卵 (×1200)

1. クルミ属, A-No.11, 2. ハンノキ属, A-No.16, 3. カバノキ属, A-No.14, 4. ブナ属, A-No.10, 5. コナラ亜属, A-No.22, 6. ニレ属, A-No.11, 7. クワ-イラクサ科, A-No.10, 8. アカザ科, A-No.10, 9・マメ科, A-No.8, 10. タデ科, A-No.10, 11. ソバ属, B-No.9, 12. ナデシコ科, A-No.14, 13. アブラナ科, A-No.4, 14. セリ科, B-No.8, 15. シソ科, A-No.12, 16. ヨモギ属, A-No.1, 17. キク亜科, B-No.12, 18. イネ科 (栽培種), A-No.5, 19. イネ科 (野生種) B-No.8, 20. カヤツリグサ科, A-No.10, 21. ユリ科, B-No.12, 22. シダ類, B-No.8, 23. 広節裂頭条虫卵?, B-No.3, 24. 回虫卵, A-No.3, 25. 吸虫類卵, B-No.15, 26. 鞭虫, A-No.17, 27. 不明寄生虫卵, A-No.6

# 報告書抄録

ふりがな	しせきかみのくにかつやまだてあと							
書名	史跡上之国勝山館跡 XXI							
副書名	平成11年度発掘調査環境整備事業概報							
巻次	21							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	松田輝哉 松崎水穂							
編集機関	上ノ国町教育委員会							
所在地	〒049-0614北海道檜山郡上ノ国町字大留100 01395-5-2230							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村名	遺跡番号					
かつやまだてあと 勝山館跡	かみのくにちようあざかみのくに 上ノ国町字上ノ国					平成11年 5月11日	350m <sup>2</sup>	環境整備 事業に伴う 調査
かつやまだてあとみやのさわがわ 勝山館跡宮ノ沢川 うがんちく 右岸地区	かみのくにちようあざかみのくに 上ノ国町字上ノ国	013625	C-02-40	41°48'	140°6'	10月21日		
いおうざんぼく 夷王山墳墓群 だいにちく 第II地区	かみのくにちようあざかつやま 上ノ国町字勝山	013625	C-02-2	41°48'	140°6'	10月4日 ～10月21 日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
勝山館跡	城館	中世	堀跡	青磁碗  鞆羽口	中心部から東200mの平坦地に、館の外郭の一部を形成すると推測される堀を検出。			
勝山館跡 宮ノ沢川右岸地区		中世後半 ～現代	土壙2基 沢跡 杭列 石積み	白磁・染付・瀬戸美濃・唐津碗・皿、珠洲・越前・備前播鉢、鉢、小柄、香炉、ガラス玉、樽、木筒、形代、イクバスイ、丸木弓、漆器碗・盆	宮ノ沢川旧川岸と推測される地点より、多数の木製品と陶磁器が出土。Ko-d (1640年降灰) の下層であることと出土遺物の年代から慶長期の遺物群と推測される。イクバスイ、丸木弓、シロシのある漆器、骨角器等、アイヌ文化遺物も同一層から出土。			
夷王山墳墓群第II地区	墓	中世	火葬墓4基 火葬施設1基	釘、銅銭	笹浪家住宅関連遺構では、明治改築時に積まれた主屋土台の石垣を検出。  地表観察で確認されていた以外に新たに4基の墓を確認。調査区西側の一部で中世の盛土を確認。			



---

## 史跡 上ノ国勝山館跡 X X I

—平成11年度発掘調査環境整備事業概報—

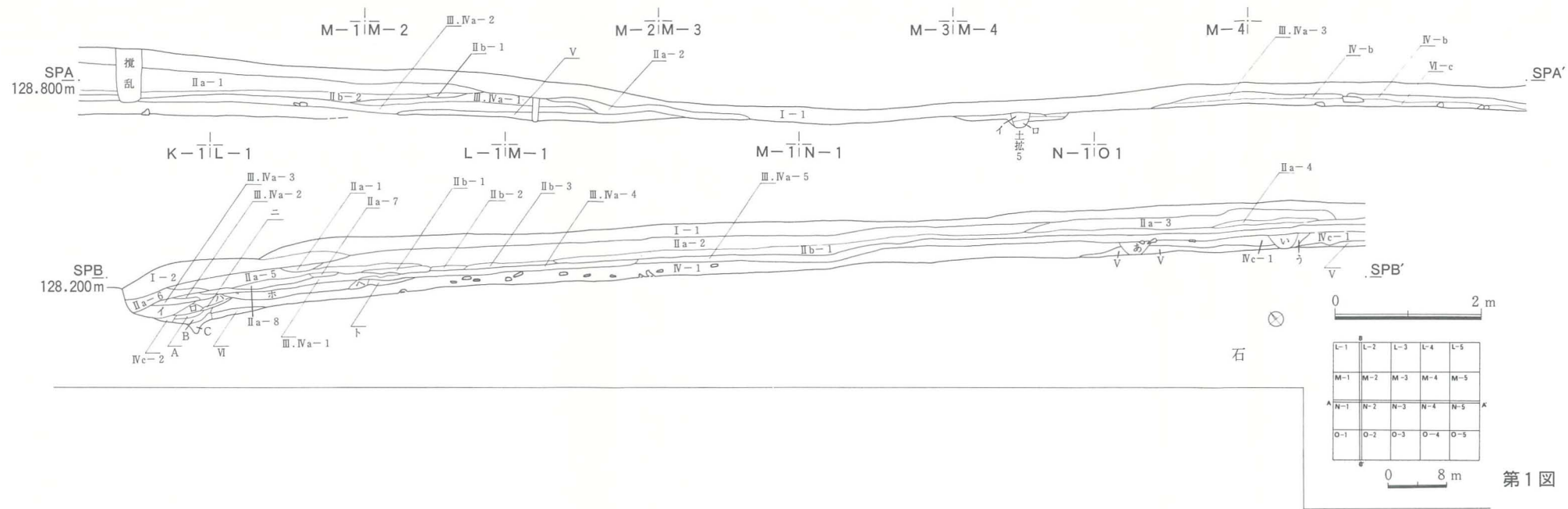
発 行 上ノ国教育委員会  
北海道松山郡上ノ国町字大留100  
印 刷 平成12年 3月27日  
発 行 平成12年 3月31日  
印刷所 富士プリント(株)

---

直 井 孝 一







第1図 調査区土層推積図2 (夷王山墳墓群第II地区)

表1 東西セクション南壁土層観察表 (A-A')

I-1	10YR	2/3	黒褐色土主体		ややソフト	
IIa-1	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	白色火山灰 (Ko-d) 微量		C微量
IIa-2	10YR	3/3	暗褐色土主体		ややソフト	
IIb-1	10YR	2/3	黒褐色土主体	白色火山灰 (Ko-d) 5%	ややソフト	
IIb-2	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	火山灰ブロック状に混じる	ソフト	
III・IVa-1	10YR	2/2	黒褐色土主体		ソフト	C微量
III・IVa-2	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ローム粒	ソフト	
III・IVa-3	10YR	2/2	黒褐色土主体		ややソフト	
IVb-1	10YR	4/4	褐色火山灰主体	褐色火山灰 (B-Tm) 50% + 10YR2/2黒褐色土	ソフト	
IVb-2	7.5YR	2/2	黒褐色土主体		ソフト	
IVc	10YR	3/4	暗褐色土主体		ややソフト	
土壌5イ	10YR	2/3	黒褐色土主体		ソフト	焼土粒微量
ロ	7.5YR	2/1	黒色土・炭化物主体		ソフト	炭化物多量

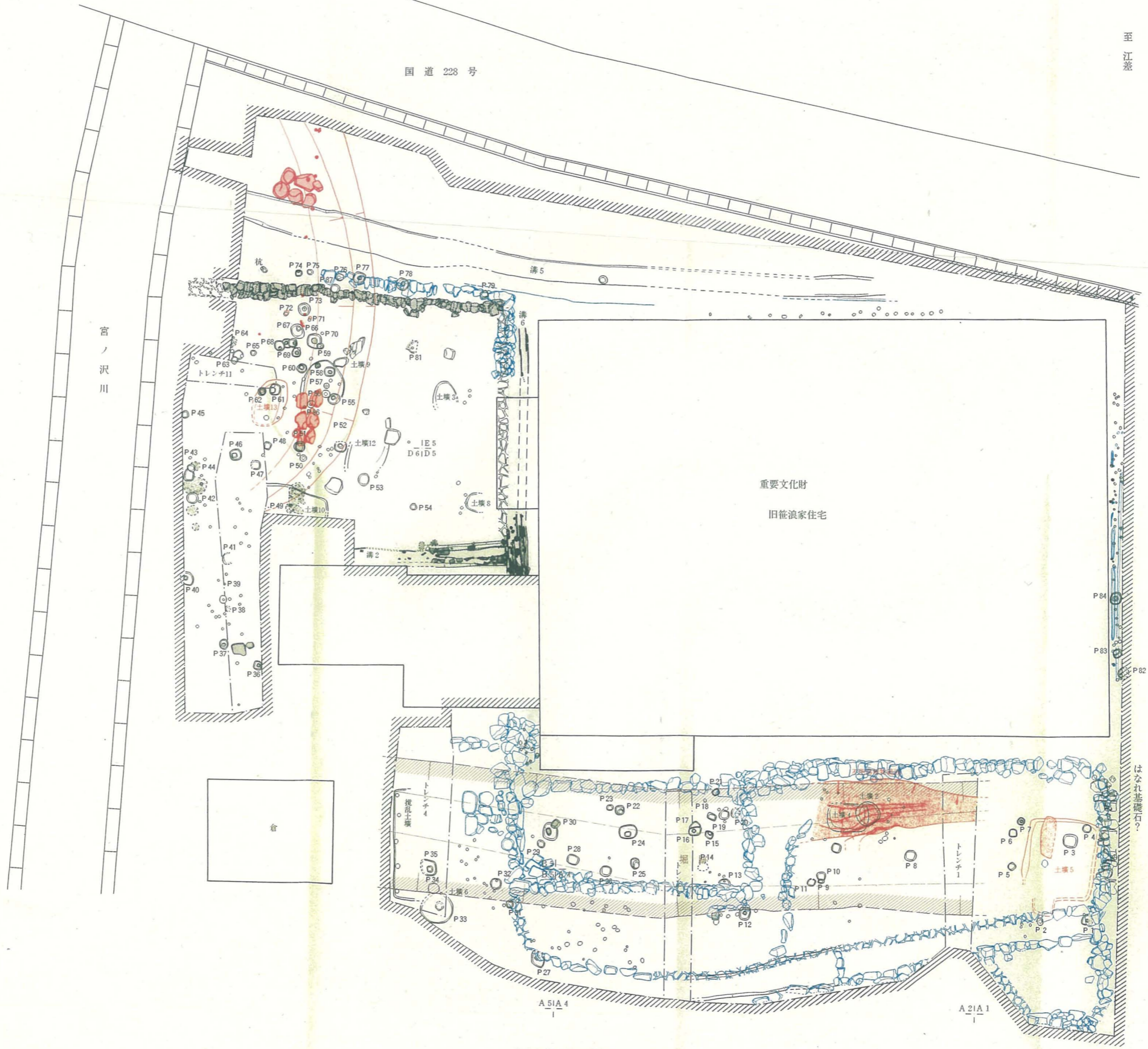
表2 南北セクション東壁土層観察表 (B-B')

I-1	7.5YR	4/3	褐色土主体	礫粒多量	ややソフト	焼土粒C
I-2	7.5YR	4/3	褐色土主体	礫粒多量基盤礫		焼土粒C
IIa-1	7.5YR	4/3	褐色土主体	礫粒多量基盤礫少量	ややハード	C
IIa-2	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒礫粒基盤礫	ややソフト	焼土粒C
IIa-3	7.5YR	3/4	暗褐色土主体	礫粒少量	ややソフト	焼土多量C多量
IIa-4	7.5YR	2/3	黒褐色土主体	礫粒多量	ややソフト	焼土粒C
IIa-5	7.5YR	4/3	褐色土主体	ソフトローム10YR6/3黄褐色火山灰少量	ややハード	
IIa-6	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ローム粒	ややソフト	C少量
IIa-7	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒微量		
IIa-8	7.5YR	4/3	褐色土主体	ローム粒	ハード	C少量
IIb-1	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ソフトローム混じる白色火山灰少量		
IIb-2	7.5YR	3/2	暗褐色土主体			
IIb-3	7.5YR	3/2	黒褐色土主体			

III・IVa-1	7.5YR	3/2	黒褐色土主体		ややソフト	
III・IVa-2	7.5YR	2/2	黒褐色土主体		ややソフト	
III・IVa-3	7.5YR	1.7/1	黒褐色土主体			
III・IVa-4	7.5YR	2/1	黒褐色土主体		ややソフト	
III・IVa-5	7.5YR	2/3	暗褐色土主体		ややソフト	
IVc-1	7.5YR	2/3	暗褐色土主体		ややソフト	
IVc-2	7.5YR	2/2	黒褐色土主体		ソフト	
V	7.5YR	4/4	褐色土主体		ハード	
VI	7.5YR	4/6	褐色土主体			
イ	7.5YR	2/2	黒色土主体			
ロ	7.5YR	4/3	褐色土主体			
ハ	7.5YR	3/3	暗褐色土主体			
ニ	7.5YR	3/2	黒褐色土主体			
ホ	7.5YR	2/2	黒褐色土主体			
ヘ	7.5YR	3/2	黒褐色土主体			
ト	7.5YR	2/2	黒褐色土主体			
あ	7.5YR	3/3	暗褐色土主体			
い	7.5YR	3/3	暗褐色土主体			
う	7.5YR	3/3	暗褐色土主体			
A	7.5YR	2/2	黒褐色土主体			
B	7.5YR	2/1	黒褐色土主体			
C	7.5YR	2/1	黒褐色土主体			



第2図 遺構配置図 (夷王山墳墓群第Ⅱ地区)



史跡上之國勝山館跡X I 附図 宮ノ沢川右岸地区遺構配置図

- 石
- 明治～昭和30年代前半の石垣
- 炭化物範囲
- 焼土範囲
- 溝
- 調査区範囲

